

若森社遺跡・南羽場遺跡

県営県単農道整備事業・本郷地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

上伊那地方事務所
飯島町教育委員会

若森社遺跡・南羽場遺跡

県営県単農道整備事業・本郷地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

上伊那地方事務所
飯島町教育委員会

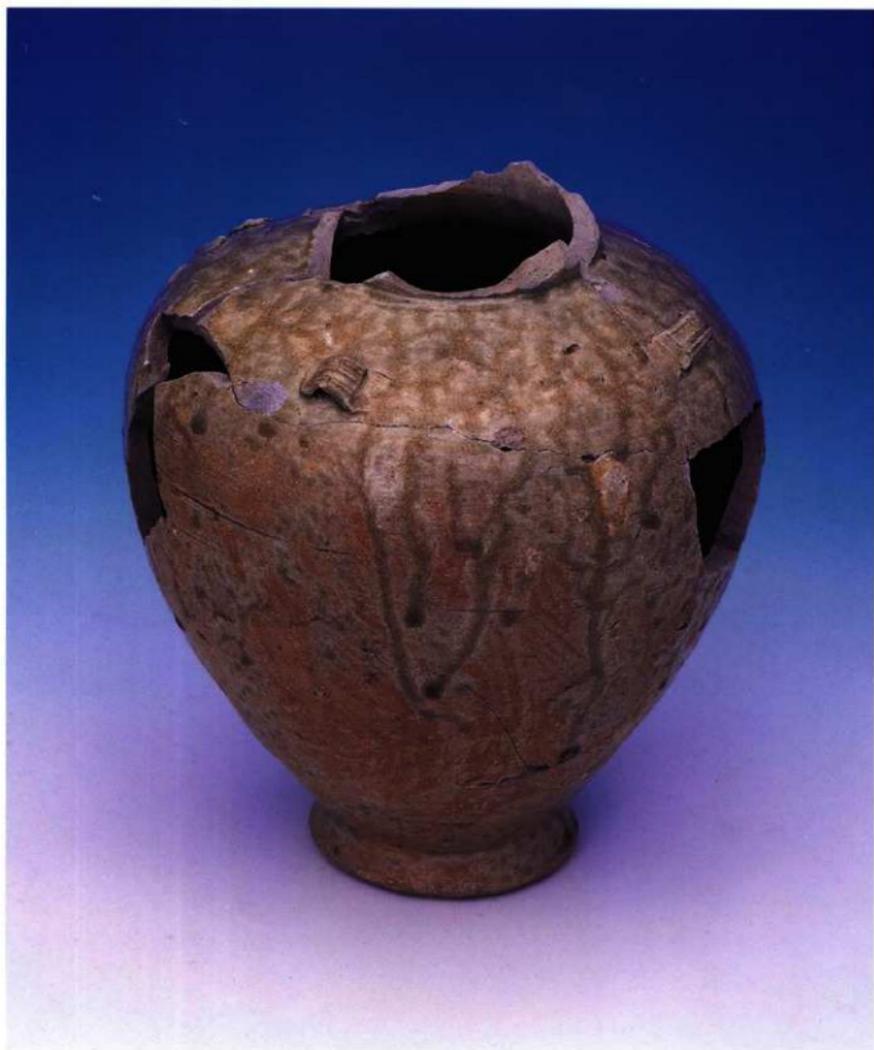


写真1 古瀬戸灰釉四耳壺（13世紀前半、若森社阿弥陀塔跡出土）



写真2 古瀬戸灰釉四耳壺（13世紀前半、若森杜阿弥陀塔跡出土）

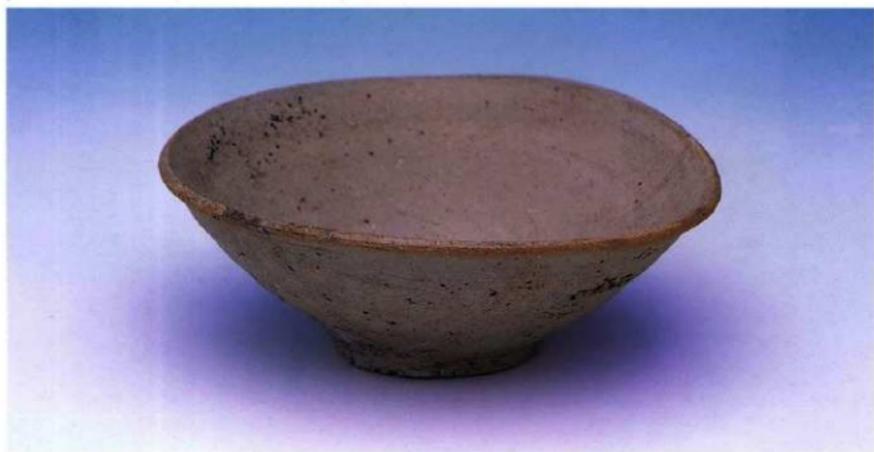


写真3 山茶碗（13世紀後半、南羽場Ⅳ区2号住居址伊伏遺構出土）



写真4 若森社・南羽場遺跡遠望（東から）



写真5 若森社遺跡・南羽場遺跡（東上空から）平成11年6月撮影。
若森社遺跡と南羽場遺跡Ⅰ～Ⅲ区は、すでに農道工事がおこなわれている。



写真6 土層調査トレンチT1

写真7 若森社遺跡（上空から）平成10年10月撮影。右上が北。



写真8 若森社遺跡発穴周辺（上空から） 平成10年10月。右やや上が北。



写真9 若森社遺跡（北上空から） 平成10年10月。奥が天竜川。



写真10 南羽場遺跡Ⅳ区（上空から）平成11年6月。右が北。



写真11 南羽場遺跡 (西上空から) 平成11年6月。1～3区はすでに農道工事がおこなわれている。



写真12 南羽場遺跡から飯島城本城方向を望む 平成11年6月。奥の段丘崖上が飯島城本城。



写真13 阿弥陀塔と五輪塔 昭和40年代後半



写真14 阿弥陀塔の下から発見された経文石



写真15 阿弥陀塔の下から発見された陶器



写真16 現地説明会（南羽場Ⅳ区）



写真17 発掘調査風景（若森社遺跡）

発刊にあたって

飯島町本郷区は、天竜川による河岸段丘が発達した地域で、これまで地区内を東西に抜けるには昔ながらの狭い坂道を上り下りするしかありませんでした。この悩みを解消するため、本郷区ではいよいよ農道整備事業（「県営県単農道整備事業・本郷地区」）がスタートしました。

ところが、本郷区は飯島町でも埋蔵文化財の宝庫の一つで、例えばJR本郷駅付近からは、縄文時代の住居跡がいくつも発掘されていますし、飯島城やその周辺には、鎌倉時代から400年間にわたって近隣にまで力を及ぼした飯島氏に関する遺跡もあるとみられています。

今回整備される道は、こうした地区を突き抜けるため、どうしても遺跡に引っかかってしまいます。平成10・11年度竣工分が、若森社遺跡・南羽場遺跡の2ヶ所の遺跡を通過することとなったため、関係機関が協議をおこないました。遺跡は壊すことなく保存できればよいのですが、現在生きるわれわれの暮らしを便利にすることと、埋蔵文化財を保存することは相反する場合があります。今回は、やむをえない手段として記録によって保存する、いわゆる記録保存という方法が選ばれました。破壊される前に発掘調査を実施し、地下に埋まった文化財を記録として後世に残すことになったのです。

調査は、2年間という限られた時間でおこない、調査員・作業員の皆様には、現地調査から整理作業までたいへんのご努力をいただきました。また、この間には大勢の方々にご指導・ご助言・ご協力を賜り、地元の皆様にも多大なご理解・ご協力をちょうだいしました。その結果、鎌倉時代から室町時代の建物の跡や陶磁器類を中心として、多数の遺構や遺物が見つかり、ここに本書が成りました。関係されました各位に、心から感謝を申し上げます。

完成すると「ふるさと農道」と呼ばれるこの道は、道路としての効果はもちろんですが、発掘調査によって、ふるさとの歴史を探る材料をもたらしてくれたとも言えます。今後、この成果をもとに、地域の歴史研究が大いに発展することを願ってやみません。

飯島町教育委員会

例 言

- 1 本書は、県営県単農道整備事業・本郷地区にともない、平成10～11年度に実施した若森社遺跡・南羽場遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、飯島町が上伊那地方事務所より委託を受け、飯島町教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆は、丸山浩隆・寺平 宏・中島淑雄・倉沢敏一・太田 保が分担し、本文目次に執筆者名を記した。編集は、丸山浩隆がおこなった。遺物・遺構の実測図は、倉沢敏一・太田保が作成した。
- 4 主要参考文献を本文末尾に記した。本文の記述に直接関わるものについては、本文中に「〔文献1〕」のようにしてその文献を示した。
- 5 本文中の「青磁」「白磁」の記述は、すべて中国産の貿易陶磁器を意味する。
- 6 遺構の位置や遺物の出土地点は、ローマ字とアラビア数字による方眼で示した。若森社遺跡は図11、南羽場遺跡Ⅰ・Ⅱ区は図22、Ⅲ・Ⅳ区は図28、Ⅴ区は図29で確認できる。
- 7 遺物実測図では、中心線が口縁や底部の横線と接していない場合、180°回転させた復原実測を意味する。
- 8 本調査の出土品・記録類は飯島町教育委員会が保管している。

本文目次

発刊にあたって

例言

第1章 調査の経過と体制	(丸山浩隆)	1
1 保護協議と調査の経過		1
2 調査体制		2
第2章 地形・地質と周辺の歴史		3
1 遺跡の位置	(丸山浩隆)	3
2 地形・地質	(寺平 宏)	3
(1) 本郷地籍の地形概観		3
(2) 遺跡の基盤岩および礫層		5
(3) 若森社面・南羽場面の形成		5
3 調査地周辺の歴史	(中島淑雄)	6
(1) 原始・古代の本郷		6
(2) 中世の本郷		6
(3) 中世の若森社・南羽場遺跡に関する従来の研究		9
第3章 若森社遺跡		11
はじめに	(倉沢敏一)	11
1 遺 構		11
(1) 建物址	(倉沢敏一)	11
(2) 土 坑	(倉沢敏一)	13
(3) 柱 穴	(倉沢敏一)	16
(4) 風倒木痕	(倉沢敏一)	17
(5) 弥生時代の単独出土の埋甕	(太田 保)	17
2 遺 物		17
(1) 縄文時代の遺物	(太田 保)	17
(2) 弥生時代の遺物	(太田 保)	18
(3) 古代の遺物	(倉沢敏一)	18
(4) 中世の遺物	(倉沢敏一)	18
3 阿弥陀塔跡出土遺物	(倉沢敏一)	20
4 遺跡の特徴	(倉沢敏一・太田 保)	21
第4章 南羽場遺跡		23
はじめに	(太田 保)	23
1 遺 構		24
(1) I 区	(太田 保)	24

(2) II 区	(太田 保)25
(3) III 区	(太田 保)25
(4) IV 区	(倉沢敏一)26
(5) V 区	(倉沢敏一)31
(6) VI 区	(倉沢敏一)32
2 遺物32
(1) I 区	(太田 保)32
(2) II 区	(太田 保)33
(3) III 区	(太田 保)35
(4) IV 区	(倉沢敏一)35
(5) V 区	(太田 保・倉沢敏一)36
(6) VI 区	(倉沢敏一)37
3 遺跡の特徴	(I～III区:太田 保・IV～VI区:倉沢敏一)37

第5章 ま と め (丸山浩隆) 40

主要参考文献	42
--------	-------	----

表 目 次

表1 本郷の段丘面4	表4 南羽場柱穴・柱跡一覧47
表2 若森社竪穴出土遺物13	表5 若森社出土遺物一覧53
表3 若森社竪穴周辺柱穴一覧43	表6 南羽場出土遺物一覧57

図 目 次

図1 農道整備用地と周辺の遺跡(1:20,000)1	図17 若森社土坑実測図(1)(1:40)69
図2 遺跡の位置(1:50,000)3	図18 若森社土坑実測図(2)(1:40)70
図3 本郷の段丘面区分図4	図19 若森社土坑実測図(3)(1:40)71
図4 図3A-Bの地質断面図4	図20 若森社土坑実測図(4)(1:40)72
図5 土層調査用トレンチ位置図5	図21 若森社弥生時代の単独出土の埋没実測図 (1:20)72
図6 土層柱状図5	図22 南羽場I・II区略図(1:480)73
図7 中世の本郷想像図8	図23 南羽場I区実測図(1:87)73
図8 本郷の小字名9	図24 南羽場I区輪厩い石積土坑実測図(1:40)73
図9 若森社遺跡調査範囲略図(1:2,500)11	図25 南羽場I区竪穴状遺構実測図(1:60)73
図10 南羽場遺跡調査範囲略図(1:2,500)23	図26 南羽場II区建物址実測図および掘乱状態図 (1:160)74
図11 若森社遺跡全体図(1:160)63・64	図27 南羽場II区堀状遺構実測図(1:100)74
図12 若森社柱穴群配置図(1:260)65	図28 南羽場III・IV区全体図(1:120)75・76
図13 若森社竪穴周辺柱穴群柱穴配置図(1:110.5)66	図29 南羽場V区全体図(1:120)75・76
図14 若森社竪穴上部・下部配石図(1:80)67	図30 南羽場III区土間状遺構と竪穴柱穴実測図(1:60)77
図15 若森社竪穴実測図(1:80)68		
図16 若森社竪穴内遺物分布図(1:80)68		

図31 南羽場IV区1・4・5号住居址実測図および周辺柱穴配置図(1:80)……………78	図42 若森社・南羽場出土石器実測図②(1:3)……88
図32 南羽場IV区1号住居址上部・下部配石図(1:80)…79	図43 若森社出土陶磁器実測図(1:3)……89
図33 南羽場IV区2号・3号住居址実測図および周辺柱穴・土坑配置図(1:80)……………80	図44 若森社出土陶器・砥石・鉄製品実測図(1:3)…90
図34 南羽場IV区孤立柱建物実測図(1:80)…81	図45 若森社出土鉄製品・阿弥陀塔跡出土陶器実測図(1:3、銭貨のみ1:1)……………91
図35 南羽場IV区竪穴状遺構実測図(1:80)…82	図46 南羽場II区出土石器実測図(1:3)…92
図36 南羽場IV区土坑実測図①(1:40)……82	図47 南羽場出土陶器実測図(1:3)……………93
図37 南羽場IV区土坑実測図②(1:40)……83	図48 南羽場出土陶器・砥石・鉄製品実測図(1:3)…94
図38 南羽場V区遺構実測図(1:40)……………84	図49 南羽場V区出土縄文土器実測図(1:4)…94
図39 南羽場VI区全体図および遺構実測図(1:120、1:40)……………85	図50 各調査区の年代別遺物指数……………95
図40 若森社出土土器実測図および拓影(1:3、1:4)…86	図51 南羽場国道部分(昭和47年調査)の年代別遺物点数と遺物構成……………95
図41 若森社・南羽場出土石器実測図①(2:3)……87	図52 各調査区の出土陶磁器・中世土器構成…95

写真目次

巻頭図版

写真1 古瀬戸灰釉四耳壺(13世紀前半、若森社阿弥陀塔跡出土)	写真19 若森社竪穴上部配石
写真2 古瀬戸灰釉四耳壺(13世紀前半、若森社阿弥陀塔跡出土)	写真20 若森社竪穴下部配石(西から)
写真3 山茶碗(13世紀後半、南羽場IV区2号住居址炉状遺構出土)	写真21 若森社竪穴周辺(南西から)
写真4 若森社・南羽場遺跡遠望	写真22 若森社竪穴断面と下部配石(北東から)
写真5 若森社遺跡・南羽場遺跡(東上空から)	写真23 若森社竪穴上部竹垣状遺構
写真6 土層調査トレンチT1	写真24 若森社土坑6
写真7 若森社遺跡(上空から)	写真25 若森社土坑9配石
写真8 若森社遺跡竪穴周辺(上空から)	写真26 若森社土坑26・27・28・29(南東から)
写真9 若森社遺跡(北上空から)	写真27 若森社土坑27
写真10 南羽場遺跡IV区(上空から)	写真28 若森社土坑27断面
写真11 南羽場遺跡(西上空から)	写真29 若森社土坑30
写真12 南羽場遺跡から飯島城本城方向を望む	写真30 若森社土坑31
写真13 阿弥陀塔と五輪塔	写真31 若森社土坑32
写真14 阿弥陀塔の下から発見された経文石	写真32 若森社柱穴17鉄製品出土状況
写真15 阿弥陀塔の下から発見された陶器	写真33 若森社柱穴59
写真16 現地説明会(南羽場IV区)	写真34 若森社柱穴86遺物出土状況
写真17 発掘調査風景(若森社遺跡)	写真35 若森社柱穴124遺物出土状況
図版	写真36 若森社弥生埋甕周辺の土坑(西から、土坑12・13・14・15・16)
写真18 若森社竪穴上部配石(北西から)	写真37 若森社弥生埋甕

写真19 若森社竪穴上部配石	写真38 若森社弥生埋甕断面
写真20 若森社竪穴下部配石(西から)	写真39 南羽場I区輪廻い石横土坑
写真21 若森社竪穴周辺(南西から)	写真40 南羽場II区礎石をともなう建物址(西から)
写真22 若森社竪穴断面と下部配石(北東から)	写真41 南羽場II区柱跡5・11・12・13(E列、南から)
写真23 若森社竪穴上部竹垣状遺構	
写真24 若森社土坑6	
写真25 若森社土坑9配石	
写真26 若森社土坑26・27・28・29(南東から)	
写真27 若森社土坑27	
写真28 若森社土坑27断面	
写真29 若森社土坑30	
写真30 若森社土坑31	
写真31 若森社土坑32	
写真32 若森社柱穴17鉄製品出土状況	
写真33 若森社柱穴59	
写真34 若森社柱穴86遺物出土状況	
写真35 若森社柱穴124遺物出土状況	
写真36 若森社弥生埋甕周辺の土坑(西から、土坑12・13・14・15・16)	
写真37 若森社弥生埋甕	
写真38 若森社弥生埋甕断面	
写真39 南羽場I区輪廻い石横土坑	
写真40 南羽場II区礎石をともなう建物址(西から)	
写真41 南羽場II区柱跡5・11・12・13(E列、南から)	

- 写真42 南羽場Ⅱ区柱跡10
- 写真43 南羽場Ⅱ区柱跡7
- 写真44 南羽場Ⅱ区柱跡17
- 写真45 南羽場Ⅱ区柱跡13
- 写真46 南羽場Ⅲ区調査風景（北東から）
- 写真47 南羽場Ⅳ区1号住居址上部配石（北から）
- 写真48 南羽場Ⅳ区1号住居址下部配石（北から）
- 写真49 南羽場Ⅳ区1号住居址（北東から）
- 写真50 南羽場Ⅳ区1号住居址炉状遺構
- 写真51 南羽場Ⅳ区2号住居址（南西から）
- 写真52 南羽場Ⅳ区2号住居址炉状遺構
- 写真53 2号住居址炉状遺構山茶碗出土状況
- 写真54 南羽場Ⅳ区3号住居址（北から）
- 写真55 南羽場Ⅳ区5号住居址（北から）
- 写真56 南羽場Ⅳ区1号竪穴状遺構
- 写真57 南羽場Ⅳ区土坑1
- 写真58 南羽場Ⅳ区土坑2
- 写真59 南羽場Ⅳ区土坑3
- 写真60 南羽場Ⅳ区土坑4
- 写真61 南羽場Ⅳ区土坑5
- 写真62 南羽場Ⅳ区土坑8
- 写真63 南羽場Ⅳ区土坑9・13（南東から）
- 写真64 南羽場Ⅳ区土坑10・11（北から）
- 写真65 南羽場Ⅴ区東廻（西から）
- 写真66 南羽場Ⅴ区溝状遺構と土坑1（東から）
- 写真67 南羽場Ⅴ区土坑1
- 写真68 南羽場Ⅴ区土坑2
- 写真69 南羽場Ⅴ区縄文土器出土状況
- 写真70 南羽場Ⅴ区西端部黒色土・礎堆積状況（東から）
- 写真71 南羽場Ⅴ区尖頭器出土状況
- 写真72 南羽場Ⅴ区石器出土状況
- 写真73 南羽場Ⅵ区トレンチ（西から）
- 写真74 南羽場Ⅵ区陶器片出土状況
- 写真75 南羽場Ⅵ区溝状遺構（東から）
- 写真76 南羽場Ⅵ区東端の不明遺構（東から）
- 写真77 若森社出土古瀬戸製品
- 写真78 若森社出土青磁
- 写真79 若森社出土青磁・白磁片
- 写真80 若森社出土山茶碗・小皿
- 写真81 若森社出土中津川産甕
- 写真82 若森社出土常滑産甕
- 写真83 南羽場Ⅰ区出土陶磁器
- 写真84 南羽場Ⅰ・Ⅱ区出土祖母懷茶壺・鉄釉陶器
- 写真85 南羽場Ⅱ区出土灰釉を施した陶器・山茶碗・片口鉢・甕
- 写真86 南羽場Ⅱ区出土中国産染付・灰釉を施した陶器
- 写真87 南羽場Ⅱ区出土天目茶碗・灰釉を施した陶器
- 写真88 南羽場Ⅲ区出土陶器
- 写真89 南羽場Ⅳ区出土陶器（1号住居址中心）
- 写真90 南羽場Ⅳ区出土陶磁器（3号住居址など）
- 写真91 南羽場Ⅴ区表採・Ⅵ区出土陶磁器
- 写真92 南羽場Ⅴ区出土尖頭器
- 写真93 南羽場Ⅴ区出土二次加工のある黒曜石刻片
- 写真94 南羽場Ⅱ区ほか出土石製品
- 写真95 若森社・南羽場出土銭貨
- 写真96 若森社出土弥生土器
- 写真97 若森社出土土器類（弥生・古代・中世）
- 写真98 若森社出土片口鉢・播鉢
- 写真99 南羽場Ⅰ区出土播鉢・甕・石製品
- 写真100 南羽場Ⅱ区出土香炉・片口鉢・播鉢
- 写真101 南羽場Ⅱ区出土甕・内耳鉢
- 写真102 南羽場Ⅳ・Ⅴ区出土山茶碗・片口鉢・土器
- 写真103 南羽場Ⅳ区出土甕
- 写真104 南羽場Ⅳ・Ⅴ区出土土器類
- 写真105 若森社出土磁石
- 写真106 南羽場Ⅱ区出土石製品
- 写真107 南羽場Ⅱ・Ⅳ区出土磁石・石製品
- 写真108 南羽場Ⅳ区出土磁石刻片
- 写真109 若森社出土鉄釘
- 写真110 若森社出土鉄滓
- 写真111 若森社出土鉄製品
- 写真112 南羽場Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区出土鉄製品
- 写真113 南羽場Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区出土鉄製品・鉄滓
- 写真114 南羽場Ⅵ区2号住居址炉状遺構出土鐵造刻片
- 写真115 若森社出土石器
- 写真116 若森社出土石器
- 写真117 若森社出土スクレイパー
- 写真118 若森社出土尖頭器
- 写真119 南羽場Ⅴ区出土縄文土器
- 写真120 若森社出土縄文土器
- 写真121 若森社出土縄文土器片
- 写真122 若森社出土縄文土器片・土製円板

第1章 調査の経過と体制

1 保護協議と調査の経過

調査の原因事業 飯島町本郷区の県営早農道整備事業は、中川村との境である天竜川の飯沼橋西と飯島町本郷の国道153号西約100mとの間に、現道の拡幅や新設によって新しい道路を建設する事業である。この農道整備によって、2ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が破壊されることとなった。天竜川から段丘を上ったところの「若森社遺跡」、さらに1段上がったところの「南羽場遺跡」である。

保護協議と試掘調査 平成9年9月26日、長野県教育委員会・飯島町教育委員会と事業者である上伊那地方事務所との3者で埋蔵文化財の保護について協議をおこない、平成10年度に着工予定の若森社遺跡と、南羽場遺跡の国道153号以東（調査区はI区・II区）について、試掘調査を実施することとなった。平成10年7月10日、事業者と飯島町教育委員会で調査について打ち合わせをおこない、同年8月17日に若森社遺跡の試掘調査を開始した。試掘調査では、中世陶器・柱穴を多数検出した。南羽場遺跡については、8月24日から試掘調査をおこない、柱穴を多数検出した。このため、8月28日、再度上記3者で協議をおこない、両遺跡ともに本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査の経過 平成10年8月31日、まず若森社遺跡から本発掘調査を始め、9月18日からは半分けて南羽場遺跡でも開始した。若森社遺跡からは、鎌倉～室町時代の陶磁器片が多数出土し、大型の獨立

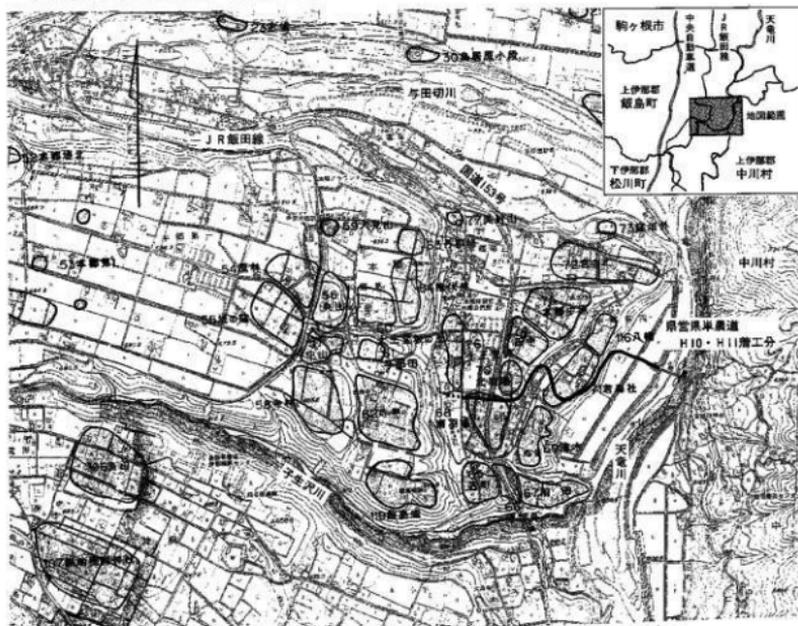


図1 農道整備用地と周辺の遺跡 (1:20,000)

柱建物の跡などが見つかった。同年10月4日、若森社遺跡の現地説明会を開催し、約50人が参加した。

当初平成11年度に着工予定だった国道153号以西のうち、国道との交差点南西隅切部分の工事が平成10年度追加発注となったことから、急ぎよ平成10年11月4日、この部分（調査区はIII区）の発掘調査を開始した。この年の発掘調査は11月22日に終了し、以後は飯島町文化館で整理作業に入った。

現る国道153号交差点隅切部分より西について、平成10年10月8日に上記3者で保護協議をおこない、この部分（調査区はIV区・V区）については、工事予定地の道路拡幅部分を全面発掘調査することとなった。平成11年5月17日から調査に入り、主に鎌倉～室町時代の陶磁器や建物跡などを検出した。同年6月28日、調査地で再度3者による協議をおこない、調査地の西端から縄文土器が出土したため、当初予定していた区域より西側（調査区はVII区）についても調査することとなった。7月10日、南羽場遺跡の現地説明会を開催して約40人が見学に訪れ、すべての現地調査は同年7月28日に終了し、以後飯島町文化館で整理作業に入った。

2 調査体制

飯島町が、事業者である上伊那地方事務所から委託を受け、飯島町教育委員会が発掘調査をおこなった。

調査責任者 飯島町教育委員会教育長：片桐 俊

調査担当課・係 社会教育課課長：高坂 浩 文化係長：堀越和己

調査員 丸山浩隆（主任） 太田 保 倉沢敏一 中島淑雄

作業員 社団法人駒ヶ根伊南広域シルバー人材センター：新井正雄 荒関とみえ 打木 栄
浦野常寿 大木島一雄 大西朝雄 小椋福雄 片桐一雄 片桐 豊 鎌倉秀夫 北原
静江 小林武雄 近藤光春 佐々木敏郎 齊藤正子 藤井いなえ 松村宗治 宮沢政
江 宮下春男 山田一夫

重機オペレーター：富永吉国（㈱宮下建設）

記録整理：吉沢のり子

指導・協力者 発掘調査指導：原 明芳（長野県教育委員会） 伊藤 修 友野良一

（敬称略） 地質調査：寺平 宏

遺物鑑定指導：藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター） 青木 修（同）

遺物写真撮影：唐木孝治

空中写真撮影：㈱ジャステック…若森社遺跡 ㈱みすず総合コンサルタント…南羽場
遺跡

ビデオ撮影：三石 繁

測量：御共測

上記の指導・協力者は、飯島町教育委員会が依頼して指導・協力をいただいた方々だが、このほか、赤羽洋洋・飯塚政美・府木孝雄・気賀沢 進・木下平八郎・小池 孝・河野通昭・小平和夫・友松 諭・林茂樹・稲島 永・本川秀明・松島高根・滝沢匡行の各氏からも、貴重な指導・助言を賜った。（敬称略）

第2章 地形・地質と周辺の歴史

1 遺跡の位置

若森社遺跡・南羽場遺跡は、長野県上伊那郡飯島町本郷区にある。飯島町本郷区は、天竜川の右岸（西）に位置し、西にそびえる中央アルプスから天竜川に流れ込む与田切川と生沢に挟まれた地域である。

今回調査をおこなった区域の地番は、若森社遺跡が飯島町本郷552番地、南羽場遺跡が飯島町本郷280-1、同281-1、同281-2、同281-4、同313-1、同314-1、同315-1番地である。両遺跡の間は、直線距離はわずかだが、天竜川の浸食による約20mの段丘で隔てられている。

標高は、若森社遺跡の調査地が546m、南羽場遺跡の調査地は567～568mである。



図2 遺跡の位置 (1:50,000)

2 地形・地質

(1) 本郷地籍の地形概観

本郷地籍の地形は、よく「ひな壇状の段丘」とたとえられる。図3のとおり、天竜川の流れる面を含めると、不規則ながら階段状に6段の面がある。この地形は、およそ次のように形成された（文献3）。

- 250万年前ごろ、断層の活動によって谷ができ、天竜川が流れ始めた。これが伊那谷のはじまりである。
- 100万年前ごろ、中央アルプスの隆起が始まって、西から天竜川に注ぐ与田切川が流れ始め、天竜川の西側に扇状地が形成されるようになった。つまり、それまでに天竜川が上流から運んで形成した礫層の上に、与田切川による礫層が堆積するようになった。天竜川はこれに押されて東側を流れるようになった。
- およそ4万年前・3万年前・2万年前・1万年前ごろに、それぞれ土地が隆起した。天竜川は、土地が隆起するたびに扇状地の扇端部を浸食し、さらにそれによって生じた段丘面を繰り返し浸食した。与田切川も、土地を一部浸食した。その結果、本郷地籍に河岸段丘が形成された。
- 天竜川による浸食を受けなかった最も高い面は、3万年前ごろから断層（田切断層）の活動によっ

て西部が持ち上げられるようになった。

こうして、本郷には現在の6段の地形ができた。各面の土壌は、河川の営みにくわえ、風によって運ばれた火山灰が降り積もってできている。

本報告書では、標高の低い面から高い面へ①面～⑥面と呼ぶことにする。なお、若森社遺跡が位置する③面については若森社面、南羽場遺跡が位置する④面は南羽場面とも呼ぶ。

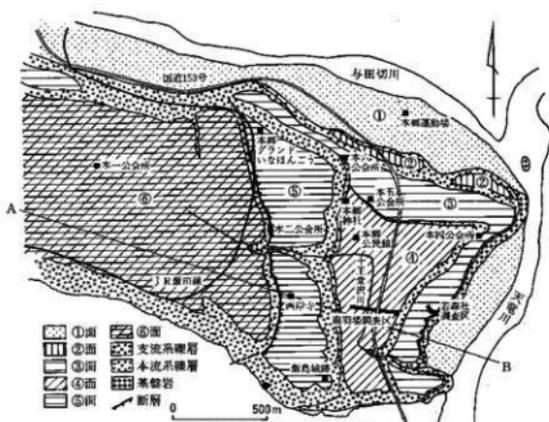


図3 本郷の段丘面区分図



図4 図3 A-Bの地質断面図

表1 本郷の段丘面

面	現在ある地名・施設など	地形の形成
⑥面	本郷第1耕地 (西側の七久保区も同じ面)	⑤面が、3万年前ごろから田切断層の活動によって持ち上げられた面。与田切川による礫層の上に10万年前以降に降ったテフラ(火山灰や軽石=現在見る赤土の層)が載っている。
⑤面	本郷第2耕地 西岸寺 JR本郷駅	⑥と同様、十数万年前までに形成された与田切川による扇状地面。与田切川による礫層の上に10万年前以降に降ったテフラが載っている。
④面	本郷第3耕地(一部) 本郷第5耕地 本郷公民館 南羽場遺跡	9～4万年前に、⑤面を天竜川が浸食してできた面。与田切川による礫層が削り取られ、天竜川による礫層の上に、4万年前以降に降ったテフラが載っている。
③面	本郷第4耕地 本郷第3耕地(一部) 本郷第6耕地(一部) 若森社遺跡	4～3万年前ごろまでに、④面を与田切川や天竜川が浸食した面。若森社遺跡付近では、④面より約20m低い。南東側では、段丘先端部を中心に、天竜川による礫層の上に2.5万年前以降に降ったテフラがごく薄く載っている。北側の与田切川沿いだけでなく、若森社遺跡付近でも、④面との段丘崖沿いには、与田切川から流れ込んだ土砂が流入している。
②面	崖垣外	2万年前以降に、③面を与田切川が浸食してできた面。
①面	天竜川・与田切川	天竜川・与田切川の氾濫原で、③面・②面を浸食し、1万年前以降に形成された。天竜川沿いでは③面より約30m低く、基盤岩を削り取る作用が進行中。

(2) 遺跡の基盤岩および礫層

ここでは、遺跡付近の若森社面・南羽場面を中心に、基盤岩と礫層について述べる。

若森社面 (③面) は、①面とおよそ30mの段丘崖により境されている。この崖の中・下部には基盤岩が分布している。大半の岩石は生田花崗岩で、北方では黒雲母片麻岩に漸移する。崖の上部には、天竜川の河床礫とほぼ同じ礫層構成である砂岩・チャート・花崗岩・緑色岩などの円礫が堆積している。

若森社面と南羽場面の境となる段丘崖では、今回の道路工事により、すべての地層が観察できる大露頭が出現した。約20mの崖には、河床礫の円礫類が堆積している。礫層は色の違いから3層に区分されるが、礫層構成は同一で、砂岩・チャート・花崗岩・緑色岩などの天竜川水系の礫である。礫の傾きによる古流方向も、北から南への方向を示している。

以上の観察結果や生沢川の崖の様子から、図3 A—Bの地質断面は、図4のように考えられる。

(3) 若森社面・南羽場面の形成

若森社面 南羽場面より一段低い若森社面では、図5にみえるT1からT4のトレンチを掘削して調査した。図6の柱状図に示すように、礫層の上部には1m内外の砂・褐色土・黒土などが堆積している。

段丘の東端に近いT1からT3のトレンチでは、始良Tnテフラの火山ガラスが上部の地層に混入するが、段丘中央のT4のトレンチでは始良Tnテフラは見られない。堆積物の大半を占める砂層は、T1・T2地点では多様な岩石の風化岩片・長石・石英・ざくろ石などが混じり、天竜川の砂と同一であるが、T4地点では花崗岩の風化岩片が多く、与田切川の砂の流入が考えられる。耕作土を除去した地表面(地山面)を概観しても、南東側のT1～T3地点は黄灰褐色にみえるが、その北西側はT4付近も含めて一様に灰褐色と違いがある。

砂層の下の礫は、傾きの方向からおおよそ南西方向への水流によって運ばれてきたことを示しており、天竜川の流向とほぼ一致している。

土地の隆起ともなって天竜川の下割作用が強まり、南羽場面が侵食されて若森社面を生じた。その時期は、面上の堆積物に始良Tnテフラが混入することから、始良Tnテフラの降下した約2.5万年前ごろであろう。



図5 土層調査用トレンチ位置図

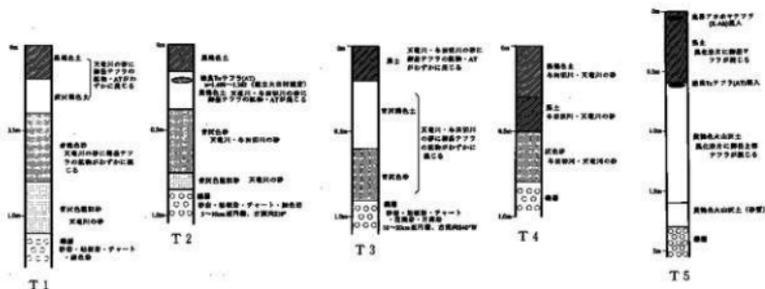


図6 土層柱状図 (T1～T4:若森社面、T5:南羽場面)

南羽場面 南羽場面は、標高570m内外のごくわずかな南に傾いた段丘面である。西側の段丘崖から流れ下る十王堂沢川は、約90°向きを変えて南下し、再び向きを東に変えて天竜川へ注いでいる。したがって、面の南半分では、天竜川に近い東側の方が西側よりもやや高くなっている。

この面の礫層を覆う堆積物は、過去におこなったT5地点での観察から、御岳テフラの鉱物を含む黄褐色火山灰土を主とし、上部には始良Tnテフラや鬼界アカホヤテフラの火山ガラスが混じっている(図6)。ここには、この面より一段高い⑤面にみられる御岳起源の軽石層が堆積していないことから、面の形成は御岳三岳テフラの降下後から新期御岳テフラの火山灰や始良Tnテフラが降下する前に終了したものであり、その年代はおおよそ4万年前と推定される。

なお、今回の調査において、十王堂沢の西8mのT6地点(調査区はV区)で土壌を採集し、含まれる鉱物を調査した。その結果、上部の黒色土層には鬼界アカホヤテフラと始良Tnテフラがわずかに混入し、黒色土層の下部に堆積する褐色火山灰土には始良Tnテフラや御岳テフラの鉱物が含まれていた。しかし、その含有量は少なく、二次的に風などによって運ばれて堆積したものと推定される。この地点でも御岳テフラの軽石層はみられず、T5地点での観察結果と一致している。

3 調査地周辺の歴史

今回の発掘調査では、ほかの時代に比べてとくに中世の成果が大きいが、このため、調査地周辺の歴史を概観するこの項でも、この時代に関する記述を多くした。

(1) 原始・古代の本郷

旧石器時代 本郷区からは、旧石器時代の遺構は確認されていない。ただし、丸山遺跡・十王堂沢遺跡・田中遺跡から、有舌尖頭器が各1点見つかった。

縄文時代 縄文時代の遺跡は本郷区全体で24を数え、天竜川の氾濫面以外の各段丘に遺跡が分布している。時期は縄文中期が多い。JR本郷駅の南一帯(原林・丸山・十王堂塚の上・地の窪・中山などの各遺跡)は、縄文中期の大集落だったとみられている。南羽場遺跡でも、過去の発掘調査でこの時代の遺物が出土しており、若森社遺跡からも圍場整備の際に採集されている。

弥生時代 弥生時代については、住居跡は確認されていないが、4遺跡から土器や石器が表面採集されている。若森社遺跡でも、過去に壺の破片、大型磨製石鏃、土製紡錘車が見つかった。

古代 古墳時代の遺構・遺物は見つからない。縄文中期をピークとして、次第に集落が少なくなってきたとみられる。奈良・平安時代については、13遺跡から遺物が出土、ないし表面採集されている。これらはほとんどが、縄文時代の遺跡と重複している。若森社遺跡・南羽場遺跡からも、この時代の遺物が見つかった。ただ、全体の景観としては、山野の中に点のように切り開かれた数軒単位の小規模な村があった程度と思われる。

(2) 中世の本郷

鎌倉～室町時代 生活の営みが点状だったそれまでの本郷地区に変化が見られるようになるのが鎌倉時代で、特権を持った人物が、地名を名字として開発領主となった。これが飯島氏である。飯島氏は、鎌倉時代以降400年間にわたって、本郷だけでなく、子生沢から中田切川までの飯島郷全域に勢力を張った。

飯島郷は、平安時代以降、伊那春近領の一部であった。鎌倉時代の伊那春近領は、幕府の政治を掌握する北条氏の所領で、現在の伊那市の小黒川から下伊那郡松川町の境の沢までを範囲とし、その内に北から小井亘二吉郷・赤須郷・飯島郷・田島郷・片桐郷・名子郷の6つの郷があった。領主である北条氏は、伊

那春近領を支配するため現在の伊那郡小井並に政所を置き、家臣の池上氏を派遣していた。その下に各郷を治める地頭代があり、飯島氏はその地頭代の一人であった(文獻11)。

幕府と朝廷との間に承久の乱(1221)が起ると、飯島氏は幕府の東山道軍に属して勇戦し、恩賞地として出雲国三沢郷(鳥根県仁多郡仁多町)を手にした。一族の一部は出雲へ移住し、三沢氏を名乗って同郷を支配した。

鎌倉幕府とともに北条氏が滅ぶと南北朝時代となるが、北条氏の残党が拳兵してしばしば戦乱が起こった。飯島氏は、中先代の乱(1335)・大徳王寺城の戦(1340)に参戦したといわれる。

室町時代になると、伊那春近領は信濃守護(小笠原・上杉・斯波氏などがたびたび入れ替わった)の支配を受け、飯島氏はその配下の守護被官となった。守護は室町幕府が任命していたため、飯島氏も幕府にしたがったが、幕府が鎌倉府(幕府が関東を治めるために置いた小幕府)と対立する状況によっては鎌倉府方についたこともあった。飯島氏はこの時代、大塚合戦(1400)・結城合戦(1440)に、守護軍に属して戦っている。

ところで、中世の飯島氏に深いかかわりのあるものに西岸寺がある。西岸寺は、弘安元年(1261)、蘭溪道隆の開山とされる。その後、第6世の大徹至純が飯島氏一族とともに寺を再興整備し、応安6年(1373)には室町幕府から五山制度(五山・十刹・諸山の3段階で寺格を定める)の諸山の列に加えられた。ついで幕府から寺領を安堵され、さらに寺領寄進も受けている。このころ、大徹至純は、寺の沿革や寺と権那(飯島氏)との関係、寺の内規などを内容とする西岸寺規式「臨照山記録」(至純撰文)を記した。文正元年(1466)には、幕府より、鎌倉五山の第三位の寿福寺で修行した瑛林正政が西岸寺の住持に任命され、京都の五山・十刹の住持14人から疏(文章)が贈られている(「瑛林正政住西岸寺京城諸山疏」)。このように、西岸寺は、幕府とのつながりを持ち、京都・鎌倉をはじめ各地の有力寺院との交流もさかん一大寺院であった。

戦国時代以降 戦国時代、武田氏が伊那地方に侵入すると、飯島氏は伊那の侍衆の一員としてこれを防ぐ動きに参加した。しかし、最後には郡内ほとんどの武士とともに武田氏に従った。「春近衆」として武田氏の家臣団に組織され、上伊那は天文末年ごろ(1550ごろ)から約30年間、武田氏の勢力下となった。

天正10年(1582)、織田氏が武田氏を討つため、下伊那から北上してきた。まず、織田信忠が飯島城に入り、ここから高遠城を落とすために出陣していった。高遠城落城後、信長も飯島城に入っている。西岸寺は、このとき織田軍の兵火に見舞われたといわれ、また、沿道では織田軍による掠奪がはなはだしかったと伝えられる。飯島氏(民部・小太郎)は、この戦いで武田勢として勇敢に戦ったが、高遠城で討ち死にした。

武田氏が滅び、続いて本能寺の変で信長が討たれると、伊那郡はまず徳川氏の家臣が、ついで豊臣氏の家臣が飯田に入って支配した。この時代、飯田から飯島へ至る街道の整備がおこなわれている。もとの主要道より西の段丘上の道が整備され、この道筋に伝馬のための宿が指定された。文禄2年(1593)、本郷から与田切川を渡った石曾根の内に、新たに宿が開設され、飯島宿とされた。この宿は、飯田城主の命によって本郷の「上村」の者が移住させられて町屋を運搬したものといわれている。もとは本郷を街道が通り、本郷の「上村」やその南隣の「古町」が宿場の機能を果たしたのではないが、今回の南羽場遺跡の発掘調査地V区・VI区から南一帯に、上村の字名が残る。

このころになると、飯島氏が地域に及ぼす影響力は小さくなったとみられ、関ヶ原への出陣後は、領有する地を失ったようである。武田氏支配時代以降、本郷地域内部の構造は変化していった。

混乱の時代を過ぎて江戸時代、新しい村は新興の有力者たちが中心になって運営され始めたのではないだろうか。住民は生活の安定を求めて農業基盤の充実を図っていく。大開発の時代を迎え、用水路を引いて水田を広げ、村の景観も変わっていった。

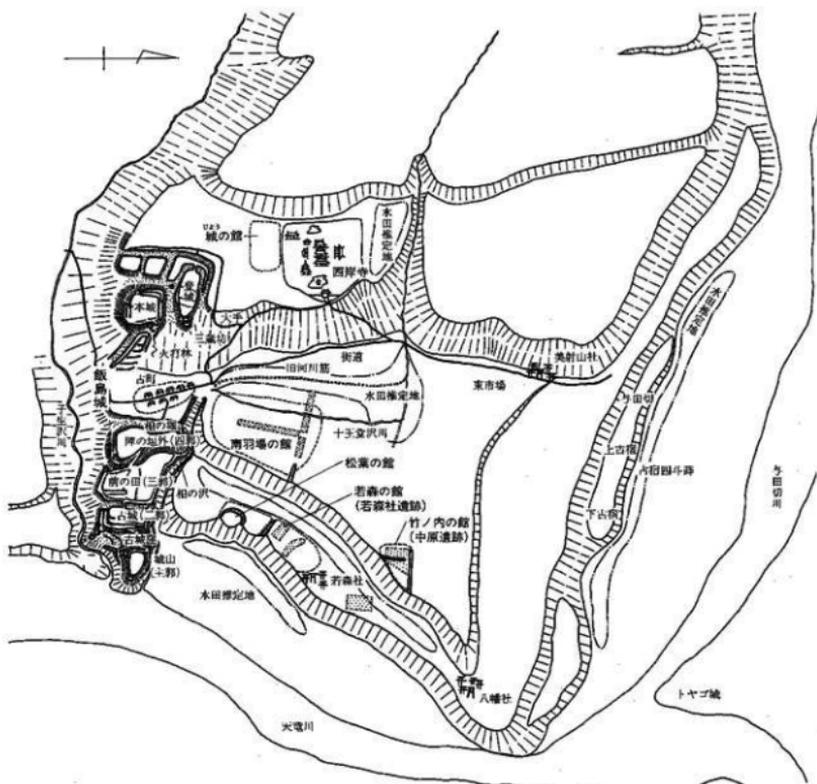


図7 中世の本郷想像図 伊藤修氏作成の図および郷道哲章氏作成の飯島城縄張り図をもとに作成

飯島城 本郷区の南端、相の沢と子生沢に挟まれた地域に飯島城（本郷城）がある。若森社遺跡・南羽場遺跡からは南方に300m程度しか離れていない。地形を巧みに利用して造られた平山城で、規模は東西約800m・南北約100～250mにおよぶ。

東端にあって天竜川を見下ろす「城山（主郭）」から西を見ると、空堀（古城窪）の向こうに「古城（二郭）」があり、さらに空堀を経て「前の田（三郭）」がある。段丘面でいうと、ここは若森社面である。前の田から約20mの段丘壁を登ると南羽場面に出る。ここには「陣の垣外」と呼ばれる平坦地があり、さらに西には、空堀（相の堀）を経て飯島城の城下町の「古町」と、古い街道がある。この西は比高40mを超える段丘壁で、森の中に縦堀や縦土塁がある。崖の上には、「本城」「登城」などが堀に隔てられて区画され、登城の北北西250mには、飯島氏の厚い庇護の下にある西岸寺がある。当時の西岸寺は、現在よりも広大な寺域を誇っていた。

現在残る城の痕跡は、飯島氏によって築造・整備されたものが、武田氏の影響を受け、さらに武田勢力を追討する織田軍によって手を加えられた最終的なものであろう。こうして完成された飯島城は、街道を押しさえ、天竜川をにらみ、本城からはるか南方を望むことができる。城主がその力を誇示するシンボルでもあり、戦時の詰め城でもあった。ことに戦国時代、武田氏の侵攻時などには、武田雑兵の乱暴狼藉か



図8 本郷の小字名〔飯島町跡〕中巻付園

ら家族や家財を守るため、飯島氏一族のみならず、周辺住民が群れをなしてこの城に緊急避難し、立てこもったのではないかと推察される。このようなときに城は整備され、その防衛機能を充実させていったと思われる。

(3) 中世の若森社・南羽場遺跡に関する従来の研究

昭和47年の南羽場遺跡発掘調査（文献4） 南羽場遺跡では、昭和47年（1972）、現在の国道153号が開設されるのに先立ち、用地内で発掘調査がおこなわれた。報告書から要点を拾い出すと以下のようである。

遺物は、14～15世紀前半（鎌倉時代末～室町時代）を主体とする陶磁器が総数で302点のほか、各種の金属製品や銭貨・砥石が出土している。陶磁器は、当時の調査区IV区（以下調査区は当時の調査区、位置は23ページの図10を参照）から238点、北隣のV区では、全面発掘ではなくグリッドを設定した調査のみがおこなわれ、35点が出土している。

遺物が集中的に出土したIV区からは、4軒の建物跡（うち3軒は竪穴をとまなう）のほか、東西方向に走る道路跡などが検出された。建物跡のうち3軒は、生活区と工房が併設された家屋で、南北朝期（14世紀）に館の一角にあった隸属民の家、残る1軒は室町中期（15世紀前半）のものと考えられる。このIV区から100mほど南のI区からは、南北に並行する2本の溝状遺構が検出され、館の外側に設けられた堀とみられている。

わずかに南にある巨大な飯島城の中には確実に館跡と思われるところが認められず、この調査区の近辺に城主に関係した館があったことをうかがわせてままとしている。

平成8年刊「飯島町誌」(文獻2) 「飯島町誌」(中世編第4章第5節および第5章)では、若森社・南羽場の各遺跡辺りに中世の館があったと考えている。なお、若森社・南羽場以外にも居館があったことが記されているので、参考のためあわせて紹介しておきたい。

若森社遺跡については、段丘の西半分が湿地であるため、中世の屋敷は段丘の東端にあったとみている。この地域の字名は「市村」だが、このいわれについて、市場があったという説と、一番の村という説があることを紹介している。

南羽場遺跡辺りについては、昭和47年の発掘成果とともに、地理的な条件や水利のよさについてふれ、さらに、南羽場の西方に菅「神の木社」と呼ばれる社があったが、この神の木を上城と考え、ここに屋敷があったことが考えられると述べている。

若森社・南羽場以外の館については、まず、飯島氏総領の館が、飯島城本城の北西、西岸寺南隣の字「城」にあったのではないかとみている(段丘面は⑤面)。これは、地名や、刀・銭貨が出土したという伝承、表面採集された陶磁器、住居としての地理的条件のよさ、西岸寺に隣接する点などから導かれた考えである。

南羽場面には「竹ノ内」にも、また、若森社面には「松業」にも、有力者の屋敷があったとしている。竹ノ内については、本郷中原遺跡の発掘調査で、南北朝から戦国時代(14~16世紀)の陶磁器が出土し、堀・溝・柱穴・土坑が検出された。松業には、天竜川の河原につくられた田や天竜川の漁業権を持つ飯島彦八郎が盛が屋敷を構えていたと考えている(図7参照)。

飯島城は、飯島氏総領の館との関連から、最初に本城・登城が造られ、その後東へ整備が進んだとみている。室町時代以降、住むための居館と逃げ込むための山城がセットになってくるとし、飯島城をその代表と考えている。

平成8年小野正敏氏の概観(文獻7) 平成8年(1996)7月、国立歴史民俗博物館の小野正敏氏が本郷地区内の各所から採られた陶磁器を概観し、若森社遺跡付近の表面採集遺物は12世紀末~15世紀、南羽場遺跡の昭和47年の出土遺物は14世紀~15世紀前葉、南羽場遺跡のすぐ南にある古町の表面採集遺物は15世紀後半~16世紀初めが中心と指摘した。このことから、中世の本郷地区の中心集落は、鎌倉時代には若森社周辺にあり、南北朝から室町時代にかけて南羽場周辺に拡大し、戦国時代に古町や本城に移っていったと捉えた。東から西へ、段丘でいうと③面から④面、⑤面へとというふうである。

飯島城ができるのは15世紀前半(室町時代)になってからとし、本城よりも天竜川に近い方が古いように感じると述べている。また、古町が城下町として整備されたのは15世紀後半(戦国時代)らしいと述べている。それ以前は、地域の中心が若森社・南羽場などの館にあるという見方である。

第3章 若森社遺跡

はじめに

農道整備に伴う若森社遺跡の発掘調査範囲は、南北2枚の水田中に新設される道路の幅約12m、長さ約120mであった。そのうち北側の段丘付け根に近い水田は、水はけが悪く、昔は沼だったという地元の人の話があった。実際試掘してみると、遺構は見えず、すぐに水が湧き出してきたため、南側の幅12m、長さ60mの範囲を全面発掘した。その結果、調査した範囲は南側圃場720㎡、北側圃場8㎡である。

調査開始前は、昭和55年(1980)におこなわれた圃場整備のため遺構は残っていないと

予想されたが、圃場整備前と後のレベルを比較したところ、南側圃場の南側を中心に20cmほどいじられた程度ではないかと推測できた。したがって、調査では多くの柱穴や土坑、中世の竪穴状遺構、弥生時代の埋篋跡を検出することができた。遺物は、縄文土器、青磁・白磁の碗や皿、13-14世紀を中心とした中世陶器、釘を中心とした鉄製品、鉄鏝も出土した。

土層は、上から、耕作土、ローム粒を多く含む黒褐色土、粘土質の灰褐色土、礫層に分けることができる。ただし、南側圃場の南東側には、灰褐色土の上に黄灰褐色の火山灰土が薄く載っている。遺構は灰褐色土または黄灰褐色土の面で検出し、遺物は黒褐色土中から多く出土した。

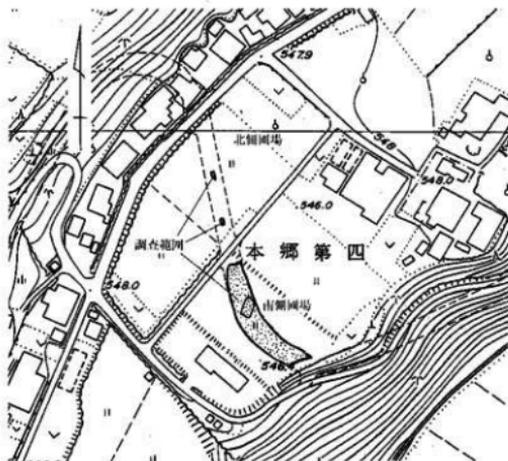


図9 若森社遺跡調査範囲略図(1:2,500)

1 遺 構

(1) 建物址

建物址の概要(図11、写真8) 竪穴と柱穴で構成され、調査区中央部に位置する。竪穴は、ほぼA-3区とB-3区に収まり、柱穴は竪穴の内部と周辺にある。建物の主軸方向(長い軸=桁の方向)は、北から33°東へふったほぼ北東方向を示す。

柱穴は、基本的に3間×4間の総柱建物を構成する。桁行14.2m、梁行7.8mであるが、柱穴列の方向と出土遺物から、北西側へさらに広がる、もしくは別棟の建物が並ぶ可能性がある。また、調査範囲外であるため確認しなかったが、北東側へも同様の可能性がある。竪穴は、その総柱建物の中央から東隅にかけて位置する。

柱 穴(図13、写真32-35) 建物址に関係するとみられる柱穴は、少なくとも150基ある。これらは竪穴の内部および周囲にあって、建物の桁方向に並ぶ柱穴が5列(竪穴の壁際に2列、竪穴内部に2列、竪

穴外に1列)の柱穴列を、梁方向に並ぶ柱穴が5列ないし6列の柱穴列を構成している。

各柱穴の間隔は、多くが2.0~2.3mである。ただし、竪穴内に2列ある桁方向の柱穴列については、列の間隔が1.8~2.0mと短め、逆に柱穴186と193の間隔は2.9mと長めである。

柱穴の平面形は、方形または隅丸方形のものも多く、その一辺は25~45cmである。しかし、竪穴の南東側において、掘立柱建物の南東辺を構成する柱穴列の柱穴は、一辺20~40cmと、やや小さめである。柱穴の深さは、遺構確認面から15~65cmで、多くは20~40cmの範囲に取まる。

竪穴の北西辺・南西辺に沿う柱穴には、覆土や底部に石が入るものが8基ある(柱穴123・129・136・137・190・193・216・239)。

後述するように、竪穴から出土した遺物の多くは13~14世紀のものであるが、竪穴内の柱穴209からは、15世紀後半から16世紀ころの所産と思われる遺物が出土しており、竪穴周辺の柱穴には何度かの変遷があったと考えられる。

竪穴(図14~16、写真18~23) 竪穴は、桁方向に10.5m、梁方向に5.9mの規模で、平面形は長方形である。深さは最大で25cmを測る。

南東・南西・北西の壁は、ごく緩やかに立ち上がる。しかし、竪穴の北東側には、壁らしい壁がなく、グラグラとゆるる傾斜だけである。

底面は、北東側よりも南西側のほうが35cmほど低い。また、柱があった所をさけて低まっているため、柱穴の周りはマウンドのように高まっており、この高低差は最大で16.5cmある。高まった部分は土を盛り上げて柱を固めたわけではなく、柱のない部分を人や馬が歩いたために低まった可能性がある。なお、底面は全体にややしまっている。

竪穴として掘り込まれた中には、ほぼ全体に暗茶褐色土が埋まっていた。この覆土の中から、河原石や陶磁器片が多数確認された。また、一部には焼土・炭・焼け石を含む層がみられた。

焼土・炭・焼け石を含む層は竪穴北隅の底部よりやや上部にあり、覆土の中~上層には、径8~47cmの河原石が多くあった。

このような河原石は、竪穴の南東辺周辺には少ない。逆に竪穴の南西側、つまり底面の高さが一番低くなっている所には石の数が多く、径が40cm以上を測る大型の石が多くなる。竪穴底面に接する石もあったが、間に薄い炭化物層が入る。

これとは別に、竪穴中央部の西寄りには、梁方向に2.3m、桁方向に1.4mの範囲で、一部の石が竪穴底面に接している配石遺構が確認できた。しかし、石には、底部に接しているものもあれば浮いているものもあり、意図的に竪穴の底に置いたとは断定できず、先述した大型石の配石遺構の下部施設である可能性もある。石は径5~37cmの河原石で、焼けた石が1点あった。この配石遺構の北側からは炭粒が多く出た。

これらの2ヶ所の配石遺構については、規則性は明らかでないが、目的をもって竪穴底面に配置された石はなく、竪穴と同時代的で直接的な関連は薄いと思われる。ただ、桁方向の柱穴列で、柱穴間隔が一番広がる竪穴の南西側に大型の石が集中することを考えると、何の関連性もないとは言いつれず、現段階では配石遺構の意味は不明である。

竪穴の中央南寄りでは、炭化した竹垣状の遺構を検出した。竹を細く割り、並べて立てた跡で、竪穴と方向を同じにして、梁方向に2mほど並べられている。割竹はみな、南西側に背を向けている。検出した面は、竪穴の検出面より9cmも高く、埋められた竹垣の最下部は、竪穴の検出面とほぼ同じレベルで、竪穴底部からは17cmほど上になる。このため、竪穴底部の柱穴が機能していた時期とは直接の関係はないと考えられる。しかし、底面より上部の配石や遺物の分布からみると、石や遺物のないスペースに竹垣があり、これらと何らかの関係があったと思われる。

遺物については、竪穴底部(竪穴の底部直上または覆土下層)から出土したもの、竪穴内部および周辺

柱穴から出土したもの、竪穴覆土の中～上層から出土したものに分け、種類ごと表2に点数を示した。中世陶磁器には、中国製の青磁・白磁などに12世紀のものがあるが、多くは13～14世紀に東濃（東美濃）・瀬戸・常滑などで焼かれた陶器である（遺物の項および表5を参照）。なお、陶磁器・土器はすべて破片である。

(2) 土 坑

土坑は37基検出した。注目すべきは、第一に、竪穴近辺に位置し、竪穴内と同じ時期の遺物が出土している土坑6・7・9である。これらは、竪穴および竪立柱建物と関連する遺構と考えられる。第二に、平面形が径70～120cmの円形で、断面が箱形もしくは逆台形を呈するなど、形態的に類似した土坑30～37である。これらはいずれも覆土の感じが同じであり、2～3基の土坑が近接してつくられている。深さは25～85cmまであり、まちまちである。使用された年代と目的は似ていると思われるが、用途は不明である。

若森社遺跡は、中世ばかりでなく、縄文時代や弥生時代の遺構が存在する可能性があり、また後世に攪乱されている箇所もある。そのため遺物が出土しない場合など、帰属時期を決められない遺構も多い。

土坑1（図17） A-1区北東隅に位置する。平面形は105×90cmの円形である。深さは70cmを測り、断面は深い逆台形である。遺物は、縄文土器が1点出土している。

土坑2（図17） A-1区北西隅に位置する。平面形は150×80cmの楕円形である。深さは最大55cmを測り、断面は深い碗形である。遺物は出土していない。

土坑3（図17） A-2区北端に位置する。土坑4と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は1.6×1.2mの半円形である。深さは最大55cmで、断面は浅い碗形である。遺物は、縄文土器が14点出土している。

土坑4（図17） A-2区北端に位置する。土坑3と重複するが、新旧関係は不明である。風倒木痕を切る。平面形は118×70cmほどの楕円形である。遺物は、土坑3と一緒に取り上げたため、同じである。

土坑5（図17） A-3区北西部に位置する。平面形は75×38cmの、一方が尖った楕円形である。深さは38cmである。底部は平らで、壁はやや開きながら立ち上がる。遺物は、黒曜石破片が1点出土している。

土坑6（図17、写真24） A-3区中央やや北寄り検出され、竪穴の北西に位置する。平面形は1.8×1.4mの不整形円形である。深さは35cmである。断面は、壁がなだらかに立ち上がる舟底形だが、南壁のみオーバーハングする（垂直よりやや鋭角に立ちあがる）。土坑の壁面は砂混じりの灰褐色土で埋め、その上に、壁に沿って拳大～人頭大の礫を巡らせている。礫は、上層の黒褐色土中にもみられるが、壁に沿って並んでいた礫が落ち込んだ可能性がある。遺物は、縄文土器3点、鉄釘2点、青磁碗1点が出土している。

表2 若森社竪穴出土遺物（単位：点）

出土場所 遺物の種類	竪穴底部	関係柱穴	竪穴中 ～上層
青磁碗		2	3
白磁碗・皿		2	4
青白磁皿			1
灰釉折縁深皿	1		
灰釉丸碗		1	
古瀬戸灰釉水注			1
古瀬戸灰釉四耳壺	1		
古瀬戸灰釉梅瓶			1
片口鉢	2	1	22
甕	5	3	18
山茶碗・小皿	4		6
在地産掃鉢			2
染付碗			1
鉄釘	8	6	34
鉄滓	1	4	10
鉄製品	1		3
銅片	1		
砥石			4
縄文土器		15	18
彌生土器			1
石器	1		1
炭化木片			3
骨片			2
合計	25	34	135

土坑7(図17) B-3区北西部で検出され、竪穴の北東に位置する。土坑8と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は 2.05×1.9 mの不整形である。深さは34cmを測り、断面は舟底形である。底部に接して拳大の礫が2個出土した。遺物は、縄文土器1点、常滑焼の甕1点、山茶碗1点が出土している。また、手のひらほどの大きさで、偏平な焼け石も出土している。

土坑8(図17) B-3区北西部で検出され、竪穴の北東に近接し、竪穴コーナー部の柱穴に切られている。また、土坑7と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は 86×68 cmほどのほぼ三角形である。深さは最大で27cmを測る。北壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は底からなだらかに立ち上がる。遺物は出土していない。

土坑9(図18、写真25) A-4区北部で検出され、竪穴の南西に位置する。明治時代につくられた水田の暗渠排水施設に一部壊されている。平面形は 2.44×1.75 mの楕円形である。深さは最大25cmを測り、断面は浅い舟底形である。底部には配石がみられる。また、覆土上層にも拳大の石による集石がみられた。遺物は、覆土中から炭とともにある程度固まって出土した。縄文土器4点、黒曜石破片1点、砥石4点、片口鉢2点、常滑焼の甕1点が出土している。

土坑10(図17) B-4区西端で検出され、竪穴の南西に位置する。平面形は 80×57 cmの長方形である。深さは最大47cmを測り、断面はやや深めの箱形である。遺物は出土していない。

土坑11(図17) B-4区中央からやや南寄りに位置する。平面形は 60×30 cmの隅丸長方形である。深さは最大25cmを測り、断面は箱形である。遺物は出土していない。

土坑12(図18) A-4区南東部に位置する。平面形は 120×67 cmの隅丸長方形である。深さは最大9cmを測る。壁は、北側が急角度に立ち上がり、南側は底から徐々に浅くなっていく。遺物は出土していない。

土坑13(図18) A-4区に位置する。平面形は 100×95 cmの円形である。深さは15cmを測り、断面は浅い箱形である。遺物は、縄文土器が出土している。

土坑14(図18) A-4区南部に位置する。柱穴と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は 90×70 cmの楕円形である。深さは最大40cmを測り、断面は碗形である。遺物は出土していない。

土坑15(図18) A-4区南東部に位置する。平面形は 60×50 cmの円形である。深さは最大15cmを測り、断面は箱形である。遺物は出土していない。

土坑16(図18) A-4区南東部に位置する。平面形は 90×80 cmの円形である。深さは最大17cmを測る。遺物は出土していない。

土坑17(図17) A-5区、B-5区にまたがって位置する。平面形は 160×68 cmの隅丸長方形である。深さは最大25cmを測り、断面は舟底形である。遺物は出土していない。

土坑18(図17) B-5区北西部に位置する。平面形は 55×45 cmの隅丸長方形である。深さは5cmと浅い。遺物は出土していない。

土坑19(図17) B-5区南東部に位置する。平面形は 45×39 cmの隅丸長方形である。深さ90cmまで掘り下げたが、穴が狭いため、底まで確認できなかった。壁は垂直に落ちる。遺物は、縄文土器が2点出土している。

土坑20(図18) B-5区南東隅に位置する。平面形は 120×51 cmの長楕円形である。深さは最大13cmを測り、断面は皿状である。遺物は、黒曜石破片が1点出土している。

土坑21(図18) B-6区北東隅に位置する。平面形は 58×25 cmの楕円形である。深さは最大20cmを測る。南壁はゆるやかに、北壁は垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

土坑22(図18) C-5区西側に位置する。土坑23と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は 2.03×1.2 mの楕円形である。深さは最大30cmを測り、断面は舟底形である。遺物は、須臾器の蓋が出土している。

土坑23(図18) C-5区西側に位置する。土坑22と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は72×40cmの楕円形である。遺物は出土していない。

土坑24(図18) C-5区西側に位置する。平面形は124×57cmの楕円形である。深さは最大30cmを測り、断面は皿状を呈す。遺物は、土坑覆土上層から縄文土器(中期)が出土している。

土坑25(図18) C-5区西側に位置する。後世の攪乱によって一部壊され、土坑34に切られる。平面形は133×84cmの不整形楕円形である。深さは最大28cmを測る。南壁はゆるやかに、北壁は急に立ち上がる。遺物は出土していない。

土坑26(図19、写真26) C-6区北東部に位置する。平面形は径1.15mの円形である。深さ1.1mほど掘り下げたが、底まで確認できなかった。土坑の覆土は、水分を多く含んでおり、井戸や深い貯蔵穴の可能性はある。遺構の上部には、円形の土坑を東西に横断する形で、1列の配石がなされていた。しかしこの配石は、下の遺構の確認面より高い位置にあるため、両者の直接的関係は不明である。遺物は、縄文土器(後期)2点、打製石斧1点、片口鉢1点、常滑焼の甕1点、鉄釘2点、鉄棒2点が出土している。

土坑27(図19、写真26~28) D-6区北西隅に位置する。楕円形の土坑と重複するが、新旧関係は不明である。調査範囲外であるため、遺構西側は未確認であるが、南北1.2m以上、東西1.3mを測り、平面形は楕円形になると思われる。深さは12cmで、断面は浅い箱形である。遺構の覆土上部には、拳大の礫を遺構全体に配す。覆土は、全体的に硬く、しまりがある。遺物は、縄文土器(中期)1点、中世の甕3点が出土している。

土坑28(図19、写真26) D-6区に位置する。ほぼ南北2.4m、東西1.5m、深さ35cmの土坑である。ほかに土坑29や、径10~80cmまでのいくつかの土坑・ピットと重複するが、新旧関係などは明らかにできなかった。遺物は出土していない。

土坑29(図19、写真26) D-6区に位置する。土坑28などと重複するが、新旧関係は不明である。平面形は径80cmほどの円形である。遺物は出土していない。

土坑30(図19、写真29) B-4区中央やや北寄りに位置する。平面形は径1.2mの円形である。深さは40cmを測る。壁は、やや内湾しながらもほぼ垂直に立ち上がる。底は平らである。覆土は、底面に黒色土が薄く堆積するが、それより上部はロームブロック混じりの土で一気に埋められている。遺物は、縄文土器が細片で出土している。

土坑31(図19、写真30) B-4区中央やや北寄りに位置し、土坑32に近接する。平面形は1.2×1.0mの円形である。底は平らで、深さは40cmを測る。断面は箱形である。覆土は、ロームブロック混じりの土で一気に埋められている。遺物は、縄文土器が2点出土している。

土坑32(図19、写真31) B-4区中央やや北寄りに位置し、土坑31に近接する。平面形は1.6×1.5mの円形である。深さは52cmを測る。壁は、やや内湾しながらもほぼ垂直に立ち上がる。底は平らで固くしまっている。覆土は、ロームブロック混じりの土で一気に埋められている。遺物は、縄文土器1点、青磁碗1点が出土している。

土坑33(図18) C-5区南西部に位置する。平面形は75×66cmの円形である。底は平らで、深さは25cmを測る。断面は箱形である。覆土は、ロームブロック混じりの土で一気に埋められている。遺物は、二次加工のある黒曜石剥片が出土している。

土坑34(図18) C-5区南西部に位置する。土坑25を切っている。平面形は75×70cmの円形である。底は平らで、深さは28cmを測る。壁はほぼ垂直であるが、若干内側に傾く。覆土は、底面に黒褐色土が薄く堆積するが、それより上部はロームブロック混じりの土で一気に埋められている。遺物は出土していない。

土坑35(図19) C-6区北部に位置する。平面形は80×75cmの円形である。底は平らで、深さは70cm

を測る。断面は、ほぼ箱形である。覆土は、底面から上半分まで黒褐色土が堆積するが、それより上部はロームブロック混じりの土で一気に埋められている。遺物は、鉄釘1点が出土している。

土坑36(図19) C-6区北部に位置する。平面形は110×98cmの円形である。底は平らで、深さは85cmを測る。断面は、ほぼ箱形である。覆土は、底面に黒褐色土が堆積するが、それより上部はロームブロック混じりの土で一気に埋められている。さらに上部には暗茶褐色土が堆積する。遺物は、縄文土器2点、灰釉陶器(壺?)1点、片口鉢1点、甕1点が出土している。

土坑37(図20) B-6区北東部に位置する。平面形は75×70cmの円形である。底は平らで、深さは47cmを測る。断面は、袋状を呈する。覆土は、ロームブロック混じりの土で一気に埋められている。遺物は、甕1点が出土している。

土坑38(図20) C-6区北西部に位置する。北西側の上部は、後世の擾乱によって破壊されている。平面形は径1.8mほどの不整形円形、底は平らで、深さは54cmを測る。壁は、やや内湾しながら急角度で立ち上がる。覆土は、土坑下半部がロームブロック混じりの土で一気に埋められている。遺物は出土していない。

(3) 柱 穴

径が40cm以下の小さな遺構は、まとめて柱穴群としてとらえた。しかし、平面が不整形、断面が浅い碗形、柱を支えたには固くしまった部分がないなど、柱穴ではなく、ピット状の小穴としてとらえたほうがよいものも多い。これらの柱穴は約450基検出した。

中世の遺構が多いと考えられるが、縄文・弥生・近現代の遺構も存在する可能性のある当遺跡では、帰属時期を決められないものも多い。以下に柱穴を大まかに群でとらえて説明していく。

竪穴周辺柱穴群(図2・13) 竪穴の方向と柱穴列の方向、または出土遺物の関連性から設定した。この群の柱穴のみ後掲の表3で説明を加えた。東西20m、南北19mの範囲にある。柱穴の特徴、出土遺物などは、表3のほか、「[1]建物跡」の項でも触れた。

第1柱穴群(図2) 調査区の北端に位置する。竪穴周辺柱穴群のすぐ北側にあたるが、柱穴の密度が急に小さくなる。平面が円形で、径は20~40cmの柱穴が多い。これらの柱穴の深さは10~30cmで、断面は皿状を呈し、覆土に炭粒を含むものが多い。遺物は、2基から縄文土器片、鉄滓が出土している。

第2柱穴群(図2) 調査区中央やや東寄りに位置し、竪穴周辺柱穴群のすぐ南東にあたる。竪穴の南東辺を通る柱穴列が、掘立柱建物の南東辺と考えられることから、これより南東を第2柱穴群とした。先述した、平面が円形で底部が平坦な土坑30・31・32の周辺に存在する。柱穴の平面形は方形・円形・楕円形とさまざまである。径は20~36cmで、小さいものが多い。柱穴の深さは10~30cmである。覆土は、ローム粒を含むもの、ローム粒・炭粒・焼土粒を含むものの2種類があるが、規則性はなかった。遺物は、2基から縄文土器片が出土している。

第3柱穴群(図2) 調査区中央やや南西寄りに位置し、竪穴周辺柱穴群のすぐ南西にあたる。竪穴周辺の柱穴とは違い、柱穴の径が15~30cmと小さめである。弥生土器の埋没がこの柱穴群の中心にあり、弥生時代の遺構が含まれる可能性がある。平面形は、主に方形と円形が混在する。柱穴の深さは、20cmを超えるものがほとんどなく、みな浅めである。覆土は、ローム粒を含むもの、ローム粒・炭粒・焼土粒を含むものの2種類があるが、規則性はない。遺物は、縄文土器5点、弥生土器埋没の破片、山茶碗・釘・鉄滓が各1点ずつ出土している。

第4柱穴群(図2) 調査区南側に位置する。第2・3柱穴群の南側は、いったん柱穴が少なくなるが、そのさらに南からは、柱穴や土坑が多く存在する。この地帯には、平面が円形で底部が平坦の土坑(土坑33~37)、平面が長めの楕円形を呈する土坑(土坑20・21・24)、配石を施した土坑27など、特徴ある土坑

があり、その中に当柱穴群が存在する。柱穴は、平面が方形もしくは隅丸方形を呈するものが多い。一辺20~40cmの大型の柱穴と、一辺15~25cmの小型の柱穴の2種類があるが、規則性はない。深さは、10~30cmのものが多い。覆土の様相はさまざまである。遺物は、3基から縄文土器片4点、鉄釘1点が出土している。

(4) 風倒木痕 (図11)

A-2区北側に位置する。土坑4や、いくつかの柱穴に切られている。平面形は、南北4.6m、東西4.5mの不整形円形である。南側と北側には、黒褐色土が弧状に堆積する。中央部には、灰褐色土が東西にのびる帯状に堆積する。調査では、掘り下げての確認はおこなわなかった。

(5) 弥生時代の単独出土の埋甕 (図21・40、写真37・38・96)

A-4区中央部から、弥生時代の土器(胴下部半個体分と破片7点)が出土した。器形とはほぼ同じ大きさに灰褐色土を廻って埋められた甕である。灰褐色土と土器の数cmの間には、黒褐色土がしっかり詰まっていた。土器はやや西に傾斜し、底部を東側に向けている。

埋甕の南西側には土間状遺構が確認できた。土間状遺構より上には炭化物が多く混じる黒褐色土が堆積していた。土器内部は、周辺の柱穴と同様に炭化物がわずかに混じる黒褐色土で埋まっている。埋甕のすぐ東側では、土器が角状柱穴に切られている。柱穴は周辺にいくつもあるが平面はみな方形で、柱穴内は炭化物が混じる黒褐色土で埋まっている。このことから、中世の竪立柱建物が焼失したものと考えられる。

土器の胴部径は最大で33cm、底径は9cm強である。長石粒を混合した胎土を使用し、厚さ6mm前後、灰黄色に固く焼成している。内壁は細かい刺落が目立つが、外面は滑らかである。器形から、弥生時代末期の土器とみられる。

2 遺物

出土遺物は、総数350点を越えるが、ほとんどが細かい破片であった。そのため、ここでは図に表すことのできる遺物を中心に説明をし、ほかは表5に示した。説明文中の数字(番号)は、図中の数字(番号)と対応する。

(1) 縄文時代の遺物

土器(図40、写真120~122) 遺構内の覆土や遺構外の遺物包含層から約200点出土した。多くは細片で、時期を決めかねるものが大半である。縄文時代に人々の生活が営まれたことは考えられるが、明確な遺構は残っていない。土器が柱穴や土坑内から出土している例もあるが、この時代の遺構と決定するには十分ではない。

土器は、縄文時代前期前半から晩期のものが発見されたが、中期後葉から後期にかけてのものが多い。出土した地域は、前期から中期前半ごろまでのものは主にA・B-4・5区から、中期から後・晩期にかけての土器はA・B-2・3・4区から多く出土した。

40・41は、B-5区北東からまとまって出土した縄文時代中期初頭の土器である。圃場整備によって上面すすれに削られ、遺構が確認できない状態で発見した。この土器の特徴は以下のようである。

土器は輪積によって成形し、特に内面は、輪積部分の補修がほとんどされていない。現存する底部直上から口頸部までの高さは20cmで、底部がしまる円筒形の深鉢形土器である。文様構成からして上部口縁部まで約10cmはあると思われる。40がこの土器の口縁で、内湾しながら外側に開き、先端で内側に折れ、1

cm幅の口縁部は湾口先状である。

文様は、川筒形の頸部以下、胴下部までに施されている。上から見ていくと、胴上部に、幅8～10mmの低い帯状隆起文で反時計回りに二つ巴の渦巻文を作りだす。二つ巴の一方の渦巻文は、渦巻の左下で2股に分かれ、分かれた一方は左に連絡して同様な渦巻文につながり、もう一方は下に2回の「く」の字を重ねて縞状に垂れ、胴下部の渦巻文に連絡する。二つ巴のもう一方の渦巻文は、1回転して右側の渦巻文に連絡する。このような文様帯を器全体に構成していると考えられる。

この帯状隆起文の上には、半截竹管工具の円を上にして器壁を押し施し、その沈線内に列点文を施文する。また、沈線内列点文と隆起帯外に平行して、半截竹管工具の円を土器面につけて押し施し、爪形印を残す沈線爪形文を施文する。沈線爪形文は、帯状隆起文が平行する場所は1条、帯状隆起文の間隔が広いところは2条施文する。間隔がもっと開くところは無文である。

胎土は、細かい雲母と長石粒を混ぜた粘土を使用している。焼成は良く、底部は赤褐色、胴部は黒褐色で均く焼かれている。

その他の縄文土器は、1・2は前期前半期の薄手細線文土器、3・6は中期中葉期、26・33・39は後期で、その他多くは中期後葉の土器である。表2のとおり、竪穴からも縄文土器が破片で多く出土した。

石器(図41・42、写真115～118) 30点ほど出土した。ほとんどが遺構外出土である。

図41の1はスクレイパー、2は尖頭器で、縄文時代草創期の石器である。7は竪穴内から出土した石鏃である。8は石錐状石器である。3～6は、二次加工もしくは使用痕のある剃片である。1～8はみな黒曜石製である。

図42の1～7は打製石斧である。4は土坑26から出土した。10・11は棒状敲打器である。11は片面を研磨器として使用している。8・9は石錘である。

尖頭器とスクレイパーの出土から、若森社地域では、縄文時代草創期から人々が生活していたことが考えられる。

(2) 弥生時代の遺物(図40、写真96・97)

埋蔵については、「1遺構(5)弥生時代の埋蔵」の項に記したのでここでは省略する。

埋蔵近くの耕作土中から、弥生時代末期の胴部破片が4点出土した。内1点は、厚さが1cmもある。

42・43は遺構外出土の弥生土器である。42は条痕文を施文した胴上部破片で、胎土・焼成からみて弥生時代中期初頭に属する。43は櫛目文が施された後期初頭様式であろう。

(3) 古代の遺物

土師器(写真97) 遺構外から甕の口縁部破片が1点出土した。短く強く外反し、ハケ調整が施されている。8～9世紀のものと思われる。

須恵器(写真97) 遺構外から須恵器環が出土した。口縁部の破片である。土坑22からは須恵器蓋が出土した。平らな、かえり部分の破片である。土坑36からは、甕とみられる口縁部破片が出土した。いずれも8～9世紀のものと思われる。

灰釉陶器 土坑36から甕とみられる口縁部破片が出土した。9世紀後半～10世紀の製品である。

(4) 中世の遺物

陶磁器については、基本的に器形別に分類して説明を加える。しかし、古瀬戸製品や貿易陶磁器などのように、製作した器形数が多い場合は、これらを大きくまとめた。

古瀬戸製品(図43、写真77) 破片で15点出土した。1は竪穴から出土した灰釉梅瓶の底部である。底

径は約11.2cmを測る。釉は薄く、色調は暗緑色である。縦方向の区画の中に、さらに縦方向の5本線を櫛状工具で施文する。古瀬戸中期、14世紀前半の製品である。

竪穴からはほかに、灰釉水注(14世紀前半)・灰釉四耳壺(13世紀前半)・灰釉折縁深皿(14世紀半ば)が出土し、遺構外の遺物包含層からは灰釉三足盤なども出土した。

大塚期以降の瀬戸美濃系陶器(図43、写真77) 破片で9点出土した。2は遺構外出土の灰釉丸碗である。高台は削り出しており、底径は6.0cmを測る。釉の色調は淡黄褐色である。17世紀半ばの美濃産と思われる。

ほかに、竪穴内の柱穴209から灰釉丸碗と思われる陶器、遺構外出土では、灰釉反皿・天目茶碗・指鉢・小壺などが出土した。遺構外出土の遺物が多く、16～17世紀のものが多い。

青磁(図43、写真78・79) 破片で18点出土した。3は竪穴周辺の柱穴86から出土した碗である。底径は4.8cmを測る。内面に片彫と帯描で劃花文を施す。釉は薄く、貫入がまばらに入る。色調は淡い灰緑色である。12世紀の製品である。4は竪穴周辺の柱穴93から出土した碗である。底径は4.6cmを測る。外面に片彫で蓮弁文を施す。釉は厚く、色調は深い灰緑色である。13世紀の龍泉窯の製品である。5は北坑32から出土した碗である。底径は4.8cmを測る。釉は厚く、色調は淡い灰緑色である。13世紀の龍泉窯の製品である。

ほかに、外面に帯描文を施した碗(12世紀)、外面に蓮蓮弁文を施した碗(14世紀)、口縁部がやや外反する青磁皿(13世紀)などがある。いずれも遺構外出土遺物である。

白磁(図43、写真79) 破片で14点出土した。6は竪穴内から出土した皿である。外面底部は無釉である。見込部端部は、円形に若干隆起するように造り出している。釉の色調は乳灰白色である。底径は6.3cmを測る。13世紀後半～14世紀前半の製品である。

ほかに、口縁部が外側に折れる碗(12世紀)、青白磁の皿と思われる底部破片が出土した。いずれも竪穴内からの出土である。

甕(図43、写真81・82) 破片で76点出土した。7は土坑36から出土した。焼成は良く、明るい茶褐色に焼けている。口径は約25.7cmを測る。14世紀の中津川産である。8は遺構外出土である。焼成は良く、黄褐色に焼け、口径は約43.2cmを測る。15世紀の中津川産である。9は土坑26から出土した。色調は明茶褐色を呈し、胎土はやや砂っぽい。口径は約43.2cmを測る。13世紀後半の常滑産である。10は柱穴124から出土した。色調は暗青灰色を呈す。縁帯を欠損しているが、口径は約36cmを測る。13世紀の常滑産である。

ほかに、竪穴内からは淡緑色や濃緑色の釉がかかる甕(中津川産)、柱穴137からは甕底部(13世紀・常滑産)、遺構外から、格子目状の押印文を施した甕肩部(13世紀・常滑産)などが出土した。

片口鉢(図43・44、写真98) 破片で55点出土した。11～14は竪穴内から出土した。12は胎土が淡赤褐色で、長石を多く含む。13・14は底径約10cmを測る。いずれも、13世紀後半の中津川産である。15(図44)は土坑9から出土した。底径は12.6cmを測る。13世紀後半の中津川産である。

ほかに、竪穴内からは尾張産の片口鉢(12世紀末～13世紀初)、遺構外からは常滑産の片口鉢(12世紀)が出土した。

山茶碗・小皿(図44、写真80) 破片で16点出土した。16・18は竪穴内から出土した山茶碗である。16は口径約13.7cm、14世紀前半の東濃系である。18は底径約6.5cm、12世紀末の東濃系である。

ほかに、竪穴内や遺構外から小皿の底部も出土した。

石製品(図44、写真105) 砥石が10点出土した。19～22は竪穴内から、23・24は土坑9から出土した。砥石は、いずれも中央で折れていて正確な長さは測れない。しかし、遺構外出土の特別大きな砥石を除き、現状の規模では、長軸5～15cm、短軸3～5cm、厚さ1～2.3cmの範囲にまとまる。

金属製品・銀造関連遺物(図44・45、写真109～111) 鉄釘が破片で約60点、用途不明の鉄製品が7点、

鉄滓が約20点出土した。

25～32は鉄釘である。25～30は竪穴内(うち25・26は竪穴底部)から、32は第3柱穴群から出土した。

33・35は、工具かと思われる鉄製品で、竪穴内から出土した。33はヤリガンナのように反りをもってゐる。35は刀子のように先端が平らで、切先状を呈する。36は柱穴17から出土した。長さ21cmである。断面は長方形を呈し、先端に行くにしたがって小さく、平らになる。攪乱による現代の遺物である可能性もあるが、中世の鉄製品、あるいは鉄素材としてとらえたい。34は額状であるが、用途不明の鉄製品である。ほかに、竪穴内や柱穴17から一辺2.5～5cmの小鉄片が出土している。

鉄滓は、竪穴内から碗形滓の出土が多い。碗形滓は、炉の底部の形に固まった鉄滓であり、鍛冶屋の存在を強く想起させる。4分の3や4分の1に割れた碗形滓も出土している。ほかに、径2～3cmのほぼ球形をした鉄滓も多い。

錢貨(図45、写真95) 6点出土した。37は柱穴17から出土した。2枚が錯着し、1枚は「治平元寶」(北宋錢)である。ほかに、遺構外から4枚が錯着した錢貨が出土している。

その他の遺物(図44、写真97・98) 竪穴内から14世紀ころの在産とみられる播鉢が2点出土した。胎土が非常に粗く、焼成は一定ではない。17は口縁部が暗灰褐色、それより下部は黄褐色に焼けている。口径は約24.5cmを測る。摺り目は、1単位8本ずつで、2.6cmほどの間隔をおいて施されている。

このほか、遺構外から内耳鍋が2点、焼けて硬化した骨片が竪穴から10点、銅片が竪穴から少量出土した。

3 阿弥陀塔跡出土遺物

C-5区には、昭和44年(1969)まで、「阿弥陀塔」と呼ばれる石塔1基と、五輪塔2基が立っていた。昭和44年、土地所有者がこれらの塔を移転しようとしたところ、阿弥陀塔の下から陶器と経文石が発見された。これにまつわる経緯と、発見した遺物について記す。

遺物発見までの経緯 阿弥陀塔は、元禄15年(1702)の銘があり、段丘下の天竜川の方(南東)を向いて立っていた。その両脇に各1基の五輪塔があった。五輪塔は、形態的特徴から室町時代のものと思われる。

昭和44年、水田に飛び出したような位置に立っていたこれらの塔は、水田の形を整える目的で移転されることになった。その際、阿弥陀塔の下から、中近世の陶器と多数の経文石が発見された。しかし、陶器は、再び移転先の阿弥陀塔の下へ埋められた。

平成10年(1998)、今回の農道整備事業によって、阿弥陀塔は再び移転を余儀なくされ、再度陶器が掘り出されることとなった。今回地中から現れた遺物は、塔の重みのためか破損していたが、骨が入った灰釉四耳壺2点のほか、中世から近世に及ぶ時期の陶器が確認できた。

現在、阿弥陀塔・五輪塔は、所有者によって隣接地の墓地に再移転され、まつられている。

出土した遺物(図45、写真1・2・14・15) 出土した陶器は、灰釉四耳壺2点・灰釉小壺・鉄軸梅瓶・甕・天目茶碗・染付陶器で、今回の発掘調査を機に飯島町へ寄贈された。経文石は数点出土したが、新墓地に埋納された。

38・39は灰釉四耳壺である。両方とも骨甕器として使用されており、頸部を欠損している。どちらも13世紀前半、古瀬戸前期の陶器である。38は頸部以下がほぼ完形に復元でき、器高24cm、胴径21.9cm、底径9.5cmである。器形はややゆがんでいるが、肩が張る。内面底部近くには指で撫でた跡が縦方向に残る。釉は黄味がかった淡緑色で、壺の下半部にいく筋もたれて全体を覆っている。39は圓上復元で器高18.5cm、胴径16.8cm、底径9.8cmである。肩が張り、ずんぐりしている。釉は淡緑色に発色し、全面にいく筋もたれ

ている。41は灰釉小壺で、頸部と胴部下側を欠損する。胴部上側には径0.7cmほどの穴が1ヶ所うがたれている。淡黄褐色の釉は、頸部から肩部にかけてのみ施される。15世紀、古瀬戸後期の陶器である。40は染付陶器の丸碗である。陶質の胎土に白化粧を施し、呉須で草花文を描く。18世紀後半の瀬戸産である。

ほかに、鉄釉梅瓶は、破片であるが、肩部と胴部に佛蓮文を1周させ、間に円形の印花文を施す。釉は暗黄褐色に発色し、肩部からいく筋もたれている。14世紀前半、古瀬戸中期の陶器である。甕は、常滑産と中津川産が数片ある。常滑産の甕は、12世紀後半から13世紀前半の年代である。天目茶碗は、釉調が艶のない柿色である。

経文石は手のひらに入るほどの平らな河原石で、円形もしくは楕円形を呈する。文字は墨書されており、消えかかっているところもあるが、一石に4～8字書かれている。阿弥陀塔の下から発見されたという状況から、近世に埋納されたものと思われる。

阿弥陀塔跡付近の特徴 阿弥陀塔下に埋められていた陶器を概観すると、鎌倉時代・室町時代・江戸時代の遺物が混在している。おそらく、C-5・6区周辺では、墓地あるいは信仰対象としての場の役割が鎌倉時代から続いていたのであろう。

C-5・6区周辺には、後世の掘削と思われる不整形の土坑が多く存在する。これらは、阿弥陀塔を移転する際に骨董器などを掘り出した穴である可能性がある。大正から昭和にかけて送電線を設置したこともあり、それに伴う掘削もある。またD-6区の土坑27は、遺物は出土していないものの、集石墓の可能性もある。さらに遺跡全体からみると、①整穴から南へ10mくらいは柱穴などの遺構は少ないが、当地区になると多くなる、②遺構確認面に接したり、掘えられた状態で検出される大きな河原石が多い、③平面形が長めの楕円形を呈する土坑(土坑20・21・24など)が主軸をそろえてまとまる、という特徴がある。

当地区は段丘の先端部にあり、天竜川を見下ろすことができ眺めがよい。地形的には墓地に適した場所である。また、C-5・6区周辺をひとつの遺構群としてとらえることもできる。しかし、今回の調査では、墓地や信仰の場に関する明確な遺構や遺物は検出できなかった。墓地・墓域と断定することはできないが、その可能性を指摘しておきたい。

4 遺跡の特徴

縄文時代から中世までの各時代ごとに、遺跡の特徴を述べる。

縄文時代 縄文時代の遺構は残っていない。しかし中期後半～後期の土器が、破片ではあるが、多数出土した。石器も打製石斧を中心に、いくつか見つっている。また、尖頭器も見つっており、当地域で1万年にはすでに人の営みがあり、縄文時代の中期や後期には厚みを増すことが想像される。

弥生時代 弥生時代の埋蔵跡は、中世の遺構に切られ、下半部のみの残存のため、変形土器の単独出土という形になった。遺構外からも弥生土器が数回出土しており、これらの土器の年代は弥生時代中期初頭～末期に属す。過去に弥生土器が表面採集されていることもあり、縄文時代に続き、この時代にも付近で人々が生活していたとみられる。

古代 古代については、土坑22・36などから須恵器と土師器、灰釉陶器がわずかに出土しただけで、遺構は確認されなかった。

中世 中世の遺構では、東西10.5m、南北5.9mの大きな整穴を伴う獨立柱建物が目される。建物自体は整穴より大きく、東西14.2m(以上)、南北7.8m(以上)の規模である。整穴内からは、青磁碗や白磁皿などの輸入陶磁器や、古瀬戸の鉄釉梅瓶・灰釉水注・灰釉四耳壺など、日常品とは言い難い、めずらしい器形の陶器が出土している。一方で甕や片口鉢などの日常品も多く出土している。釘などの鉄製品や、鉄滓が多いのも特徴である。

建物の性格、竪穴の役割については、断定をさけ、可能性のある例を列記したい。建物の性格については、武士の屋敷、倉庫、工房など、竪穴の役割については、屋敷の土間、厩、倉庫などが挙げられようか。あるいは屋敷兼工房など、複数の性格を同時に備えていたかもしれない。また、出土遺物の時期が13世紀前半から14世紀後半までの幅をもっているため、各時期によって建物や竪穴の性格が変わった可能性もある。このことを追究するため、もっと時間をかけ、ていねいに調査すべきだったことが反省される。

もうひとつ特筆されることは、昭和44年まで立っていたという阿弥陀塔と五輪塔のあった場所を発掘できたことと、当時その下から掘り出された陶器を報告できたことである。陶器のうち古瀬戸灰釉四耳壺2点(13世紀前半)は、どちらも骨蒸器であった。ほかに室町時代・江戸時代の陶器もあって、墓地や信仰の場としての役割が、鎌倉時代から続いていた可能性がある。このような場の役割や境界を、遺跡北西側の沼地や、竪穴を伴う掘立柱建物などを加えて遺跡全体の中で考えなければならない。また、今後は遺跡全体ばかりでなく、発掘していない所も含めて考えたり、そこでひとつのモデルを設定し、他地域と比較検討することも必要であろう。

第4章 南羽場遺跡

はじめに

南羽場遺跡では、「第2章第3項(3)」で触れたとおり、昭和47年に現在の国道153号の敷地で発掘調査がおこなわれ、南北朝時代を中心とした多種多様な遺物と、住居址や竪穴状遺構などが見つかった。したがって、今回の調査でも、中世の遺構や遺物の検出が予想された。

今回の南羽場遺跡の発掘調査は、平成10年度と11年

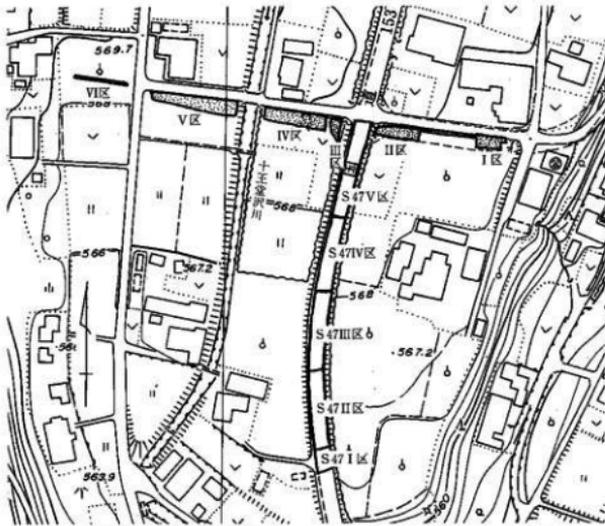


図10 南羽場遺跡調査範囲略図(1:2,500) 「S47〇区」は、昭和47年調査

度の2ヶ年度でおこなった。農道整備事業にともなって現在の道路を拡幅する部分が調査対象地であった。調査区の区割りは図10のとおりで、調査年度と調査面積は、次のとおりである。

平成10年度—I区:72㎡ II区:195㎡ III区:50㎡

平成11年度—IV区:288㎡ V区:350㎡ VI区:45㎡

I区・II区は、昭和初期まで桑園、近年まで果樹園、調査開始時まで野菜畑で、地主が篤農家だったことから、鍬がローム層深く達し、全体にかなりの擾乱を受けていた。とくにII区では、深耕のうえ有機物が大量に入り、灌漑用・消毒用の配管があちこちに埋設されていたため慎重な調査を強いられた。調査期間中に雨が続いたのも作業をつらくさせた。I区は2m幅のトレンチ調査としたが、東側については幅を広げて調査した。II区は東側をトレンチ調査、西側を全面調査した。結果的には、主に耕作土から中世・近世の陶磁器が多く出土し、特徴ある遺構も見つかった。

国道153号西のIII区・IV区は、近年まで果樹園だったところである。III区の調査は、当初本年度にIII~IV区部分を一つの調査区として実施する予定だったものが急ぎょ繰り上げられたものである。農道と国道が交差する隅切り部分のみという狭い範囲での調査となり、中世の陶磁器とともに多数の柱穴と土間状の遺構を検出したものの、建物跡の広がりをつかみきれなかったことが悔やまれる。これは、翌年度のIV区の調査で、III区との間2.5mの部分がやむをえず調査できなかったためでもある。

IV区では、東西(道路長)約30m、南北(道路幅)約10m分を全面発掘した。竪穴をとまなう建物跡や、特徴のある土坑が多数確認された。ただ、幅70~80cmの上下水道管によって、遺構の一部が破壊されていたことは残念であった。遺物は、13~14世紀に東濃で焼かれた山茶碗が完形で見つかったほか、主に13~15

世紀の陶器片が出土した。

IV区から十王堂沢を越えたV区は、調査開始時まで水田であった。IV区以东とは様相が異なり、明確な遺構は少なく、遺物も多くなかった。なお、VI区は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、V区の西端から縄文中期の深鉢が出土したため、縄文時代の遺構の有無を確かめる目的で、果樹園内に幅1.5m・長さ30mのトレンチを設定して調査をおこなった。

土層は、V区以外は、基本的には上から耕作土、ローム粒を含む褐色土、ローム質土（ローム土の二次堆積）、礫層に分けることができる。多くの遺構はローム質土の面で確認でき、遺物は主に褐色土中から出土した。V区は、東側10mは上記と同様だが、それ以西は、ローム質土が河川の浸食を受けて流れ去り、黒色土が厚く堆積している。したがって、上から、耕作土、黒色土、礫層の層序である。

1 遺 構

(1) I 区

土間状遺構（図23） A-1～B-1区の東西1.3m・南北3.5mの範囲で、ローム層の上面に光沢があり、硬く固められた土間状の遺構を確認した。ただし、この範囲以外は耕作によって攪乱されて不明である。この土間状遺構の中央やや西に1基、南西に2基の柱穴があるが、土間状遺構との関連は確認できなかった。出土遺物はなく、時代は不明である。

輪廻い石積土坑（図23・24、写真39） A-1区から、平面円形の土坑内に石を重ねた土坑を確認した。調査区の北東で、土間状遺構から見ると北に当たる。

上面のレベルは土間状遺構と同じで、まず、ローム層を直径90～95cm、深さ45cm掘り、次に、丸石や割れた石など、形状・種類を選ぶことなく雑に入れ、上面は平らになるように仕上げている。石積み周囲は赤褐色土が環状に囲んでおり、幅13cm程度が固められている。とくに南西側はていねいに固められている。石積の内部・上層とも遺物は出土しなかった。

土 坑（図23） 上記の遺構の北東側には、ローム層を南北50cm・深さ18cm掘り込んだ土坑がある。この底付近の黒土層中には長径30cm・短径20cm・厚さ10cmの扁平で楕円形の石が平らに埋められており、遺構の上部からは、18世紀前期のゲンコツ茶碗と、同じく近世に焼かれた小型深鉢が出土した。地表近くからは染付陶器の破片も出土した。

竪穴状遺構（図23・25） B-2～3区から、竪穴状遺構の一部を検出した。竪穴は調査区域外南側に続くため全体は明らかにならないが、付随する柱穴5基が確認できた。

遺構確認面から1m掘り下げて床面を検出した。床面の規模は、東西が2.1m、南北は調査区域内1.2mで、ロームを平らに固めてある。竪穴の壁は全体に直立だが、上部は外側に開く。東西両壁の外側には、ローム質土の多い褐色土が高さ15cm、東西の幅60cmに積まれていた。この断面はマウンド状である。雨水の浸水を防ぐ工夫であろう。

竪穴内からは、建物の主柱になるとみられる角柱が4基と、丸柱1基を検出した。角柱は15cm角で、竪穴の壁に密着して垂直に立てられている。深さは20～25cmである。丸柱は直径15cmで、北壁の中央に、20cm掘って立てられている。

竪穴内の埋没土を断面で観察すると、下層にローム質土が帯状に埋没し、その上部は黒褐色土で占められていた。下層のローム質土については、竪穴の壁が崩れたとは考えられないことから、建物が放棄された後、赤土の壁が崩壊して竪穴内に埋まったものと推測される。土蔵のような建物だった可能性がある。

遺構にともなう遺物は検出されなかった。

その他(図23) I区から検出した柱穴は、土間状遺構・竪穴状遺構の項に記したのもも含めて20基あるが、どれも耕作によって上部を掘られていた。柱の平面形は方形と円形の2種類がある。

B-1区南端から角状平板石が、同区南東隅から銭貨が出土したが、どちらも遺構は確認できなかった。

(2) II 区

礎石をとまなう建物址(図26、写真40~45) 遺構の大部分に耕作が及んでいるため、明確にならない部分が多いが、A・B-13・14区にまたがる東西4m、南北2~3mの範囲にロームを硬くたたいた土間状の面があり、その範囲内と周囲から、柱を支えたとみられる河原石や柱穴を検出した。なお、これらの礎石・柱穴は、「柱跡」として一括し、番号をつけた(表4)。柱跡の散在する範囲は、A・B-12~15区におよぶ。

当初ロームの上に直接据えられたようにみえた河原石は、その下部を調べると、4基以外は、ローム層に掘ったピットの中にいくつかの石を入れ、組み合わせで最上部の石を平らに固定しているものとわかった。内部の石とロームの間は茶褐色土で固められていた。柱の礎石と考えられ、ほぼ同じレベルに上面を出す同様の遺構が16基確かめられた。ただし、このうち5基には最上部の平らな石がないが、耕作によって取り去られたためとみられる。

これらのうち8基は、ほぼ南北方向に並ぶ4基によって2つの列をなしている。西側のD列は、5mの間に、北から1.6m・1.9m・1.5mの間隔で4基ある(柱跡10・8・23・1)。東側のE列は、D列にほぼ平行して3.8m東にあり、4.4mの間に、北から1.8m・1.4m・1.2mの間隔で4基ある(柱跡13・12・11・5)。E列の西側は、攪乱によって明確にならないが、ほぼ平行に引くことのできるF-F'の線上(柱跡18・14)また、I-I'の線上(柱跡20・22)にも柱跡がある。

建物址からは、このような礎石とともに、掘立柱の跡とみられる柱穴も検出された。柱跡19の柱穴は柱跡18による柱を支えたようにみえ、柱跡24の柱穴は柱跡17の礎石の西側に接している。

II区から出土した陶磁器の大半は、この建物址の土間状遺構面と上層の耕作土中から出土した。なかでも、柱跡17・7・8・11・12の周辺からは、16世紀後期の中国産染付皿1点、15~16世紀の天目茶碗の破片、16世紀後期の鉄軸小杯1点、16世紀中~後期の灰軸丸皿の破片が見つかった。柱跡11西北で浅い皿状に掘られている遺構からは、16世紀の灰軸丸碗が破片で出土した。柱跡20の東側からは、16世紀初期の播鉢が出た。全体としては、15世紀後半~16世紀後半に瀬戸・東濃で焼かれた陶器が中心だが、土間状遺構面からは13世紀の山茶碗・片口鉢も出土している。このほか、内耳鍋も多数見つまっている。

堀状遺構(図27) A・B-11・12区に、黒色土面が広がっていたため、幅1mのトレンチによって東西方向・南北方向の断面を確認した。南北の断面は攪乱によってはっきりしなかったが、東西方向は5mの間が緩いU字形で深さ2m掘り込まれていることが確かめられた。底は鉄分の付着した硬いロームで、その上に湿り気のある黒色土が2層堆積していた。限られた範囲での調査のため、南北にのびる堀になるのか、池状のものなのか断定はできない。

なお、この堀状遺構が埋まった後、上記の建物址に関係する柱穴が掘られている。したがって、堀状遺構は建物址より古いものとわかる。

(3) III 区

土間状遺構I(図28・30) III区の中央から北側に位置する。東西3.5~3.6m、南北5.35mの長方形で、床面全体を硬く固めたため周囲より低くなっている。中央部が最も低くなっているが、全体に凸凹が多い。

遺構の南辺と東辺では、硬化面がゆるやかに上昇し、高さ2cmほど盛り上がり、垂直に落ち、その外側は軟弱なロームとなる。これは、角状の土台あるいは敷居で仕切られたためとみられ、土間とそれに続く

板の間を持つ建物を連想させる。不明瞭だが、西辺にも同様の遺構がある。

土間状遺構 2 (図28・30) 土間状遺構 1 内の北側部分に土間状遺構 2 が重なっている。東西3.5m、南北2.5mの隅丸長方形で、南北の断面は緩やかなU字状、深さは最大で10cmである。東側は、柱穴19の上面を張り床で固めている。中央西側には3層の張り床が確認でき、この上面は東側より高くなる部分があるため、この遺構と重複してもう1基、小さめの土間状遺構があった可能性もある。

土坑 (図28・30) 土坑は3基を検出した。土坑1は土間状遺構1の中央やや南西に位置するが、出土遺物はなかった。土坑2は、土間状遺構1の東南隅にあり、底部北西側の黒土中から10~15cmの円礫が3個出たが、ほかには遺物はない。土間状遺構と同一時期に使われたものとみられる。土坑3は土間状遺構から50cm南西にあって、この中層から14世紀の片口鉢が破片で出土した。

柱穴 (図28・30) III区からは、合計94基の柱穴が確認された。分布は、調査区北半分ほどに位置する土間状遺構付近が中心だが、南側にも少なくない。柱穴21と25からは、上層部に炭化物が固まって検出された。土間状遺構面には炭化物がみられないことから、土間状遺構とこの柱穴による建物は同時代のものではないと思われる。また、東西に並ぶ柱穴34・30・26、18・15、南北に並ぶ30・15・11の柱穴は、平面形・深さが同一形態で、第三の建物跡の一部であろう。

(4) IV 区

①住居址

平面形が一辺5.0~5.8mの隅丸方形を呈し、内部で火を使った跡のある1号住居址と2号住居址を基準にして、それらに平面形や大きさ、深さが近似している遺構を住居址とした。全部で5基を検出した。

1号住居址 (図31・32、写真47~50) 本遺構は、A-4~B-4区に位置する竪穴式の住居址である。北側の5号住居址を切るが、南側は上下水道工事による攪乱で破壊されている。1号・2号掘立柱建遺構址に挟まれ、主軸を同じくしているので、互いに付設していた可能性がある。平面形は、東西5.3~5.8m、南北4.3m以上5m以下のほぼ隅丸方形を呈する。掘り込みの深さは、最大で33cmを測る。壁は、東側と西側については、外側に開きながらもしっかりと立ち上がるが、北側はゆるやかに立ち上がる。南壁は残っていない。床はほぼ平坦であるが、東側が5cmほど低い。また、全体が固くしまっている。

床を掘り込んで、いくつかの土坑とピットが存在する。土坑は、東壁に接するものが4基、西壁に接するものが1基、北壁に接するものが1基ある。1号住居址と5号住居址の前方に重複する土坑15は、1号住居址に切られる。また、土坑を横切って1号住居址の北壁に続くような固い部分があった。5号住居址との新旧関係は不明だが、同時代である可能性もある。東壁に接する土坑14は、土坑いっぱいにはローム塊が落ち込んでいて、断面で見ると、上部3分の1がローム塊で占められていた。土坑18にも大きなローム塊が落ち込んでいた。その他の土坑は、1号住居址の覆土と同様の黒褐色土で埋まっている。ピットは、断面が皿状で浅いものが多く、柱穴にはならないと考えられる。

床面付近では、床面に接した状態で、平たく割れた角礫を多く検出した。角礫は一辺6~30cm、厚さ2~5cmで、竪穴の北西隅に多く固まっている。ほとんどは若干の被熱を受け、中には真っ赤に焼けた石も数点ある。竪穴の南西隅には、竪穴覆土上層にある配石遺構に組合って支える形で、河原石が数点存在する。河原石は径18~54cmの楕円形を呈し、床面に接している。被熱は受けていない。

竪穴覆土上層では、石で囲んだ炉状遺構と、大きな河原石を配した遺構を検出した。また、上層から掘り込まれた柱穴やピットが3基あった。

炉状遺構は、竪穴中央部北寄りに位置し、灰が東西84cm、南北52cmの範囲に堆積している。灰の厚さは最大9cmである。この灰層を掘り込み面として、柱穴が灰層を切っており、下の黒褐色土まで達している。灰層のまわりには、炭層や炭粒を含む層が薄く広がっている。炭層のさらに外側には、角礫がまばらに巡

っている。礎は、東西約1.4m、南北1.6mのほぼ円形に配され、それぞれは一辺9～28cmの大きさである。

配石遺構は、竪穴の南辺に沿って存在する。一番南側は、上下水道工事で破壊されており、径34～62cmの河原石が2列にわたって残っている。ほとんどが竪穴覆土上層の黒褐色土中に据えられているが、石が2段に組まれている箇所が一部にあり、そこでは下の石は底面に接している。石の上面はほぼそろっていて、建物の礎石（基礎）になったり、上に床を張ったような機能が考えられるが、確証はない。ただ、先述した石で囲んだ炉状遺構の石上面と、配石遺構の石上面の標高がほぼ同じであるため、例えば床を張った部屋に囲炉裏があるような、直接的な関係があったという推測もできる。

柱穴は、炉状遺構の灰層と切り合う柱穴の東80cmの位置にも存在する。この柱穴の掘り込み面は灰層よりも上にある。掘り下げ時に遺構確認がしづらかったため、断面に現れた形でしか確認できなかった。

このように、1号住居址には建て替えなどの変遷が何度かあり、土層堆積状況は複雑である。面として確認できた層は、炉状遺構の南西側に広がる暗茶褐色土層（東西方向の断面図でいう14層）と、その北側に広がる暗茶褐色土層（南北方向の断面図でいう8層）である。前者は、東西2.3m、南北2.1mほどの範囲に広がり、茶褐色の繊維状粒を多くふくみ、サクサクとして柔らかいのが特徴である。後者は、東西2.8m、南北90cmほどの範囲に広がる。北側は1号住居址の北壁までであるが、土坑15を覆い隠す状態で堆積する。黒褐色土中に大きめのローム粒が多く混じり、ややしまっている。この土層を掘り込み面にして、竪穴の北壁沿いにピットを1基検出した。

1号住居址は、竪穴内にほとんど柱穴がないことから、竪穴外の柱穴によって上層が支えられていたと考えられる。南北軸は、磁北から12～20°東に傾く。この1号住居址は、竪穴底部が機能していた時期、炉状遺構と配石遺構が機能していた時期、炉を掘り込んで柱穴を作った時期、炉の灰層より上層の茶褐色土を掘り込んで柱穴を作った時期の、4回ほどの変遷があり、どの柱穴がどの時期に属するのかは不明である。しかし東西3間、南北3間で、各柱穴の間隔は1.8～2mほどであることは言えよう。

遺物は、竪穴の床面直上から、常滑産の甕2点、古瀬戸灰釉四耳壺1点が出土している。竪穴覆土の中～上層では、常滑産の甕1点、山茶碗1点、中世のものと思われる土器1点（東西方向の断面図でいう12層から）、古瀬戸灰釉四耳壺1点（同断面図6層から）、磁石1点（南北方向の断面図でいう8層から）、配石遺構の石と同レベルから中津川産の甕1点、炉状遺構の灰層の下層から天目茶碗1点が出土している。建物の東辺をなす柱穴列の柱穴146から鉄貨破片、柱穴153から鉄滓が出土している。

このうち古瀬戸灰釉四耳壺は13世紀前半、山茶碗は13世紀後半、甕は14～15世紀、天目茶碗は15世紀中～後半の所産である。遺物の出土状況と年代から考えると、13世紀後半～15世紀と、15世紀中～後半の2時期に分かれることが考えられる。

2号住居址（図33、写真51～53） 本遺構は、A-6～7区に位置する竪穴式の住居址である。北側が調査範囲外のため調査していないが、平面形は、東西5.7m、南北2.8m以上で、方形を呈するものと思われる。掘り込みの深さは最大で48cmを測る。壁は内湾しながらやや外側に開く。

柱穴は、竪穴内から2ヶ所検出した。東側は、一辺30～35cmの方形を呈する柱穴が2つ重複しており、底部は一辺20cmの方形である。西側の柱穴は、東西47cm、南北74cmの隅丸長方形を呈し、底部は一辺14～17cmの方形で、底に石を設置する。竪穴底部から柱穴底部までの深さは、東側が64cm、西側が42cmである。竪穴のまわりにもいくつか柱穴があるが、主柱穴は竪穴内の柱穴で、まわりは補助的な柱穴と考えられる。

竪穴内には、中央部に炉を検出した。炉の中心には、東西90cm、南北1.2mほどの範囲に炭と焼土が多く混じる土が堆積する。その東側や南側には、竪穴底部のローム層が被熱を受けて、東西2.7m、南北1.9m以上の範囲が赤く硬化している。炉の中心部の西側には、ロームをマウンド状に盛上げた遺構を検出した。盛上げた厚さは7cmほどであるが、その下層には炉の中心部と同じように、炭と焼土が多く混じる土が堆積する。また、東側にも一部にロームを盛上げた跡があるので、炉に対して、ロームを盛上げた施設が巡

っていたと考えられる。炉は、中央部がゆるやかにくぼみ、盛土との最大比高差は18cmである。

また、竪穴内には、壁に沿って、最大幅40cm、最大深8cmの周溝がある。周溝は、竪穴の南東隅と南西隅で途切れ、全周はしない。竪穴の南東部では、炉を正面にして、住居への出入り用と思われるステップ状遺構を検出している。

遺物は、竪穴覆土中～下層より、中津川産の甕3点、中津川産の片口鉢1点が出土している。

竪穴覆土の中～上層で、竪穴の北東隅において、炉状遺構を検出した。本遺構は、2号住居址の遺構確認面より少し上面で確認でき、竪穴覆土の暗茶褐色土を掘り込んでいる。平面形は、東西60cm、南北60cmほどの不整形である。断面は楕円状を呈し、残りの良い部分での深さは、最大で16cmである。遺構には、大小の礫、炭粒、鉄滓、砥石、完形の山茶碗などが、粒子の粗い灰白色砂粒と共に埋まっていた。底部には、暗灰白色砂粒が2～3cm堆積し、カチカチに固まっている。この暗灰白色砂層の上部には、小礫が多く確認できた。また、遺構の掘り込み面では、表面のみであるが、径1.5mほどの広範囲において、カチとした硬化面がみられる。この掘り込み面や底部は、赤く変色しているわけではないが、被熱を受けたものと思われる。

遺物は、灰白色砂層中より完形の山茶碗、砥石、鉄滓、鉄滓付着の礫、鍛造剥片、硬化した掘り込み面より青磁碗1点が出土した。このうち、山茶碗、砥石、礫などに、タール状の黒い付着物を観察できた。これらは、本遺構の廃絶と関係があると思われる。

2号住居址と中～上層の炉状遺構は、同時に機能していたとは考えられないが、遺物の年代は13～14世紀にまとまり、両遺構の時間差はあまりないと考えられる。炉状遺構は、鍛冶炉の可能性があるが、山茶碗が完形で残っていた点から埋納遺構である可能性もあり、性格は決しきれない。

3号住居址(図33、写真54) 本遺構は、B-7区に位置する竪穴式の住居址である。北側が上下水道工事による掘削で破壊されている。遺構南側は調査範囲外のため調査していないが、平面形は、東西約5.5m、南北2.5m以上で、隅丸方形を呈するものと思われる。掘り込みの深さは、最大で28cmを測る。底部はほぼ平坦である。壁は、ゆるやかに立ち上がる。土坑3と土坑17が重複し、土坑17は竪穴に切られる。土坑3については不明であるが、場所の絶妙さから考えると、同時に機能していた可能性もある。柱穴は、一辺20～25cmの方形のものが、竪穴周辺に4基ほどみつまっている。

遺物は、床面から天目茶碗1点、内耳鍋1点、竪穴覆土中から灰輪平碗3点、砥石剥片1点、鉄滓1点が出土した。竪穴周辺の柱穴48からは内耳鍋1点が出土した。遺物の年代は、15世紀後半にまとまる。

4号住居址(図31) 本遺構は、A-3～4区の北側に位置する竪穴式の住居址である。遺構北側の大半は、調査範囲外のため調査していない。また、遺構の東側は後世の掘削で破壊されており、西側は5号住居址を切っている。断面図で見ると、東西5.8mの規模である。掘り込みの深さは、最大で33cmを測る。底部は広くしまっており、東側の方が10cmほど低まっている。壁は、非常にゆるやかに立ち上がる。柱穴は、隅丸方形のものを竪穴内に3基検出しているが、上部構造は不明である。柱穴182内には、炭が1ヶ所にかたまっており、灰の塊も混じっていた。

遺物は出土していない。

5号住居址(図31、写真55) 本遺構は、A-4～5区北側に位置する竪穴式の住居址である。遺構北側は、調査範囲外のため調査していない。南側は1号住居址に切られ、東側は4号住居址に切られる。平面形は、東西5.4m、南北2.4m以上で、隅丸方形を呈するものと思われる。掘り込みの深さは、最大で40cmを測る。底部は広くしまっており、ほぼ平坦である。また、鉄分が沈着して赤くなっている。西壁と東壁は、やや開いて立ち上がり、南壁は非常にゆるやかに立ち上がる。竪穴内には柱穴がないため、外側を巡る一辺22～36cmの方形の柱穴が上層を支えていたと思われる。柱穴の深さは、24～45cmとまちまちであるが、東西3間の建物を想定できよう。

遺物は、竪穴覆土中から片口鉢(13世紀後半)、砥石剥片、弥生土器破片、打製石斧、偏平な不明石製品各1点が出土した。

②掘立柱建物址

ほぼ等間隔で柱穴が並び、それらを結んだ線が方形を呈するものを掘立柱建物とした。全部で3基を検出した。どれも南北軸が桁行と考えられ、これを主軸とした。柱穴やピットは、全部で240基ほど検出しているが、個々の状況については、表4に載せた。

1号掘立柱建物址(図34) 本遺構は、A-3～B-3区に位置し、1号住居址のすぐ東に付設すると考えられる。柱穴131・132・133・136・145・150・152・153・154・164・172・178などがこの建物に関係する。桁行2間(4.1m)、梁行2間(3.2m)の規模で、柱穴間隔は、東西方向では東から1.8～1.9m、1.2～1.4m、南北方向では北から2.1～2.3m、1.8～2.1mである。主軸は、磁北から22°東へ傾く。柱穴は、一辺28～40cmの方形を呈するものが多い。遺構確認面からの深さは、22～46cmである。

遺物は、柱穴146から銭貨破片が、柱穴153から鉄滓が出土した。柱穴146は、1号住居址の東辺を構成する柱穴と共通する。

2号掘立柱建物址(図34) 本遺構は、A-5～B-5区に位置し、1号住居址のすぐ西に付設すると考えられる。桁行3間(5.4m)、梁行4間(4.5m)の規模を測る。柱穴74・75・80・81・84・89・90・93・94・95・99・102・103・105・113・115のほか、1号竪穴状遺構内の柱穴などがこの建物に関係する。柱穴間隔は、東西方向では東から0.9～1.2m、1.0～1.2m、0.9～1.2m、1.0～1.2mである。南北方向では北から1.8～2.0m、1.0～1.4m、2.2mである。北辺には幅60cmの底が付く。主軸は、磁北から24°東へ傾く。柱穴は、一辺23～40cmの隅丸方形か、円形を呈するものが多い。遺構確認面からの深さは、ほぼ22～35cmを測る。

建物址中央部には、1号竪穴状遺構(図35)を検出した。本遺構は、土坑16と重複し、南辺を上下水道工事によって破壊されている。平面形は、東西1.7m、南北4m以上の長方形を呈する。深さは最大20cmを測り、断面は台形である。断面には、遺構覆土を切る柱穴が1基確認されたが、遺構底部にあるその他の柱穴や溝状遺構は、竪穴状遺構と同時に機能していたと考えられる。建物址を構成する柱穴は4基検出している。遺構底部からの深さは、北から23cm・23cm・22cm・15cmである。北端と南端の柱穴は、一辺19cmと33cmの方形を呈する。真ん中の2つの柱穴は、一辺29～30cmの隅丸方形を呈し、それぞれの東側に、溝状遺構がのびる。溝状遺構は、どちらも規模が同じで、柱穴を入れた長さ1m、幅23cm、最大深20cmである。

遺物は出土していない。

3号掘立柱建物址(図34) 本遺構は、A-8～B-8区に位置する。柱穴4・9・11・13・14・35などが、この建物に関係している。桁行2間(3.8m)、梁行1間(1.7m)の規模を測り、南北方向の柱穴間隔は、北から1.9m、1.9mである。東辺には、間隔が1.2～1.7mの小穴列が付く。深さが7～13cmと、柱穴と呼ぶには浅すぎ、東西方向の列がそろわないが、幅80cmの底になる可能性がある。主軸は、磁北から21°東へ傾く。柱穴は、一辺20～36cmの方形を呈するものが多い。遺構確認面からの深さは、26～43cmを測る。

遺物は出土していない。

③竪穴状遺構

竪穴式の住居址と同程度の規模があるが、それらとは平面形が異なっていたり、深さや覆土が異なっており、住居址とは呼びにくい遺構を竪穴状遺構とした。

1号竪穴状遺構(図35、写真56) A-5~B-5区に位置する。2号掘立柱建物址内の中央部にあり、建物址を構成する。本遺構については、「2号掘立柱建物址」の項に記したのでここでは省略する。

2号竪穴状遺構(図35) 本遺構は、A-8区に位置する。遺構の北側と西側は調査範囲外のため、調査していない。柱穴1と4に切られる。遺構上部の一部は、後世の擾乱で破壊されている。平面形は、東西2.6m以上、南北4m以上の方形を呈するものと思われる。掘り込みの深さは、最大で1.38mを測る。底部はやわらかく、平坦である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。壁の内側には、灰茶褐色の砂質土が30cmほどの厚さで1周するが、壁に貼りつけて固めているわけではない。埋土は砂であり、白っぽい砂と黒っぽい砂の互層となっている。層には傾斜がつき、北側が高く、南側が低い。遺物は、出土していない。

柱穴の多くが中世の所産であるとした場合、柱穴が遺構覆土の砂層を切っていることから、本遺構は中世以前に属する。また、本遺構のすぐ西側には、十王堂沢川が南北に流れていることから、水を招き入れたり、砂を利用する目的で、川が運んでくる砂をためておくなど、川に関連した施設が考えられる。

④土 坑

土坑は、18基検出した。その中で、平面形が径69~116cmの円形で、断面が箱形もしくは台形(フラスコ状を含む)を呈するなど、形態的に類似した土坑が8基ある(土坑3・4・7・8・9・11・13・17)。これらはいずれもロームブロックを含むなど覆土の感じが似ており、土坑どうしが近接してつくられる傾向がある。深さは28~88cmまであり、まちまちである。このような土坑は、若森社遺跡発掘の際にも検出されている。使用された年代と目的は似ていると思われるが、用途は不明であり、興味深い遺構である。

土坑9以外の土坑からは、遺物は出土しなかった。

土坑1(図36、写真57) A-7~B-7区から検出され、2号住居址と3号住居址の中間に位置する。柱穴らしいピットと重複するが、新旧関係は不明である。平面形は東西1.14m、南北1.76mの長方形を呈する。土坑東側にやや深い所があり、25cmを測る。断面はほぼ皿状である。

土坑2(図36、写真58) A-7~B-7区から検出され、2号住居址と3号住居址の中間に位置する。平面形は1.2×1.1mの楕円形を呈する。深さは最大15cmで、断面は皿状である。

土坑3(図33、写真59) B-7区北東部に位置する。3号住居址と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は径90cmの円形を呈する。深さは最大43cmを測り、断面はほぼ台形である。

土坑4(図36、写真60) B-8区西部に位置する。西側の一部は調査範囲外のため、調査していない。平面形は東西80cm以上、南北1.1mの楕円形を呈するものと思われる。深さは最大75cmを測り、断面は箱形である。

土坑5(図37、写真61) B-2~3区に位置する。北側の一部は、上下水道工事による擾乱で破壊されている。柱穴232と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は東西1.12m、南北1.1m以上の不整形円形を呈する。底部は平らではなく、最大深は19cmである。

土坑6(図37) B-2区に位置する。南側は調査範囲外のため、調査していない。規模は東西62cm、南北30cm以上である。底部は平らではなく、最大深は18cmである。

土坑7(図37) A-3区南端に位置し、1号掘立柱建物址の東、土坑9・13の西に近接する。平面形は71×68cmの円形を呈する。深さは最大28cmを測り、断面は、一方の壁が垂直に立ち上がる台形である。

土坑8(図37、写真62) A-3区南東部で検出され、1号掘立柱建物址の東側、土坑9・13の北側に位置する。平面形は径1mほどの円形を呈する。深さは最大77cmを測り、断面はフラスコ状である。

土坑9(図37、写真63) B-3区北東部で検出され、土坑7の南側、土坑10・11の北側に近接する。土坑13に切られる。平面形は94×92cmの円形を呈する。深さは最大31cmで、断面は台形である。遺物は、土師器もしくは土師質土器が2点出土している。古代~中世のうちに入る。

土坑10(図37、写真64) B-2区北西部に位置する。南側が上下水道工事による掘削で破壊され、西側は土坑11に切られる。規模は東西1.2m以上、南北70cm以上である。深さは最大43cmを測り、壁はなだらかに立ち上がる。

土坑11(図37、写真64) B-3区北東部に位置する。南側が上下水道工事による掘削で破壊され、東側は土坑10を切る。平面形は径1mほどの円形を呈するものと思われる。深さは最大80cmで、断面はフラスコ状である。

土坑12(図37) A-2区北西端に位置する。北側は調査範囲外のため、調査していない。規模は東西1.5m、南北50cm以上である。底部は平らではなく、最大深は19cmである。

土坑13(図37、写真63) A-3~B-3区東端に位置し、土坑8の南側、土坑10・11の北側に近接する。土坑9を切る。平面形は1.12×1.02mの不整形円形を呈する。深さは最大88cmを測り、断面はフラスコ状である。

土坑14(図32、写真49) A-4区南東端で検出され、1号住居の東壁沿いに位置する。東西35cm、南北69cmの不整形円形を呈する。深さは最大20cmを測る。覆土上層には、大きなローム塊が落ち込んでいた。

土坑15(図31、写真49) A-4区中央部で検出され、1号住居と5号住居の両方に重複するが、1号住居に切られる。また、土坑を横切って、1号住居の北壁に続くような固い部分があった。5号住居との新旧関係は不明であるが、同時代である可能性もある。平面形は東西60cm、南北1.1mの不整形円形を呈する。遺構確認面からの深さは最大で25cmを測るが、壁はほとんど残っていない。

土坑16(図35) A-5~B-5区から検出され、2号掘立柱建物址内の1号竪穴状遺構の東側、1号住居の西側に近接する。1号竪穴状遺構と柱穴98に一部重複するが、新旧関係は不明である。平面形は東西1.1m、南北1.0mの不整形円形を呈する。深さは最大で31cmを測り、断面はほぼ楕形である。2号掘立柱建物址を構成する土坑である可能性がある。

土坑17(図33、写真54) B-7区南東部で検出され、3号住居の東壁際に位置する。南側は、調査範囲外のため、調査していない。断面観察では、3号住居に切られる。平面形は62×60cmの不整形円形を呈する。深さは最大で51cmを測り、断面は袋状である。

土坑18(図32、写真49) B-4区北東端で検出され、1号住居の東壁際に位置する。平面形は東西54cm、南北1.08mの楕円形を呈する。深さは最大で36cmを測り、断面はほぼ楕形である。覆土上部には、ローム塊が落ち込んでいた。

(5) V 区

V区は、A・B-3~9区の土層堆積状況がほかの調査区と異なっている。本章の「はじめに」でも触れたが、この部分は、堆積したローム質土が、河川の侵食によってローム質土下の礫層まで削られている。この礫層はかなり凸凹があり、くぼんだ所には黒色土が堆積する。礫層上からは、遺物が出土した。ローム質土が残る部分は、調査区東端のA・B-1・2区のみである。ローム質土の削られ具合から、河川は南西方向に流れたと考えられる。ローム質土上面と礫層上面の比高差は、最大77cmである。V区と道路を挟んだ西のVI区には浸食された跡はみられないことから、道路部分までが河川の影響を受けたものと思われる。

溝状遺構(図38、写真66) ローム質土が残るB-2~3区に位置する。溝はほぼ東西に延び、西側はローム質土から礫層へ移る斜面に達している。さらに西側は調査範囲外のため、調査していない。規模は、長さ6.8m以上、幅47~23cmである。断面は楕形を呈し、深さは最大で20cmを測るが、斜面部では徐々に浅くなっていく。遺物は、土器が2点出土している。土器が小片のため、年代は不明であるが、古代~中世

に属すと思われる。

土坑1(図38、写真66・67) ローム質土が残るB-2区南西端に検出され、溝状遺構のすぐ南側に位置する。平面形は75×67cmの不整楕円形を呈する。底は平らではなく、深さは最大で29cmである。西壁沿いには、土坑底部より深いピットが2つある。遺物は出土していないが、すぐ北にある溝状遺構と何らかの関係があり、遺構群として南側へ続くと思われる。南側は、V区から1mほど離れた地点で、本郷第3分譲住宅地造成工事にもなう試掘調査を行っており、古代と思われる土坑や柱穴、硬化面などを検出している。

土坑2(図38、写真68) A-5区の小礫が混じる茶褐色土層上面より検出される。平面形は105×81cmの楕円形を呈する。深さは最大で79cmを測り、断面は逆台形である。遺物は出土していない。

その他 明確に遺構とはいえないものをここに記す。

第一に、A-9区に位置する、縄文中期土器の破片のまとまりである(図29、写真69)。土器は、大きな礫を含む黄褐色砂質土層上面に散らばり、ほぼ1/4個体に復原できた。この黄褐色砂質土層は、東西2.3m、南北4.8mの範囲がやや隆起し、まわりはややくぼんでいて黒色土が堆積していた(写真70)。この黒色土の下層で、遺跡西端部には、拳大～人頭大の礫が多く混じり、それに混じって縄文土器片が6点出土した。

第二に、B-4区に位置する礫群である。小礫が混じる茶褐色土層が続く面上で、東西4m、南北2mの範囲には、大きな礫がまとまる。ここより4mほど北東の同面上で、石器が2点出土していることから、何らかの関連が推測できる。しかし、土や礫の変化が漸移的であることを考えると、まったくの自然の造作であるという感もぬげない。

第三に、A-3～B-3区に位置する、自然流路状のくぼみである。ローム質土から礫層へ移る斜面の下場に沿ってごく浅くくぼみ、黒色土が堆積する。すぐ西側には、石器が2点出土している(写真71・72)。

第四に、B-1区のローム質土上に設置される礫群である(図29)。径37～10cmの礫が9個ほど散らばる。

(6) VI 区

溝状遺構(図39、写真75) 本遺構は、調査区中央部から検出された、南北に延びる溝である。西側の壁がなだらかな傾斜を成し、そろっていないところもあるが、東西の幅は1.1mである。深さは18cmほどで、断面は皿状である。また、底部にピットがある。遺物は、底部付近から鉄釘が出土した。

その他(図39、写真76) 調査区東端に、あまりしまっていない暗赤褐色の面が、水平に広がっていた。その範囲は明らかではないが、東西4m以上、南北1.6m以上である。この暗赤褐色土は、ローム層を掘り込んだ上に堆積しており、最大厚は12cmを測る。掘り込みは東に行くにしたがって徐々に深くなっている。また、本遺構の40cm東には、ピット状の浅い小穴を検出した。平面は楕円形である。いずれの遺構内からも遺物は出土していないが、遺構周辺のローム層上で、暗赤褐色土面の周辺から壺かと思われる陶器片が、ピット周辺から灰色の皿が出土している(写真74)。いずれも15～16世紀の瀬戸・美濃系陶器である。

2 遺 物

遺物は、細かい破片が多かったため、図に表すことのできた遺物を中心に説明し、ほかは表6に示した。陶磁器については、基本的に器形別に分類したが、説明の便宜をはかって大きくまとめた箇所もある。なお、説明文中の数字(番号)は、図中の数字(番号)と対応する。

(1) I 区

I区東側から陶磁器片が多く出土したが、主に耕作土の中・下層から見つかった破片で、遺構に関連するものはなかった。古いものでは、猿投産の灰釉陶器（9世紀後半、写真83-1）・中津川産の甕（13世紀後半、写真99-4）各1点がある。古瀬戸製品では、14世紀のものもあるが、15世紀（とくに後期）の陶器が多い。中国産の白磁製品（14～15世紀ごろ）もある。近世に入ると18世紀の瀬戸・美濃系陶器が中心となっている。

古瀬戸製品（図47、写真83・84・99・100） 21点出土している。1は搥鉢である。底径は約13cmを測る。2は祖母懷茶壺である。底径は約14cmを測る。古瀬戸後期、15世紀代の製品である。3は灰釉緑釉小皿である。口径は、約12.4cmを測る。淡緑色の釉が口縁部内側にのみ施される。古瀬戸後期～大窩1期、15世紀後半の製品である。4は鉄釉八稜皿である。内側にのみ施される。底径は約9cmを測る。1・4は古瀬戸後期、15世紀中～後半の製品である。

ほかに天目茶碗・灰釉平碗などが出土しており、時期のわかる13点は14～15世紀、中でも15世紀中～後半の製品が6点と多い。

その他の遺物（図47、写真83・87・99） 大窩期以降の瀬戸・美濃系陶器11点（15世紀後半が1点あるが、8点は近世）、白磁2点、山茶碗1点、片口鉢4点、甕7点、内耳鉢3点（1点は近世）、不明石製品、銭貨が出土している。

5は灰釉丸碗で、18世紀後半の美濃産である。6は白磁環で口径は約8.5cm、7は白磁皿の底部で、底径は約3.4cmを測る。6・7とも14～15世紀の製品である。

図41-11はB-1区南端のローム層上面から出土した不明石製品である。水成岩製で、ほぼ中央に穴をあけてあり、所々に擦痕がある。中世に属する石製品であると思われる。また、B-1区南端の耕作土中・下層からは、鉄釘1点（写真112-1）も出土している。このほか、B-1区南西隅の黒土層下層から銭貨（写真95-4）が1枚出土した。磨減が進み錆着も厚く、時代は不明である。

(2) II 区

古瀬戸製品（図47、写真84～87・100） 27点が出土している。時期が判明する23点はすべて15世紀で、とくに15世紀後半が17点と多い。

8は灰釉壺類である。釉は内側にのみ施されている。淡茶褐色の薄い釉で、その上に灰釉が斑状に散っている。底径は約14.3cmである。9は搥鉢である。礎石をとまう建物址の柱穴20の東側床面上から出土した。底径は約10.4cmを測る。10は祖母懷茶壺である。口径は約12.2cmを測る。11は灰釉緑釉小皿である。底径は約4.4cmを測る。8～11はいずれも古瀬戸後期、15世紀中～後半の製品である。

12は灰釉丸碗である。深い緑黄色の釉は全体に施されるが、高台部は無釉である。13は灰釉緑釉小皿である。高台を削り出しており、底径は約5cmを測る。14・15は天目茶碗である。どちらも真っ黒な鉄釉が厚くたまっていて、底径は約4cmを測る。16は、礎石をとまう建物址の南西部床面上から出土した灰釉腰折皿である。高台を削り出しており、底径は約4.8cmを測る。釉の色調は淡緑黄色である。17～19は搥鉢である。17・18は底部で、径は約10.4・12.8cmを測る。19は口縁部で、径は約30cmを測る。12～19はいずれも古瀬戸後期末、15世紀後半の製品である。

ほかに、礎石をとまう建物址の床面上から鉄釉筒形香炉（15世紀後半）、遺構外から灰釉折縁深皿（15世紀前半）・鉄釉花瓶（15世紀中～後半）などが出土している。

大窩期以降の瀬戸・美濃系陶器（図47、写真84～87・100） 41点が出土している。時期がわかる36点のうち、30点が16世紀ごろで、中でも16世紀後期が多い。

20～22は、礎石をとまう建物址の西部床面上から出土した灰釉端反もしくは丸皿である。いずれも底

部で、径は6～7.2cmである。釉は全面に施され、厚くたまる部分もある。いずれも大窩Ⅰ～Ⅱ期、16世紀前半の製品である。23は鉄軸轆皿である。釉の色調は茶褐色で、その上に黄釉を施す。底径は約6.3cmを測る。24は、礎石をともなう建物址の円形ピット内から出土した灰釉丸皿である。口径10.3cm、底径5.5cm、器高2.8cmを測り、釉の色調は淡緑黄色である。23・24とも大窩Ⅱ期、16世紀半ばの製品である。25は、礎石をともなう建物址の柱跡7・11・17周辺から出土した鉄軸小杯である。淡い黒褐色の釉は、内側は全体に、外側は口縁部にまで施す。見込み部中心には径9mmの円形圧痕が装飾され、それを中心に黒褐色の斑文を6～7つ施す。口径6.7cm、底径3.2cm、器高1.9cmを測る。大窩Ⅲ期、16世紀後半の製品である。26は天日茶碗である。底径は約4cmを測る。16世紀後半の製品と思われる。27は鉄軸輪杵頭である。見込みには丸く釉をかきとった跡がある。底径は約4.3cmを測る。16世紀末～17世紀初頭の製品である。28は香炉である。底部は無釉で、径は約8.3cmである。年代は江戸時代後期に属す。

ほかに、灰釉丸碗(16世紀・18世紀)、茶壺(16世紀)などが出土している。

その他の陶器・中世土器(図47、写真85・86・100・101) 青磁・白磁はないが、中国産の染付皿が1点、山茶碗2点、片口鉢1点(13世紀)、甕5点(時期がわかる2点は近世の常滑産)が出土している。このほか在地産の内耳鍋とみられる中世土器が、小破片も含めて38点出土した。

29は、礎石をともなう建物址の柱跡7・11・17周辺から出土した染付皿である。胎土は陶質で、絵付けをおこなった後、底部を除いて濁った半透明の釉薬をかける。口径9.8cm、底径3.7cm、器高2.6cmを測る。16世紀の中国産と思われる。30・31は山茶碗である。30は土間状遺構面から出土し、底径は約7cmを測る。年代は13世紀前半に属す。31は底径約4.8cmを測り、14世紀半ばの東濃産である。32は内耳鍋である。口径は約22cmを測る。

遺物の詳細は表6のとおりで、種類はバラエティーに富んでいる。また、釉薬のかけ具合や焼成温度も多様である。

石器(図41・46、写真94・103・106) 耕作土の中・下層から、コモデ石7点と、それに類似するが小型で表面が滑らかな石4点が出土した。調査ははじめには道路建設の際に入れられた砂利と思われ採集しなかったが、調査区北側道路寄りのA-13・14区で、耕作土の下層から、円盤状の石5点と、用途不明の飾り石2点を採集した。ほかに、砥石が5点見つかった。

コモデ石(図46、写真106)は藁などを織るのに使った石で、出土した7点(13・14・16～20)は、長さ12～16cm、幅・厚さは3～6cmである。いくぶん扁平なものと棒状形の2種があるが、ともに石の表面がざらつき、両端に叩き状痕がある。

コモデ石に似た小型の石(図46、写真106)は、硬石質のもの(10・11・12)と砂岩製のもの(15)がある。10は、下の先端と、中央、および後部に、物を磨いた平らな磨痕がある。上下の先端は、叩きにも利用している。側面は左面も磨き・叩きに使っている。11は、いろいろな角度で叩いたため、先端が丸みを帯びている。磨きにも利用したとみられ、中央が低くなっている。12は、同様に使用して割れたものではないだろうか。15は、砂岩製だが、両端が斜めに削れ、全体に磨きかけた跡が残る。

円盤状の石(図46-1・5、写真94)には、側面に研磨した跡や叩いた跡が残っている。

飾り石2点(図41-12・13、写真94)は、水成岩を小判状(13)もしくはかまぼこ状(12)に磨いた後、石の堆積目を利用して平らに割ったものである。2点とも、金属器で研磨を始めたところらしく、浅く細かい条痕が残っているが、完成品とはなっていない。13は長さ5.9cm・幅4.5cm・厚さ9mmで、12は長さ4.1cm・幅3.0cm・厚さ3mmと薄い。検出時、とくに12は光沢があった。用途がはっきりしないため飾り石としたが、12の形態は、伊那市稲島遺跡の平安時代住居址から出土している石帯を思わせる。

砥石は、5点のうち完形は1点(図46-21、写真107-6)のみである。これは、昭和47年の調査で出土した1点(文獻4の図版36-14)に類似している。在地の石を利用したものである。ほかの4点(図46-

6～9)は、長年研磨に使用され、残った遺物である。

このほか、縄文時代の石器が2点出土した(図42)。1点は耕作土中から出土した磨製石斧の割れた一部を再利用した半磨製石斧(13)で、もう1点はB-12区攪乱層下層から出土した石匙(12)である。

鉄製品(写真112-3) A-13区の耕作土中から鉄製品が1点出土した。鎌の先端部と思われる。

(3) III 区

陶磁器(図48、写真88) 山茶碗・小皿・片口鉢の各1点が遺構内から出土したほか、遺構外から13点出土した。

遺構内出土の陶磁器は次のようである。山茶碗は口縁部の破片で、14世紀の東濃産である。内外に細かいロクロ目痕があって外反し、口唇は外から内にやわらかく丸みがつけられている。土間状遺構1の東側やや北寄りにある柱穴21の柱が焼けた部分から見つかった。小皿は13世紀の東濃産で、胎土は白色、細かいロクロ目痕があって、口縁部が外反する。土間状遺構1の南壁土から出土した。片口鉢は土坑3から出土した。14世紀の瀬戸産で、胎土に大小の砂礫が混じり、内面は使用により磨滅している。片口鉢は、耕作土からも、14～15世紀に瀬戸で焼かれたものが出ている。

1は、調査地北東隅の耕作土中から出土した灰釉尊式花瓶である。頸部と底部を欠損している。釉の色調は淡緑色である。古瀬戸後期、15世紀前半の製品である。当遺物は、昭和47年度の同遺跡発掘調査時に、当時の調査区第IV区で出土した仏花瓶と接合した。遺構外出土の鉢状陶器には、内側にススが付着していた。このほかの遺構外出土陶磁器は、表6のとおりで、小破片の日常雑器である。

鉄製品(図48、写真112) 2は、B-1区耕作土中から出土した鉢状の鉄製品である。用途は不明である。

(4) IV 区

遺物は50点ほど出土しているが、多くは細かい破片であった。

古瀬戸製品(図48、写真89・90) 破片で13点出土した。

4・6は3号住居址の竪穴から出土した灰釉平碗である。4は口縁～胴部であり、口径は約17.6cmを測る。内面は全面に、外面は上部のみに釉を施す。釉は大部分が剝離しているが、色調は明黄褐色である。6は底部で、高台径は約5.2cmである。釉の色調は淡緑黄色である。どちらも古瀬戸後期、15世紀中～後半の製品である。5は遺構外出土遺物の灰釉卍皿である。口径は約17cmを測る。釉は、白く濁っている。古瀬戸中期、14世紀前半の製品である。

ほかに、1号住居址の竪穴から灰釉四耳壺(13世紀前半)、天目茶碗(15世紀後半)、遺構外から描鉢(15世紀後半ころ)、面花文梅瓶(14世紀前半)なども出土している。

青磁(写真90) 2号住居址上層の炉状遺構から碗の破片が1点出土した。口縁部がわずかに外反し、口縁内側に沈線が巡る。年代は14世紀と思われる。

壺(写真90・103) 破片で10点出土した。ほとんどが1号住居址竪穴内と2号住居址竪穴内から出土した。常滑産の壺は1号住居址竪穴内からのみ出土し、2号住居址竪穴内からは中津川産の壺しか出土していない。

片口鉢(図48、写真102) 破片で4点出土した。8は5号住居址の竪穴から出土した。口径約30.6cmを測る。13世紀後半の中津川産である。ほかに、2号住居址竪穴内などからも出土している。いずれも13～14世紀の中津川産である。

山茶碗(図48、写真3・102) 破片が2点、完形が1点出土した。9は2号住居址上層の炉状遺構から出土した、完形の子茶碗である。全体がひしゃげていて、口径約13.9cm、底径5.1cm、器高約5.3cmであ

る。器厚は2～4.5mmである。見込みには、幅1.5cmほどの工具で粘土を削り取った跡が残る。器の内外には、タール状の黒い付着物がまばらに見られる。13世紀後半の東濃産である。

破片の方は、1号住居址竪穴内などから出土し、13～14世紀の年代が与えられる。2点とも東濃系山茶碗である。

中世土器(図48、写真104) 破片で4点出土した。7は1号住居址の竪穴から出土した。土器里である。細かい破片であるが、口径12.4cmほどに復原できる。胎土は長石粒を少量含み、淡黄褐色に焼けている。破損部を観察したところ、内部は生焼けであった。口縁部内側には、ロクロによる調整痕がある。

ほかに、3号住居址竪穴底部、柱穴48上部などから、内耳鍋が出土している。

石製品(図48、写真107・108) 6点出土した。10・11は砥石である。10は1号住居址の竪穴から、11は2号住居址上層の炉状遺構から出土した。12・13は用途不明であるが、石質や擦痕があることからみて、砥石の剥片と考えられる。12は3号住居址の竪穴から、13は5号住居址の竪穴から出土した。図42-16は5号住居址の竪穴から出土した。石鏝かとも思われるが、明確な加工痕がない。しかし、石の側面には一部に擦痕がみられる。用途不明の石製品である。

金属製品・鍛冶関連遺物(図48、写真113・114) 14・15は3号住居址の竪穴から出土した。14はヤリガンナのような反りをもつ鉄製品である。15は鉄片で、やや湾曲する。

ほかに、2号住居址上層の炉状遺構、3号住居址竪穴内、柱穴153などから鉄滓が5点出土した。なかでも2号住居址上層の炉状遺構からは、梶形滓が出土している。また、同遺構覆土の砂層からは、鍛造剥片が出土した。

錢貨(写真95) 柱穴146から細かい破片が出土した。

石器(図42、写真107) 15は、5号住居址から出土した砂岩製打製石斧である。片面は原石の自然面を残して加工している特徴がある。形態から弥生時代に土掘具として用いた石器ではないだろうか。

その他の土器(写真104) 5号住居址東壁際から埴形土器破片が出土した。図42-15の打製石斧とともに、弥生時代の遺物である。2号住居址南(A-7区)のローム層上からは、口縁部の開いた鉢形土器が出土した。黄褐色で長石粒の混じる口縁部破片である。在地で焼成した中世の土器ではないだろうか。土坑9からは、土師器もしくは土師質土器と思われる土器が2点出土した。胎土は砂っぽく内耳鍋のもと似ているが、厚さが5mmほどで薄い。古代～中世に位置づけられる。

(5) V 区

石器(旧石器時代)(図41、写真92・93) 10は、A-3区中央部から出土した二次加工のある剥片である。出土層位は、ローム質土が傾斜して、下の礫層の上に浅く堆積する地域の、ローム質土上層である。黒曜石製で、自然面の多く残る長さ30mmの剥片の先端に二次加工が施されている。

9は、オイルシェール製の尖頭器状の石器である。長さ62mm、幅35mm、厚さ15mmで、三角形の先端に細かい加工を施している。伊那地方に出土例の少ない石質製品である。

縄文土器(図49、写真119) 図49は、A-9区南東部から出土した深鉢形の縄文土器である。高さ40cm、口径31cm、器厚1cm前後で、胎土に大粒の長石が混在するが、固く焼成されている。平底で、胴中央でしまり、外に開いて口頸部上部で「く」の字に内湾し、口縁部に至る。口縁部は低い波状口縁である。

文様は、全体を3つの帯状に区画した文様帯で構成される。上部の文様帯は、「く」の字に内湾する、約5cm幅の口頸部に削り出し手法の低い隆起文を口縁部と平行して設定する。口唇部も削り出し手法の隆起文をつくり出す。上下隆起文をつなげる菱形または台形区画も同一手法である。区画内部は、先端が八状の工具を斜めにあて、連続押し引き施文して区画内を満たす。胴下部文様帯は、丸みのある粘土紐を張り付けた隆起文を器壁に一周させ、その下方は同一手法の隆起文で半円形に連続区画する。区画内部は、口

類部文様帯と同一工具で連続押し引き施文して溝たす。また、下部文様帯の上部隆起文上面には、先端が同一の八状工具による押し引き文を、半分隆起文にかかる状態で、左から右方向に一週連続施文する。無文区画には、笥状工具で器表面を整形した細かい線が残る。

この縄文土器は、中期中葉の土器であるが、胎土と焼成、重量感、文様構成、施文具からみて、伊那地方に類似する資料が少ない出土遺物である。

ほかに、A-9区の黒色土層下の礫層中から、磨滅の多い縄文土器細片と、土器破片を加工した円板土器が1点出土した(写真102-7)。

古代～中世土器(写真102) 溝状遺構から小片が2点出土している。器形や年代は不明であるが、胎土・厚さの均一性などから、古代～中世の土師器もしくは土師質土器と思われる。なお、中世の遺構は、現在の十王堂沢川をはさんで東側のIV区から、古代の遺構は、本調査区のすぐ南側(本郷第3分譲住宅地造成にともない試掘調査を実施)から検出している。

近世陶器(図48、写真88) 3は、V区周辺から採取した鉄祐仏具である。釉の色調は黒褐色で、18世紀半ばの美濃産である。

(6) VI 区

瀬戸産の陶器が4点(写真91)、鉄釘が1点(写真113)出土している。陶器はすべてローム層上から出土し、遺構周辺からは壺かと思われる陶器片や灰釉の皿、ピットより3m西からは指鉢と耳が付く鉄釉壺が出土している。いずれも15-16世紀の所産と思われる。

3 遺跡の特徴

I区 I区からは、他の調査区にはない輪囲い石積み土坑が検出され、そのすぐ南西には土間状遺構、そのさらに南西には竪穴遺構があった。昭和47年の調査では、常滑産大甕の破片が出土した深い竪穴(4号竪穴)を塗工芸の倉庫、竪穴につく平地面をその工房ともみているが、今回検出した3基の遺構もこのような見方ができる。つまり、竪穴遺構を原材料や製品の保管庫、土間状遺構を工房、輪囲い石積み土坑を排水に関する設備とする見方である。ただし、業種を断定する明確な根拠はない。

遺構ともなった遺物はないものの、耕作土中からは15世紀ごろの陶磁器と、18世紀ごろの陶磁器がまるとまって出土している。いずれかの時期の工房と、その関連施設の可能性がある。

II区 II区からは、礎石による柱列を検出し、それによる建物があったことが判明したが、擾乱が激しく規模は明確にならない。出土した陶磁器は、13・14世紀もあるが、15世紀後半から16世紀後半が多い。中国産染付陶器や茶壺・香炉・天目茶碗などが含まれて種類が多く、持ち主は一般庶民とは考えられない。在地産の内耳鍋が多く出ているのも特徴である。陶磁器からみると、建物は15世紀後半～16世紀後半ごろのものと思われる。

遺物では、石製品も注目される。コモデ石とともに、それに似た形ながら、両端や側面に磨痕のある石製品が出土した。陶器製の指鉢やこね鉢で作業できない、つぶし・たたき・すりなどの加工に使用されたものと思われる。戦国時代に生活が営まれたことをうかがわせる。ほかにも独特の石製品が出土した。

建物より古い時期の大規模な掘り込みが検出されたが、壊状なのか池状なのか詳細は不明である。

III区 狭い調査区内ながら、94基もの柱穴や土間状遺構を検出した。この様子から、遺構は東側の国道にも、北側の道路にも続いているとみて間違いない。

土間状遺構の境界部分を観察すると、土間と板の間を使う江戸時代以降の農家風の造りが連想されるが、出土陶器からは、14世紀ごろの建物とみられる。この遺構面からは炭化物は検出されなかったのに対して、

遺構内の2基の柱穴内部には炭化物が多く含まれることから、土間状遺構による建物が廃棄された後に、掘立柱による建物が立てられ、焼失したようである。掘立柱建物が使われた年代は15世紀であろう。

Ⅳ区 Ⅳ区からは、竪穴式の住居址、竪穴状遺構、多くの土坑や柱穴を検出することができた。遺物は陶器・土器・砥石・鉄滓などが出土した。中世陶器には13～15世紀までの時代幅があるが、ほかの時代の遺物はほとんど出土していないので、本調査区の多くの遺構は鎌倉～室町時代の間に取まる。

竪穴式の住居址は、規模が互いに似通っているが、竪穴内の施設の様相などがそれぞれ違っているのが興味深い。1号住居址は、先行して立っていた5号住居址を切って立てられ、その後も竪穴が少し埋まったところで配石遺構や炉状遺構を設けるなど何度かの立て替えを行っている。1号掘立柱建物址と2号掘立柱建物址のどちらかと、あるいは同時に、竪穴を伴う掘立柱建物を構成していた可能性もある。2号住居址は、ほかの住居址と違い、中央部に地床炉があって竪穴内部には風溝が巡っている。上層の北東部には炉状遺構があるが、鍛冶炉なのか埋納穴なのか不明である。しかし、鉄滓や鍛造剥片が出土していることから、炉状遺構がもし埋納穴であったとしても、鍛冶屋関連の埋納行為であり、その下層の2号住居址にしても工房的性格を考えたい。年代は、どちらの遺構も13～14世紀に位置付けられる。3号住居址には、同時に機能したか疑問が残るが、平面が円形で、断面が台形を呈する土坑が、2つ付設する。15世紀後半代に位置付けられる。

南羽場遺跡では、Ⅳ区だけから、平面が円形で、断面が長方形もしくは台形を呈する土坑を8基検出している。本土坑は、3号住居址竪穴の北東コーナー部、1号掘立柱建物址の東側にまともって検出されている。このような土坑は、若森社遺跡の調査でも同数検出でき、規模や配置が似ていることが指摘できる。しかし、遺物が出土せず、用途は不明なので類別を待ちたい。

覆土が砂である2号竪穴状遺構も用途不明であるが、すぐ西側に十王堂沢川が流れていることから、川に関連した施設が考えられる。

遺物の総点数は50点ほどと少ない。の中で多いのは日常的な食器や甕、片口鉢などである。青磁、白磁などの輸入陶磁器はほとんどない。砥石、鉄滓、鍛造剥片などの出土は、鍛冶職人やその工房の存在が推測できる。そのほかの様相が異なった竪穴式の住居址は、さまざまな立場や生業をもった人がある区域に集住していたことを想像させる。

Ⅴ区 Ⅴ区で確認できた遺構は溝状遺構と土坑だけであった。耕作土下の地層の変化がわかりづかったため、わずかな変化をとらえて出土遺物のまわりを調査できなかったことは、調査員の力不足が原因である。縄文土器出土地点や旧石器出土地点など、慎重な調査の必要性を痛感させられた。

ローム質土上面、ローム質土内から旧石器時代の遺物を検出できた。発掘頭初には思いもよらなかった発見である。しかしこれによって、南羽場遺跡Ⅰ～Ⅳ区間の中世遺構調査終了後において、ローム層内の調査も必要ではなかったかと感じられるのである。発掘の計画段階から予定に入れ、調査を進めなければいけない問題である。

出土した尖頭器状石器と縄文土器は、いずれも伊那地方では類例のほとんどない資料であった。出土状況ははっきりしなかったが、旧石器時代または縄文時代の石材や道具などの移動を考えると、新資料の意義は大きい。

Ⅵ区 本調査区では、室町期と思われる溝状遺構やピットなどを検出している。中世の遺構は、十王堂沢川の流路や沼地の東側に広がり、西側にはないと考えていたのだが、少ないながらも遺構や遺物を検出できた。溝状遺構は浅く不明確で、暗赤褐色土面の広がりも住居址のような施設とは考えづかったので、調査範囲を拡大することはしなかったが、溝状遺構から西側で、遺構や遺物の検出がまったくなかったことは注目できる。

全調査区を通して 南羽場地域には、飯島郷の在地領主の居館址があると、文献資料・地名・自然環境

などの分野から指摘されて久しい。しかし、南羽場地域を南北に貫いて調査した昭和47年度の調査でも、地域の北辺を東西に貫いて調査した今回の調査でも、居館を想起させるような建物跡や、明確な堀や溝は検出できなかった。だが、南羽場遺跡Ⅰ～Ⅲ区では、花瓶・香炉などの仏具、四耳壺、盤、茶壺などの非日常的な器種、輸入陶磁器など高級な陶磁器が出土している。Ⅳ区からもわずかながら四耳壺が出土している。これらのことから、今回発掘の南羽場遺跡は、在地領主の居館周辺にあって、領主に隷属した職人や下人の住居址と考えることができよう。発掘成果からみて、遺跡の評価は、昭和47年度の調査時と同じである。したがって、南羽場地域にあるといわれる居館址の場所については、さらなる追究が期待される。

他方、広大な飯島城を持ち、鎌倉から室町時代にかけて本郷地域を支配した飯島氏は、最初にどこに屋敷を構え、そこから移動したのか否かという問題も残されており、広く地域史の中で考える必要もある。また、東西に長い飯島城のほぼ中央を古い街道が横切る。この街道は、飯島城本城真下の段丘崖のつけね沿いにあり、南羽場遺跡の西側を通過する。昭和47年度の調査では、道路跡とそれに沿って並ぶような住居を検出し、中世の町屋のようなものを想定していることから、視点を変えて街道と町屋というような、市場的な見方も可能である。現在、これらに対する答えは準備できていないが、今後の課題、あるいは問題提起としておきたい。

第5章 まとめ

今回実施した若森社・南羽場の発掘調査では、中世の遺構・遺物が多く発見された。各遺跡ごとのまとめはそれぞれの章末の「遺跡の特徴」に記したが、本章では2つの遺跡の年代などの違いを示し、今後、河岸段丘上に営まれた中世の本郷地域の姿遷を考えるための課題を提起しておきたい。

図50は、若森社遺跡と、南羽場遺跡の各調査区から出土した陶磁器を、年代別に指数で示したグラフである。出土遺物のうち、時代の判明するもののみを、1世紀を前半後半に分けた50年きざみの枠にあてはめた。ただし、遺物には、「14世紀」とか「14～15世紀」、「14世紀中ごろ」などとしか判断できず、50年の枠に入れることができないものも多いため、次のようにポイントを与えて指数として示した。

- ・(例1)「14世紀前半」と判断される遺物…「14世紀前半」に1ポイント
- ・(例2)「14世紀」と判断される遺物…「14世紀前半」と「14世紀後半」に各0.5ポイント
- ・(例3)「14世紀～15世紀」と判断される遺物…「14世紀前半」「14世紀後半」「15世紀前半」「15世紀後半」に各0.25ポイント
- ・(例4)「14世紀中ごろ」と判断される遺物…「14世紀前半」「14世紀後半」に各0.5ポイント
- ・(例5)「15世紀中～後」と判断される遺物…「15世紀前半」に0.25ポイント、「15世紀後半」に0.75ポイント

グラフはこのように作成したため、正確に年代が反映されたものとはいえない。また、遺物の種類によっては、とくに高級品などは長く使われるため、生産年が使われた年代とイコールでない場合も考えられる。しかし、こうした誤差をふくんではいないが、遺跡の年代をおおまかに捉えるには差し支えないだろう。ここでは、このグラフからそこで生活が営まれた年代のイメージを描いてみたい。

さて、図50をみると、若森社遺跡と南羽場遺跡各調査区でグラフの傾きが異なっていることが一目瞭然である。若森社の遺物が13世紀前半から14世紀前半に多いのに対し、南羽場各調査区はどれも15世紀後半に最も高くなっている。調査区ごとにとみると(※)、次のような特徴がある。

若森社遺跡 12世紀前半から遺物が出現し、13～14世紀前半が山となって14世紀後半に急減する。少ないとはいえ16世紀前半までは遺物が存在するが、16世紀後半以降の遺物はほとんどない。

南羽場Ⅰ区 13世紀に入って遺物が現れ、14世紀まで低水準で、15世紀前半に倍増して後半にピークを迎える。16～17世紀の遺物はわずかだが、18世紀後半に再び小さなピークが出現している。

南羽場Ⅱ区 Ⅰ区と同様に13世紀前半から遺物が現れ、15世紀に入ると急増し、15世紀後半から16世紀後半まで高水準を保つ。17世紀になると急減し、以降の遺物はわずかとなる。

南羽場Ⅲ・Ⅳ区 Ⅰ・Ⅱ区よりも13～14世紀の遺物がやや多く、波はあるものの13世紀前半から15世紀後半までの300年間に遺物がまとまり、この間漸増傾向にある。16世紀以降の遺物はほとんどない。

(※)南羽場Ⅲ区とⅣ区は同じ生活圏内とみなし、まとめて扱った。Ⅴ区は出土遺物がすべて表土中もしくは衣面採集であるため、検討対象としなかった。Ⅵ区は遺物が少ないため、検討対象としなかった。

ちなみに、昭和47年に国道153号用地から出土した遺物についても、グラフを作成した(図51)。今回あらためて遺物の年代を鑑定する時間がなかったため、報告書(文献4)に記された「鎌倉末」「南北朝」「室町前」…とされた当時の分類をおおまかに14世紀前半からの年代にあてはめ、イメージを捉えることとした。その結果、遺物は14世紀に最も多く、つづく15世紀も高水準で、16世紀に少なくなっており、今回の調査区よりもピークが100年早くなっている。

図52は、年代不明の陶磁器・中土土器も含め、種類ごとの割合をみたものである。若森社遺跡の陶磁器中には、青磁・白磁が多く含まれていることがよくわかる。この青磁・白磁は、ほとんどが大型建物跡の

一部とみられる竪穴や、その周辺からの出土である。若森社の陶磁器・中世土器全体に占める割合は16%だが、年代を12~14世紀に限定してみると31%をこの高級品が占めている。これに対して、南羽場の各調査区からは、I・II・IV区から1~2点ずつ青磁・白磁ないし中国産染付が出土しているだけである。ただ、南羽場からも、灰輪四耳壺・茶壺・香炉・花瓶・天目茶碗などが多数出ており、やはり有力者の存在をうかがわせる。

両遺跡で内耳鍋の出土状況が異なる点も興味深い。若森社からは遺構外から2点が見つかったのだが、南羽場ではI~IV区までの各調査区から出土している。青磁・白磁や内耳鍋の出土数のちがいは、それぞれの遺跡の性格を考える上で見逃すことができない。

これらのことから、第一に若森社遺跡と南羽場遺跡では中心となる年代が100~200年ほど違うこと、第二に若森社遺跡にはとくに青磁・白磁や日用品とはいえない器種の古瀬戸製品などが多く含まれ、南羽場遺跡には貿易陶磁器はやや少なめながら、古瀬戸の高価な陶器が多くあって、ともに一般民衆の生活跡とは考えられないことが注目できる。しかし、内耳鍋の出土状況や各種の遺構の存在からみると、両遺跡の調査範囲内に限っては、南羽場遺跡により日常生活や生業の空間としての色が濃いと感じられる。ただし、南羽場遺跡については、各調査区によって時代や特徴に違う点があるので、このことも踏まえて、以下で両遺跡の変遷をたどってみよう。

若森社では、早ければ12世紀(平安時代末)のうちに、有力者の営みが始まった。有力者は、この辺り一帯に、母屋をはじめ、数棟の作業所、厩、厩、倉庫などを備えた館を構え、13~14世紀(鎌倉~南北朝時代)ごろ、ここを地域支配の少なくとも一つの中心としていた。

13世紀(鎌倉時代)、南羽場でもすでに人の営みは始まっていた。しかし、その密度は若森社に比べて濃くはない。南羽場が地域の拠点となるのは14世紀以降で、若森社の館に勢いがなくなってくるのと同じ時期である。発掘調査によって判明するのは、まず14世紀(鎌倉末~南北朝)、南羽場の昭和47年調査部分に、有力者が支配した職能民と思われる人たちの生活が始まるようになることである。この場所は、館の内、母屋の周辺にあたとみられる。15世紀後半(戦国時代初)には、今回調査した南羽場I区~IV区でも同様の人々の暮らしが厚みを増してくる。I・III・IV区にいた職人・工人らは、16世紀(戦国時代半ば)になるとそこでの営みをやめてしまうが、II区では珍しい陶磁器を所持する人物が、礎石を使った建物を相変わらず使用していた。しかし、II区の建物も17世紀に入ること(江戸時代初)には廃絶したとみられる。

以上のように推測される館の主は、ほぼ鎌倉時代以来この地に勢力を張ったとされる飯島氏の一族とみて間違いないだろう。飯島氏一族の館跡と推測されている場所は、「第2章3(3)」のようにほかにもあるが、若森社・南羽場がそれである可能性はますます高まった。このことが、今回の調査の最も大きな成果といえる。他方で、この地域の中世史をめぐる疑問点や、今後さらに検討を重ねなければならない問題点も浮き彫りになった。思いつくところを列記してみよう。

- ①若森社からは、12世紀の遺物が少なからず出土した。従来、飯島氏は平安時代末に片切氏から分かれて興ったとされており、これが正しければ、若森社遺跡は飯島氏が最初に館を構えた地である可能性がある。隣接地での調査(「付記」参照)も含め、その実態を多方面から追究していく必要がある。
- ②今回と昭和47年の調査から判断される各調査区の中心年代は、若森社(館内の一部)が13~14世紀、南羽場昭和47年調査のIV区(館内の職能民の工房・住居)が14~15世紀、南羽場今回調査のI・III・IV区(館内の職能民の工房・住居)が15世紀、南羽場今回調査のII区(館内の一部)が15~16世紀と違いがある。若森社・南羽場以外の館推定地や飯島城もあわせ、その場所がどの時代にどんな機能を果たしたのかを明らかにしていくことが必要だろう。また、鎌倉時代から戦国時代までの400年間には、飯島氏の総領が居住したり支配の拠点とした場所は移り変わっていると思われるが、その変化を

見出すことも意味がある。

- ③地域の変化について、今回指摘できる興味深いことが2つある。1つは、南羽場にあった職人・工人の工房・住居が、16世紀になると突然消えてしまうことである。このことは、このころ飯島氏の支配拠点が飯島城に移り、配下の者たちはその城下町である古町に移住したからではないか。もう一つは、若森社・南羽場とも17世紀の遺物がほとんど出土しないことである。これは、飯島氏の動向と一致しており、在地の支配者が去って百姓主体の近世の村に切り替わる節目を示していると思われる。
- ④発掘調査の成果を、これまで知られている事象とどう結びつけ、あるいはみなおし、この地域の中世像を結ぶかは、最終的な課題である。例えば、承久の乱に馳せ参じた飯島氏は、若森の館から出陣していった可能性もある。また、14世紀半ばに、飯島氏一族の出とみられる大数至純とともに西岸寺の再興にとりくんだ飯島正運・錦呂・為光らの館はどこだったのだろうか。ちょうど若森社での営みが下火となって南羽場が活発になりつつある狭間の時期だが、若森社・南羽場の館は3人のうちのどれかの館になる可能性はないだろうか。
- ⑤ところで、飯島氏に支配されていた人々の暮らしはどうだったのだろうか。表舞台に登場しないとはいえ、圧倒的多数を占めるこれらの人々にも、もっと目を向けなくてはならない。

両遺跡は、以前から飯島氏に関係した中世の館の存在がささやかれていた場所だったが、発掘という歴史調査方法には、調査したいところを好きなだけ調べられるわけではないという弱みがある。今回の調査は、整備される農道が両遺跡を通過することになった偶然から始まり、耕作や圃場整備にも負けず遺構や遺物がしぶとく生き残っていたことから成果を得ることができたものである。

しかし、具体的な究明には程遠く、今後の課題は山積している。未熟な調査員が限られた時間の中で報告するにはこれが精一杯であることをあえてお断りし、この報告が捨石となって今後研究が進展することを願うものである。

(付記) 今回調査した若森社遺跡の隣接地で、平成11年度、農業集落排水事業にともなう発掘調査がおこなわれた。報告書の刊行は平成12年度の予定である。

主要参考文献

- 1 飯島町誌編纂刊行委員会 1990 『飯島町誌』上巻(自然、原始・古代編)
- 2 飯島町誌編纂刊行委員会 1996 『飯島町誌』中巻(中世、近世編)
- 3 本郷区誌編纂委員会 1997 『本郷区誌』
- 4 国道153号線用地内埋蔵文化財緊急発掘調査団 1973 『本郷南羽場・陣垣外遺跡』 飯島町教育委員会
- 5 井上喜久男 1992 『尾張陶磁』 ニューサイエンス社
- 6 小野正敏 1985 「出土陶磁より見た15・16世紀における画期の素描」(『MUSEUM』No.416)
- 7 小野正敏 1997 「伊那谷中世の鏡物から」(平成8年度『飯島町歴史民俗資料館研究報告書』第1号)
- 8 越前市埋蔵文化財センター 1997 瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録『瀬戸・美濃系大窯とその周辺～大窯生産の成立と展開～』
- 9 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 10 小林達雄編 1989 『縄文土器大観』第2巻 小学館
- 11 伊那市・伊那市教育委員会 1999 『伊那市歴史シンポジウム 信濃の牧・春近領・宿場』
- 12 郷道哲章 1992 「郷土史と信濃の中世城館」(『古代・中世の信濃社会』銀河書房)
- 13 宝月圭吾 1981 「伊那西岸寺の規模について」(『信濃』33-12)
- 14 宝月圭吾 1982 「中世の伊那西岸寺の経営と無尽銭」(『信濃』35-8)

表3 若森社竪穴周辺柱穴一覧

No.	平面形	断面形	規模 (cm)			内容物			遺物	備要
			長径	短径	深さ	炭	ローム	焼土		
1	円形	—	—	—	—	△	—	—		
2	円形	長方形	20	20	15	△	—	—		
3	方形	長方形	21	16	10	○	×	×		
4	円形	U字形	30	28	13	○	○	◎	縄文土器片	
5	方形	不定形	28	28	5	×	○	△		
6	楕円形	U字形	22	16	6	△	△	×		柱穴ではない
7	円形	U字形	19	18	22	×	○	×		
8	楕円形	U字形	27	20	7	×	○	○		
9	円形	台形	35	34	15	△	◎	△		
10	隅丸方形	台形	29	27	17	△	△	△		
11	半円形	長方形	28	20	10	△	○	△		
12	円形	U字形	20	20	14	○	×	○		
13	隅丸方形	台形	24	24	20	×	○	×		
14	隅丸方形	台形	29	23	8	△	○	×		
15	円形	台形	22	20	7	△	◎	○		
16	円形	長方形	18	17	12	×	×	×		
17	長方形	台形	(40)	(36)	(—)	—	—	—	銭貨・不明鉄製品・常滑罐・縄文土器・炭	
18	隅丸方形	台形	27	23	25	△	○	○		
19	隅丸方形	長方形	(40)	(40)	(20)	—	○	—	青磁碗・灰釉四耳壺・鉄釘・炭	
20	円形	V字形	24	22	11	△	△	×	縄文土器片	
21	方形	長方形	24	23	19	○	×	×		
22	不整形	長方形	36	18	13	△	○	×		
23	方形	長方形	29	20	18	×	○	△		
24	隅丸方形	長方形	20	16	17	△	○	△		
25	円形	台形	27	27	13	△	○	×	鉄釘	
26	隅丸方形	台形	24	24	20	×	○	×		
27	隅丸方形	U字形	20	17	8	△	△	△		
28	方形	長方形	29	22	10	○	○	×		
29	楕円形	長方形	32	20	22	○	○	○		
30	楕円形	台形	42	30	7	△	△	×		柱穴ではない
31	隅丸方形	U字形	30	27	29	△	△	△		
32	円形	長方形	26	22	13	○	△	×		
33	円形	台形	30	20	—	○	△	×		
34	隅丸方形	U字形	36	32	30	△	○	△	陶器片	
35	円形	長方形	—	—	—	○	×	×		
36	楕円形	U字形	27	20	19	×	△	△		
37	方形	長方形	20	17	9	○	×	×		
38	隅丸方形	U字形	33	30	10	○	○	×	片口鉢	
39	楕円形	U字形	33	24	11	△	△	△		40を切る
40	楕円形	U字形	44	30	12	×	○	×		39が切る
41	長方形	U字形	33	18	12	△	○	×		
42	楕円形	台形	31	28	11	○	○	○		
43	円形	長方形	18	15	19	△	×	×		
44	長方形	長方形	29	22	18	○	○	×		
45	円形	台形	25	23	14	△	○	△		46を切る
46	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文土器片	4つ以上の柱穴の集まり
47	円形	不定形	37	34	12	△	○	×		
48	隅丸方形	台形	43	40	19	△	△	△		
49	隅丸方形	台形	27	26	6	×	△	×		
50	楕円形	U字形	30	25	11	△	○	△		
51	隅丸方形	U字形	41	30	41	△	△	○		
52	方形	台形	30	25	17	○	○	○		
53	隅丸方形	台形	25	24	8	×	◎	△		
54	方形	台形	32	23	10	×	○	×		
55	隅丸方形	台形	19	19	14	△	○	×		
56	隅丸方形	U字形	(30)	—	(11)	—	○	—		
57	円形	台形	(38)	(38)	(30)	—	○	○		
58	円形	U字形	20	16	4	○	○	○		柱穴ではない
59	—	—	—	—	—	—	—	—	上層に石が入る	調査時記入済
60	隅丸方形	台形	26	25	10	△	△	△		
61	不整形	不定形	36	20	20	○	○	○	縄文土器片	
62	円形	U字形	25	23	7	△	○	×		
63	隅丸方形	U字形	18	18	12	×	○	×		64が切る
64	長方形	台形	36	21	12	×	○	△	土器片	63を切る
65	隅丸方形	台形	21	16	12	×	○	○		

No	平面形	断面形	規模 (cm)			内容物			遺物	摘要
			長さ	幅	高さ	炭	ローム	粘土		
66	円形	台形	23	20	11	×	○	×		
67	隅丸方形 (白形)	台形	(40)	(32)	(18)	△	-	-	鉄滓	
68	円形	円形	(36)	(36)	(18)	△	-	-		
69	円形	(台形)	20	18	5	×	○	×		
70	方形	長方形+U字形	28	26	21	×	○	△		
71	方形	(長方形)	17	15	7	△	×	×		
72	楕円形	U字形	22	22	-	△	△	△		73に切られる
73	不整形円形	長方形	20	18	28	△	△	×		72を切る
74	円形	長方形	15	15	17	△	△	△		
75	円形	長方形	20	20	18	△	△	△		
76	隅丸方形	長方形	17	15	17	○	○	○		覆上に焼け石が入る
77	楕円形	長方形	22	16	16	○	○	△		
78	楕円形	台形	28	23	12	△	○	△		
79	円形	台形	24	24	45	×	○	×		
80	方形	長方形	16	16	30	×	×	×		木の根か?
81	方形	台形	32	30	30	△	△	△		
82	円形	(長方形)	16	14	31	△	△	△		
83	方形	(長方形)	24	15	30	△	△	△		
84	楕円形	台形	22	20	15	△	△	△		土が締まっていな
85	(円形)	長方形	(40)	(40)	(27)	-	○	-		
86	楕円形	長方形	(22)	(15)	(24)	-	-	-	青磁碗	
87	楕円形	長方形	20	18	9	△	×	△		
88	隅丸方形	長方形	22	20	16	×	○	×		
89	楕円形	長方形	40	33	22	×	○	△		
90	三角形	-	23	23	3	×	×	×		柱穴ではない
91	隅丸方形	台形	14	13	6	○	○	×		
92	隅丸方形	台形	23	20	4	○	○	○		
93	楕円形	U字形	40	33	26	△	○	△	青磁碗	94と重なる
94	方形	台形	32	29	17	△	○	△		93と重なる
95	不整形円形	U字形	22	16	15	△	○	△		
96	円形	U字形	30	27	28	△	○	×		
97	円形	U字形	20	20	6	×	×	×		
98	方形	長方形	20	18	25	○	○	○		
99	楕円形	台形	56	23	13	△	○	×		
100	隅丸方形	長方形	24	24	7	△	○	×		
101	楕円形	U字形	30	23	28	△	△	△		
102	円形	U字形	30	10	×	×	△	×		
103	方形	長方形	29	24	14	×	×	×		
104	方形	長方形	20	20	24	×	○	×	縄文土器片	
105	楕円形	U字形	45	33	18	×	△	△		
106	隅丸方形	-	30	28	15	○	○	×		
107	隅丸方形	長方形	44	34	55	×	○	×		
108	円形	長方形	25	20	20	△	×	×		
109	楕円形	U字形	43	28	11	×	○	×		
110	方形	長方形	26	22	10	×	○	×		
111	方形	長方形	21	28	10	○	×	△		
112	方形	長方形	20	20	16	○	×	△		
113	(楕円形)	-	(36)	(28)	-	-	-	-		調査時記入流れ
114	(楕円形)	-	(40)	(32)	-	-	-	-		調査時記入流れ
115	方形	U字形	38	28	20	×	△	△		
116	方形	U字形	28	23	15	-	-	-		
117	(隅丸方形)	-	20	17	15	-	-	-		
118	(方形)	-	21	20	-	-	-	-		
119	方形	U字形	18	17	14	×	△	○		
120	楕円形	台形	45	36	26	△	○	×		
121	隅丸方形	U字形	(56)	(54)	(20)	-	-	-		
122	円形	円形	33	48	28	×	○	○		
123	円形	台形	35	34	15	-	-	-		礎が入る
124	円形	長方形	30	29	18	△	○	△	常滑壺	
125	(隅丸方形)	-	(32)	(29)	-	-	-	-	縄文土器片	調査時記入流れ
126	楕円形	-	43	35	11	△	○	△		
127	円形	-	(16)	(16)	-	-	-	-		
128	楕円形	-	(25)	(20)	-	-	-	-		
129	隅丸方形	-	36	36	-	△	△	△	鉄釘	傘大の礎が多く詰まる
130	長方形	長方形	26	21	27	×	○	△		
131	円形	長方形	20	19	15	△	×	×		
132	方形	-	12	12	28	-	-	-		木の根か?

No.	平面形	断面形	規模 (cm)			内容物			遺物	備要
			長さ	幅	高さ	眼	ローム	焼土		
133	楕円形	長方形	(30)	(25)	10	△	×	×		
134	楕円形	台形	(36)	(30)	10	△	×	×		
135	隅丸方形	長方形	(32)	-	(18)	-	-	-		2つの柱穴が重なっている
136	円形	長方形	20	20	30	△	×	×		底に眼が1つ
137	隅丸方形	U字形	42	38	45	△	○	△	常滑壺・青磁碗	中に石が入る
138	方形	長方形	12	12	10	-	-	-		
139	隅丸方形	台形	25	22	15	×	×	×		
140	隅丸方形	長方形	22	20	20	-	-	-		
141	方形	台形	(44)	(36)	-	-	-	-		2つの柱穴が重なっている
142	隅丸方形	U字形	23	20	23	△	○	○		
143	隅丸方形	台形	20	19	14	△	◎	△		ロームブロックも混じる
144	円形	長方形	32	30	13	○	○	×		
145	方形	長方形	27	27	22	○	○	×		
146	方形	長方形	(20)	(19)	20	-	-	-		
147	隅丸方形	台形	42	40	27	△	◎	×		146が切る
148	方形	台形	30	30	28	△	△	△		147を切る
149	楕円形	台形	48	30	56	○	△	×		
150	方形	長方形	20	15	5	○	○	×	山茶碗片	
151	楕円形	U字形	22	19	16	△	○	△		
152	隅丸方形	台形	18	17	18	△	△	△		
153	円形	-	(32)	(28)	25	-	-	-		
154	円形	-	(24)	(20)	30	-	-	-		
155	方形	-	(12)	(12)	20	-	-	-		
156	楕円形	長方形	18	16	21	△	△	△		
157	隅丸方形	台形	25	24	20	×	○	△		
158	方形	-	20	17	-	×	○	×		
159	隅丸方形	U字形	36	34	26	△	○	×		
160	(楕円形)	U字形	(32)	-	(24)	×	×	×	白磁碗・縄文土器片	
161	(楕円形)	U字形	(40)	-	(30)	×	×	×		
162	楕円形	U字形	47	45	22	△	○	△		
163	楕円形	U字形	56	28	18	△	○	△		
164	(円形)	-	(18)	(18)	-	-	-	-		
165	(楕円形)	-	(22)	(16)	30	-	-	-		
166	(長方形)	-	27	26	22	-	-	-		
167	(方形)	-	19	16	8	-	-	-		
168	(円形)	-	25	22	26	-	-	-		
169	隅丸方形	-	25	23	31	-	-	-		
170	円形	-	-	-	30	-	-	-		
171	隅丸方形	長方形	20	18	-	-	-	-		
172	不整形	U字形	33	30	28	×	△	×	灰釉?陶器片、縄文土器片	
173	方形	長方形	20	20	-	△	○	×		
174	不整形	U字形	42	33	18	△	△	△		
175	方形	台形	24	18	22	×	○	△		
176	方形	台形	45	45	25	×	△	×	縄文?土器片	
177	方形	台形	42	34	14	△	○	△		
178	方形	-	-	-	32	-	-	-		
179	方形	長方形	15	14	15	×	○	×		
180	隅丸方形	長方形	33	29	21	-	-	-		掘り込み面から深さ50cm
181	方形	-	(40)	(34)	-	-	-	-		
182	円形	長方形	24	18	22	△	○	△	縄文土器片	
183	方形	長方形	18	15	29	△	○	×		
184	隅丸方形	台形	34	30	17	○	○	×		185と切りあう
185	方形	台形	30	30	20	○	○	△		184と切りあう
186	隅丸方形	台形	35	24	20	×	◎	×		
187	方形	平行四辺形	26	24	28	△	○	△		やや曲に傾く
188	円形	台形	26	25	9	○	○	○		
189	隅丸方形	U字形	35	32	33	-	-	-		
190	不整形	台形?	74	53	50	○	○	○	中津川壺	中に石が入る
191	円形	長方形	23	20	18	△	×	×		
192	楕円形	台形	16	16	35	△	○	△		上部は70×28cm楕円形の掘り込み 中に平らな石を置く
193	不整形	長方形	64	60	19	-	-	-		
194	円形	U字形	22	19	12	△	△	×		
195	方形	長方形	18	18	9	△	-	-		
196	円形	長方形	25	25	13	○	△	×	縄文土器片	底に灰色粘土粒
197	長方形	長方形	32	22	25	○	×	×		

No	平面形	断面形	規模 (cm)			内容物			遺物	摘要
			直径	短径	深さ	炭	ローム	焼土		
198	円形	長方形	19	19	20	△	×	×		底は12cm角の方形
199	円形	長方形	22	22	18	△	×	×		
200	円形	長方形	16	16	18	○	×	×		
201	隅丸方形	—	24	13	19	△	×	×	縄文土器片	
202	楕円形	—	48	25	55	△	○	×		2つの柱穴が重なっている
203	隅丸方形	U字形	25	25	17	△	○	×		
204	円形	U字形	23	21	40	×	○	×		
205	隅丸方形	台形	29	27	8	○	○	×		
206	円形	台形	37	31	40	△	○	×		
207	楕円形	—	(20)	(16)	24	—	—	—		
208	円形	台形	28	24	30	×	△	△	鉄釘、鉄棒	
209	長方形	長方形	60	30	40	○	○	×	灰釉丸縄?・縄文土器片	径23cm、深さ32cmの柱穴と切りあう
210	方形	台形	18	15	15	△	△	×	縄文土器片	
211	楕円形	U字形	42	30	30	△	○	×		2つの柱穴が重なっている
212	隅丸方形	台形	23	21	10	×	○	△		
213	方形	長方形	38	28	33	—	—	—		径25cm円形の柱穴と切りあう
214	方形	U字形	30	30	30	×	×	◎		床面が高まった所にある
215	円形	—	43	43	53	△	○	×		床面が高まった所にある
216	方形	台形	26	26	—	○	○	○	炭のかたまり	中に焼石が詰まる
217	方形	—	38	28	12	×	◎	×	縄文土器片	竪穴床面の盛り上げりの上
218	方形	長方形	17	14	30	○	○	△		
219	長方形	長方形	46	30	35	○	○	△		35×35×16cm方形の柱穴に切りられる
220	隅丸方形	長方形	22	22	30	×	○	×		221・222と切りあう
221	楕円形	(U字形)	27	25	14	○	○	○		220・222と切りあう
222	方形	台形	35	30	14	×	◎	×		220・221と切りあう
223	円形	U字形	31	30	20	○	○	×		壁際の柱穴
224	長方形	長方形	20	17	13	—	—	—		
225	方形	台形	32	26	12	◎	×	△		
226	円形	長方形	26	25	17	△	○	△		
227	方形	長方形	18	18	25	×	△	×		
228	隅丸方形	長方形	28	26	10	×	△	△		壁際の柱穴
229	隅丸方形	台形	20	18	12	△	△	×		
230	長方形	長方形	30	18	14	△	○	×		
231	楕円形	—	24	20	—	×	△	△		
232	円形	台形	28	27	11	△	△	△	鉄棒	233と重なる 新旧不明
233	長方形	U字形	32	23	23	△	○	△	縄文土器片	232と重なる 新旧不明
234	方形	長方形	24	22	16	△	○	△		235と重なる 新旧不明
235	楕円形	U字形	35	23	25	△	○	△		234と重なる 新旧不明
236	方形	台形	14	13	6	△	△	×		
237	長方形	長方形	20	13	13	△	△	×		
238	隅丸方形	U字形	22	21	12	△	○	△	鉄棒	
239	楕円形	V字形	36	29	35	△	○	△		上層に縄が入る 竪穴側へ壁が傾く
240	隅丸方形	長方形	24	24	26	△	△	×		
241	隅丸方形	U字形	26	26	26	△	×	△		
242	楕円形	U字形	40	27	45	×	◎	×		243が切る
243	長方形	(台形)	35	23	24	×	×	△		242を切る
244	方形	台形	22	20	30	×	△	×		245が切る
245	円形	(長方形)	30	29	20	×	○	×		244を切る
246	楕円形	U字形	35	27	16	×	◎	×		
247	長方形	長方形	30	25	17	×	○	×		
248	方形	台形	20	19	27	×	○	×	鉄釘	
249	長方形	—	(28)	(20)	30	—	—	—		
250	円形	台形	30	30	14	×	○	×		
251	隅丸方形	台形	28	26	23	×	△	×		
252	隅丸方形	長方形	21	19	24	△	△	×		底は13cm角の方形
253	楕円形	長方形	22	20	5	○	△	×		
254	円形	台形	29	25	12	○	○	×		
255	円形	長方形	26	23	24	△	△	×		
256	楕円形	台形	47	35	14	×	×	△		
257	長方形	長方形	40	30	24	×	○	×		

表4 南羽場柱穴・柱跡一覧

[I区柱穴]

No.	平面形	断面形	規模 (cm)			内容物			遺物	備 考
			長径	短径	深さ	扉	ローム	焼土		
1	長方形	台形	24	20	20	-	○	-	-	
2	長方形	長方形	22	20	7	-	○	-	-	
3	長方形	長方形	18	16	8	-	○	-	-	
4	方形	長方形	20	20	12	-	○	-	-	
5	方形	長方形	26	26	30	-	○	-	-	
6	円形	長方形	18	18	18	-	○	-	-	
7	L字形	長方形(段アリ)	20	14	14	-	○	-	-	柱穴2個が重なる
8	円形	長方形	20	16	10	-	○	-	-	
9	円形	台形	30	26	15	-	○	-	-	
10	方形	長方形	22	22	16	-	○	-	-	
11	円形	長方形	20	20	15	-	○	-	-	
12	円形	台形	23	22	25	-	○	-	-	
13	隅丸方形	台形	20	18	16	-	○	-	-	
14	円形	長方形	20	18	5	-	○	-	-	
15	隅丸方形	長方形	16	14	20	-	○	-	-	
16	長方形	台形	24	16	20	-	○	-	-	
17	長方形	台形	30	16	25	-	○	-	-	
18	方形	長方形	25	20	20	-	○	-	-	
19	方形	長方形	24	25	25	-	○	-	-	
20	楕円形	長方形	16	12	-	-	○	-	-	

[II区柱柱跡]

No.	平面形	断面形	規模 (cm)			石数	備 考
			長径	短径	深さ		
1	楕円形	V字形	35	20	50	2	石2個を組み合せ、上面を平らにして柱を受ける。No10-8-23-1が別(D列)となる。
2	円形	V字形	25	25	43	2	石2個を組み合せ、上面を平らにして柱を受ける。
3	方形	長方形	26	16	36	0	
4	方形	長方形	22	22	15	0	
5	楕円形	V字形	24	20	65	2	柱状石の上に平石を据えるが、柱状石の下は底まで柔らかい黒色土。木材を打ちこんだ上に石を置いたか? No13-12-11-5が別(E列)となる。
6	円形	U字形	50	45	20	多数	石は細かい割石
7	長方形	U字形	20	15	10	1	中国陶器・天目茶碗・灰釉丸皿・磁石が出土。
8	楕円形	U字形	55	45	30	7	柱を受ける石の下に6個以上の石を組み合せている。D列を構成。写真43。
9	円形	長方形	24	24	25	0	
10	円形	U字形	45	45	40	3	石3個を使って上面を平らにし、柱を受ける。D列を構成。写真42。
11	方形	長方形	20	20	40	3	この部分深く耕作され上部は不明。E列を構成。
12	隅丸方形	長方形	20	20	(40)	2	深さ40以上。耕作が及び上部は不明。上部にも石があった可能性がある。E列を構成。
13	円形	V字形	18	16	40	2	耕作が及び、上部は不明。残っている石は2個だが、この上部にもあった可能性がある。E列を構成。写真45。
14	楕円形	V字形	20	30	35	2	耕作が及び、上部は不明。残っている石は2個だが、この上部にもあった可能性がある。
15	円形	V字形	30	30	30	2	石2個を組み合せ、上面を平らにして柱を受ける。
16	円形	V字形	30	30	40	3	石3個を使って上面を平らにし、柱を受ける。この北・西は耕作が及び、遺構の確認できず。
17	円形	-	*36	*36	*16	1	ビットはなく、磨かれた赤色土の上に円形の平石が置かれている。写真44。*規模の値は石の大きさを記した。
18	楕円形	V字形	24	18	30	3	この付近、耕作が及んでいるが、この柱穴のみ残存。
19	不整形	斜めにV字形	20	16	56	0	No18の北側に位置し、No18の柱を固定した柱。
20	楕円形	-	*50	*40	*20	1	ビットはなく、柱を受ける割り石を礎(ぐり石)の上に据えている。*規模の値は石の大きさを記した。
21	楕円形	-	*38	*30	*20	1	ビットはなく、柱を受ける楕円形の平石を礎(ぐり石)の上に据えている。*規模の値は石の大きさを記した。
22	円形	-	*30	*28	*18	1	ビットはなく、柱を受ける楕円形の平石を礎(ぐり石)の上に据えている。*規模の値は石の大きさを記した。
23	隅丸方形	長方形	30	30	46	0	D列を構成。
24	円形	長方形	18	18	29	0	No17の西に位置し、No17の柱を固定した柱。

[Ⅲ区柱穴]

No	平面形(上面/底面)	断面形	上面(m)		深(m)	底面(m)		内 容 物			備 考
			東西	南北		東西	南北	炭	ローム	焼土	
1	隅丸方形	台形	—	28	20	—	20	—	○	—	
2	円形	板方形	16	15	20	16	15	—	○	—	
3	方形	台形	23	25	38	16	15	—	○	—	
4	長方形	台形	22	27	23	13	17	—	○	—	
5	長方形	台形	18	24	25	13	15	—	○	—	
6	隅丸方形	長方形	20	20	38	20	20	—	○	—	
7	隅丸方形	台形	20	20	8	10	20	—	—	—	
8	円形/方形	台形	15	15	15	10	10	—	—	—	
9	円形	台形	15	15	15	10	9	—	○	—	
10	長方形/方形	台形	25	23	13	14	15	—	○	—	
11	隅丸長方形	台形	34	30	35	19	17	—	○	—	I列 (11-15-30)
12	隅丸方形	台形	16	17	10	12	11	—	○	—	
13	方形	台形	18	18	13	12	13	—	○	—	
14	円形/方形	台形	21	18	15	13	12	—	○	—	
15	隅丸方形	台形	29	25	52	15	17	—	○	—	15-18列, I列
16	隅丸方形	台形	20	21	15	12	14	—	○	—	
17	円形/長方形	台形	23	24	27	9	17	—	○	—	
18	円形/方形	台形	32	32	28	21	21	—	○	—	15-18列, H列 (18-24)
19	楕円形/方形	台形	22	23	12	14	12	—	—	—	柱穴上面は硬いタタキ床
20	方形	台形	22	23	23	16	16	—	○	—	
21	長方形	台形	30	28	30	30	28	○	○	—	柱穴上面に炭化物10×3×5cmあり。柱穴上層部に山茶碗破片。
22	方形	台形	30	20	40	17	14	—	○	—	
23	方形	台形	30	20	35	17	17	—	○	—	
24	楕円形/長方形	台形	20	17	25	15	8	—	○	—	
25	隅丸方形/隅丸長方形	台形	24	24	34	12	18	○	○	—	柱穴上層部に炭化物、細く10cmあり
26	方形	台形	24	25	40	16	18	—	○	—	K列 (24-30-26)
27	円形/方形	台形	22	22	13	14	13	—	○	—	
28	隅丸方形	台形	28	28	36	19	19	—	○	—	西側に小穴点々とあり
29	円形/方形	台形	40	45	40	17	15	—	○	—	上面、この柱穴から東は耕作により擾乱。
30	方形	台形	30	30	35	19	18	—	○	—	上層、この柱穴から東は擾乱。I列、K列
31	円形	台形	30	17	5	12	12	—	—	—	No32と接する。
32	円形	台形	30	23	5	11	12	—	—	—	No31と接する。
33	方形	台形	24	23	35	18	18	—	○	—	
34	方形	台形	33	33	48	20	20	—	○	—	H列、K列
35	隅丸長方形	台形	22	28	20	18	20	—	○	—	
36	隅丸長方形	台形	20	24	20	11	17	—	○	—	
37	円形	長方形	21	20	25	21	20	—	○	—	
38	方形	台形	25	30	38	19	19	—	○	—	
39	隅丸方形/方形	台形	26	27	18	21	20	—	○	—	
40	隅丸方形/方形	台形	23	23	36	16	15	—	○	—	
41	円形	台形	13	15	20	9	9	—	—	—	
42	円形	台形	13	13	10	7	7	—	—	—	
43	円形	台形	15	15	6	8	8	—	—	—	
44	円形	台形	11	11	6	5	5	—	—	—	
45	円形	長方形	13	12	16	13	12	—	○	—	
46	方形	台形	18	19	16	17	15	—	○	—	
47	円形	台形	19	20	33	19	20	—	○	—	
48	方形	台形	19	20	20	15	15	—	○	—	
49	隅丸方形/方形	台形	22	21	35	13	13	—	○	—	
50	隅丸方形	台形	18	16	14	12	10	—	○	—	
51	円形	台形	24	25	13	20	19	—	○	—	
52	隅丸方形	台形	18	17	10	16	13	—	○	—	
53	隅丸長方形	台形	21	16	10	16	15	—	○	—	
54	隅丸方形/方形	台形	29	27	24	15	15	—	○	—	
55	隅丸方形/方形	台形	21	20	23	13	14	—	○	—	
56	方形	台形	15	22	13	—	14	—	—	—	
57	円形	台形	20	15	10	—	15	—	—	—	
58	楕円形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
59	方形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
60	長方形	台形	25	22	33	14	19	—	○	—	
61	方形	長方形	14	16	20	14	16	—	—	—	
62	円形	台形	29	29	10	19	19	—	○	—	
63	方形	長方形	12	13	20	12	13	—	—	—	
64	隅丸方形	台形	21	21	23	14	13	—	○	—	
65	長方形	台形	22	15	14	19	9	—	—	—	

No	平面形(上面/底面)	断面形	上面(cm)			厚さ(cm)	底面(cm)			内 容 物		備 考
			東西	南北	厚さ		東西	南北	炭	ローム	焼土	
66	隅丸方形/方形	凸形	29	26	24	16	16	-	-	-		
67	隅丸方形	凸形	16	17	13	12	12	-	-	-		
68	隅丸方形/方形	凸形	21	18	33	11	11	-	○	-		
69	楕円形/隅丸長方形	凸形	18	14	18	17	8	-	-	-		
70	隅丸方形/方形	凸形	19	20	14	13	14	-	○	-		
71	円形/隅丸長方形	凸形	25	27	18	12	18	-	○	-		
72	方形	凸形	20	20	24	13	13	-	○	-		
73	不整円形	長方形	26	19	10	26	19	-	○	-		
74	隅丸方形/方形	凸形	25	27	18	11	11	-	○	-		
75	長方形/方形	凸形	37	30	50	11	11	-	○	-		
76	方形	凸形	14	10	13	10	7	-	-	-		
77	隅丸方形	凸形	21	21	14	14	13	-	○	-		
78	隅丸方形	長方形	23	21	50	23	21	-	○	-		
79	隅丸方形	凸形	26	22	35	14	16	-	○	-		
80	円形	凸形	30	25	25	23	23	-	○	-		
81	隅丸方形	凸形	17	17	15	9	10	-	○	-		
82	方形	凸形	16	17	12	10	9	-	○	-		
83	方形	凸形	28	27	45	15	15	-	○	-		
84	方形/長方形	凸形	19	20	12	11	17	-	○	-		
85	方形	凸形	20	20	24	12	13	-	○	-		
86	方形	凸形	18	19	18	14	15	-	○	-		
87	円形/隅丸方形	凸形	22	21	45	19	17	-	○	-		
88	隅丸方形	凸形	21	19	20	13	14	-	○	-		
89	隅丸方形	凸形	21	20	40	15	15	-	○	-		
90	円形/隅丸方形	凸形	28	25	26	20	18	-	○	-		
91	円形/長方形	凸形	20	23	14	14	14	-	○	-	No92に切りこむ。	
92	方形	凸形	20	22	11	12	12	-	-	-	No91が切りこむ。	
93	隅丸方形	凸形	22	18	16	15	15	-	○	-		
94	隅丸方形	長方形	20	18	18	18	18	-	○	-		

[IV区住穴]

No	上部平面形	下部平面形	深さ(cm)	内 容 物			遺 物	備 考	掘土の色 質
				炭	ローム	焼土			
1	円形	隅丸長方形						壁穴状遺構を切る	
2	方形	長方形	28	○	○				黒褐色
3	楕円形	円形	15						
4	方形	方形	31	○	○	○			黒褐色
5	隅丸方形	不整方形	22						
6	円形	円形							
7	不整楕円形	方形	34						
8	方形	方形	36	○	○	○		9と重複	黒褐色
9	方形	方形	41	○	○	○		8と重複	黒褐色
10	方形	方形	15	○	○	○			黒褐色
11	隅丸方形	方形	43	○	○				黒褐色
12	隅丸方形	円形	19	○	○	○			黒褐色
13	方形	方形	32	○	○	○			黒褐色
14	隅丸方形	隅丸方形	31						黒褐色
15	隅丸方形	隅丸方形	36	○	○			底が凸凹	黒褐色
16	隅丸方形	隅丸方形	25	○	○				黒褐色
17	隅丸長方形	隅丸方形	20						
18	方形	方形	16						
19	不整円形	不整円形	18		○		陶器片	底が凸凹	黒褐色
20	長方形	楕円形	19	○	○	○			黒褐色
21	円形	円形	11						
22	長方形	不整長方形	10					柱穴ではない	
23	隅丸方形	隅丸方形	27	○	○				黒褐色
24	方形	不整形	26	○	○	○		底が凸凹	黒褐色
25	隅丸方形	隅丸方形	19	○	○			底が凸凹	黒褐色
26	長方形	不整形	14	○	○				黒褐色
27	方形	方形	18						
28	長方形	不整方形	15	○	○	○			褐色
29	方形	不整長方形	30	○	○	○			褐色
30	方形	方形	15					重複する	
31	隅丸方形	楕円形	25	○	○	○		土層に砂が混じる。底が崩れる	褐色
32	隅丸方形	隅丸長方形	11						

No	上部平面形	下部平面形	高さ (cm)	内 容 物			遺 物	構 要	覆土の 色 調
				真	ローム	焼土			
33	楕円形	隅丸方形	49		○			巾層に石が混入	黒褐色
34	隅丸方形	隅丸方形	14					砂質土	灰褐色
35	隅丸長方形	隅丸長方形	26	○	○			底が凸凹	黒褐色
36	隅丸方形	楕円形	19						
37	楕円形	不整形円形	28	○	○				黒褐色
38	隅丸方形	隅丸方形	35	○	○	○	壁か葺		黒褐色
39	隅丸方形	隅丸方形	25						
40	方形	方形	11	○	○				黒褐色
41	不整形方形	円形	15	○	○	○		小円のピットが2つ重複	黒褐色
42	隅丸方形	隅丸方形	24	○	○	○			黒褐色
43	ほぼ五角形	不整形	19						
44	不整形方形	不整形円形	13						
45	円形	円形	16	○	○	○			褐色
46	長方形	不整形	15	○	○	○			褐色
47	円形	円形	8	○	○	○		底が締まる	黒色
48	方形	方形	27	○		○	内耳溝		黒色
49	円形	円形	10						
50	円形	円形	11						
51	隅丸方形	隅丸方形	26	○	○	○			黒褐色
52	不整形方形	不整形	23	○	○	○		底は緩やかに凸凹	黒褐色
53	方形	不整形	15	○	○				褐色
54	隅丸長方形	不整形	23	○	○	○			褐色
55	隅丸方形	隅丸方形	26	○	○	○		2つ重複	黒褐色
56	方形	方形	22	○	○	○			黒褐色
57	隅丸方形	隅丸方形	26	○	○	○		2つ重複	黒褐色
58	円形	円形	18			○			黒色
59	方形	円形	21	○		○		底中央に小穴あり	黒褐色
60	隅丸方形	楕円形	23	○	○	○			黒褐色
61	方形	不整形	32	○	○	○			黒褐色
62	隅丸方形	隅丸方形	22	○	○	○			黒褐色
63	方形	隅丸方形	23	○	○				黒色
64	方形	方形	45	○	○				
65	方形	方形	26	○					黒褐色
66	隅丸方形	隅丸方形	12	○	○	○			黒褐色
67	隅丸方形	隅丸方形	15	○	○	○		68と重複	黒褐色
68	不整形円形	円形	29	○	○	○		67と重複	褐色
69	方形	不整形	14	○	○	○		底が凸凹	黒色
70	隅丸方形	隅丸方形	33	○	○	○			黒褐色
71	隅丸方形	隅丸方形	33	○	○	○			黒褐色
72	方形	方形	21	○	○	○			黒褐色
73	不整形	方形	30	○	○	○			黒褐色
74	長方形	長方形	35	○	○	○		底が広く締まる。ロームブロックが混じる	褐色
75	隅丸方形	隅丸方形	35	○	○	○		ロームブロックが混じる	褐色
76	円形	円形	13	○	○				褐色
77	隅丸方形	隅丸方形	30	○	○	○			黒褐色
78	方形	方形	22	○	○	○	スス付燻土断片		黒褐色
79	隅丸方形	長方形	8						
80	不整形円形	不整形円形	32		○			底が凸凹	黒褐色
81	隅丸方形	楕円形	25					2-3重複が重複	
82	隅丸方形	不整形円形	12						
83	隅丸長方形	隅丸長方形	30	○	○	○			黒褐色
84	隅丸方形	不整形	25	○	○	○		2つ重複	黒褐色
85	楕円形	不整形	42	○	○	○			黒褐色
86	隅丸方形	方形	42	○	○	○		87と重複	黒色
87	円形	五角形	23	○	○	○		86と重複	黒色
88	隅丸方形	不整形	19						
89	方形	方形	15						
90	円形	円形	27						
91	方形	方形	19						
92	楕円形	隅丸方形	10	○	○	○			褐色
93	円形	隅丸方形	28	○	○	○			褐色
94	隅丸方形	方形	24						
95	隅丸方形	円形	74	○	○				黒褐色
96	隅丸方形	隅丸方形	33	○	○	○			黒褐色
97	隅丸方形	隅丸方形	25	○	○				黒色
98	隅丸方形	隅丸方形	33	○	○	○			黒褐色

No.	上部平面形	下部平面形	深さ (mm)	内 容 物			道 物	備 考	覆土の 色 調
				炭	ローム	焼土			
99	不整楕円形	楕円形	23	○	○	○			黒褐色
100	円形	円形	30	○	○	○			黒色
101	方形	方形	17						
102	楕円形	楕円形	14	○	○	○			褐色
103	隅丸方形	隅丸長方形	25						
104	方形	円形	25	○	○	○		2つ重複	黒褐色
105	方形	不整方形	33	○	○	○			黒褐色
106	隅丸方形	不整方形	25	○	○	○			灰褐色
107	楕円形	楕円形	12						
108	長方形	長方形	33	○	○	○		2つ以上重複	黒色
109	円形	円形	19			○			褐色
110	楕円形	不整方形	22	○	○	○			褐色
111	円形	円形	34	○	○	○			黒色
112	不整楕円形	円形	34	○	○	○			褐色
113	隅丸方形	不整方形	30	○	○	○		底が凸凹	黒褐色
114	方形	方形	24					115と重複	
115	方形	方形	34					114と重複	
116	隅丸方形	隅丸方形	31						黒褐色
117	長方形	長方形	9						
118	方形		19						
119	隅丸長方形	隅丸長方形	31					2つ重複?	
120	方形	方形	52					121と重複	
121	—	隅丸方形	12					120と重複	
122	楕円形	楕円形	10						
123	円形	円形	15						
124	円形	円形	14						
125	長方形	長方形	26						
126	円形	円形	18						
127	不整円形	円形	30	○	○	○			黒褐色
128	隅丸方形	隅丸方形	11	○	○	○			黒褐色
129	方形	方形	15						
130	長方形	長方形	15	○	○		炭片		黒褐色
131	隅丸長方形	方形	36	○	○	○		底が固く締まる	黒褐色
132	隅丸長方形	隅丸方形	14	○	○	○			黒褐色
133	楕円形	不整方形	22	○	○	○			褐色
134	隅丸方形	方形	21	○	○	○			黒色
135	隅丸方形	隅丸方形	28	○	○			ローム粒は少ない	黒色
136	長方形	長方形	36	○	○	○		上部に炭が多く混じる	黒色
137	隅丸方形	不整楕円形	29	○	○			上部に小石混じる。底は固く締まる。	黒色
138	方形	方形	14	○	○	○			黒色
139	長方形	方形	15	○	○	○		炭が多い	灰褐色
140	楕円形	楕円形	13	○				底が固く締まる	
141	隅丸長方形	隅丸長方形	18						
142	方形	不整方形	11	○	○				灰褐色
143	隅丸方形	隅丸方形	17						黒褐色
144	隅丸方形	隅丸方形	20	○	○			黒色土の割合が多い	黒褐色
145	隅丸方形	隅丸方形	24	○					褐色
146	隅丸方形	隅丸方形	16	○	○		網鉄破片	底の一部が固く締まる	褐色
147	方形	隅丸方形	16	○	○	○			黒色
148	隅丸方形	不整方形	13	○	○				黒色
149	不整円形	不整円形	30	○	○	○			黒色
150	楕円形	円形	19						
151	円形	隅丸方形	33	○		○			黒色
152	隅丸方形	隅丸方形	46	○		○			黒色
153	方形	方形	42	○	○	○	鉄滓	底が固く締まる	
154	楕円形	円形		○				小石・砂が混じる。西側に傾斜する。	灰褐色
155	隅丸方形	方形	39	○	○	○		ローム粒は少ない	黒色
156	隅丸方形	不整楕円形	19	○		○			黒色
157	方形	不整三角形	18	○		○			黒色
158	楕円形	楕円形	13						
159	五角形	円形	15			○			黒色
160	隅丸方形	隅丸方形	16						
161	不整方形	不整方形	24	○				柱状ではない	褐色
162	隅丸方形	円形	17	○		○			褐色
163	円形	円形	12						
164	長方形	方形	36	○	○	○		2つ重複	

No	上部平面形	下部平面形	深さ (m)	内 容 物			遺 物	備 考	遺土の 色 調
				炭	ローム	雄土			
165	方形	方形	19		○			底部中央に小穴あり。底が固く締まる。	灰褐色
166	長方形	不整形	19	○	○	○		底が固く締まる。	褐色
167	五角形	円形	21	○	○	○		底が固く締まる。	褐色
168	隅丸方形	隅丸方形	19	○	○	○			黒色
169	隅丸方形	隅丸方形	19	○	○	○		底が固く締まる。	黒色
170	円形	円形	27	○					黒色
171	方形	方形	15	○	○	○		炭が多い。	灰黒色
172	隅丸方形	方形	50	○	○	○		下層は黒色土のみ堆積。	黒色
173	長方形	不整形	15	○				底が緩やかに凸凹。	黒色
174	隅丸方形	隅丸方形	8		○				黒色
175	隅丸方形	円形	10						
176	楕円形	楕円形	11						
177	五角形	長方形	23	○	○				灰黒色
178	長方形	長方形	36	○	○				灰褐色
179	方形	不整形	13	○	○			底が緩やかに凸凹。	灰黒色
180	長方形	不整形	18	○	○	○			黒色
181	隅丸方形	隅丸方形	37	○	○				黒色
182	隅丸方形	長方形	24	○	○	○		炭が1箇所にかたまる。炭のかたまりが混じる。	黒色
183	隅丸方形	長方形	26	○	○	○			黒色
184	楕円形	隅丸方形	35	○	○	○		底が固く締まる。	黒褐色
185	方形	方形	10						
186	方形	方形	17	○	○	○			黒褐色
187	方形	方形	24	○	○	○			黒褐色
188	長方形	隅丸方形	24	○	○				黒色
189	方形	方形	10						黒色
190	隅丸方形	隅丸方形	19	○	○	○		魚子粒の混入は少ない。	黒色
191	方形	方形	21	○	○	○		魚子粒の混入は少ない。	黒色
192	隅丸方形	方形	15	○					黒色
193	円形	不整形	7			○			
194	楕円形	不整形楕円形	27			○			黒色
195	隅丸長方形	不整形楕円形	20					底が固く締まる。	黒色
196	隅丸長方形	隅丸長方形	17	○	○	○		底が固く締まる。	黒色
197	楕円形	楕円形	13						
198	楕円形	楕円形	14						
199	円形	円形	22	○		○		底が固く締まる。	黒色
200	楕円形	楕円形	14						
201	隅丸方形	不整形	20						
202	隅丸方形	長方形	18	○	○	○			褐色
203	長方形	長方形	32	○	○			底の一部が固く締まる。	黒褐色
204	方形	方形	38	○	○	○			黒褐色
205	円形	円形	11	○	○	○			灰褐色
206	円形	方形	24	○	○	○		底が固く締まる。	
207	方形	方形	28	○	○	○			黒色
208	不整形	隅丸方形	29	○	○	○		上部北東隅に川原石が混入されている。	黒褐色
209	円形	隅丸方形	16		○				灰褐色
210	隅丸方形	不整形	16	○	○	○		底が固く締まる。	灰褐色
211	楕円形	楕円形	9						
212	不整形	不整形	30	○	○	○			黒褐色
213	隅丸方形	円形	22						
214	長方形	不整形	37	○	○	○		円形(北側)、方形(南側)の2柱穴が重複。	灰褐色
215	円形	隅丸方形	42	○	○	○		底が固く締まる。	黒褐色
216	長方形	長方形	44		○			底が固く締まる。	褐色
217	隅丸方形	方形	29	○	○	○		底が固く締まる。	黒色
218	隅丸方形	隅丸方形	17	○	○	○			黒色
219	円形	不整形楕円形	28	○	○	○		底が固く締まる。220と重複。	灰褐色
220	長方形	長方形	19	○	○	○		花崗岩の丸石が落ち込む。底が固く締まる。219・221・223と重複。	灰褐色
221	不明	不明	20	○	○	○		220・222・223と重複。	灰褐色
222	方形	方形	24	○	○	○		221と重複。	黒褐色
223	長方形	不整形長方形	18	○	○	○		220・221と重複。	灰褐色
224	隅丸方形	円形	19						
225	円形	円形	11						
226	円形	円形	10	○	○	○			黒色
227	隅丸長方形	方形	18	○	○	○		228と重複。底が方形に固く締まる。	茶褐色
228	隅丸方形	方形	30	○	○	○		227と重複。ローム粒大きい。	茶褐色
229	楕円形	方形	28	○	○	○			灰褐色

No	上部平面形	下部平面形	深さ (cm)	内 容 物			遺 物	備 考	覆土の 色 調
				炭	ローム	焼土			
230	方形	隅丸方形	24	○	○	○			黒褐色
231	円形	不整方形	18	○	○	○			
232	楕円形	楕円形	24					土坑5と重複。	
233	長方形	不整方形	23	○	○	○		234と重複。	灰褐色
234	円形	方形	13	○	○	○		233と重複。	褐色
235	五角形	方形	24						黒色
236	楕円形	楕円形	9					周辺がよく締まっている。	黒色
237	方形	方形	23	○	○	○			黒褐色
238	長楕円形	長楕円形	41	○	○	○		円盤1つと小さな環2つが中層まで落ち込む。底は固く締まる。	黒褐色

表5 若森社出土遺物一覽

[縄文土器]

No	名 称	部 分	出 土 場 所	年 代	図No	写真No	備 考
1	深鉢形土器	胴上部-下部	B-5東	中期前期	40-41	120-1	
2	深鉢形土器	胴部	竪穴	前期前半	40-1	121-1	
3	深鉢形土器	胴部	柱穴46石の下部	前期前半	40-2	121-2	
4	深鉢形土器	口縁部	耕作土	中期中葉	40-3	121-3	
5	深鉢形土器	胴上部	A-5覆瓦	中期後葉	40-4	121-4	
6	深鉢形土器	口縁部	耕作土	中期中葉	40-5	121-5	
7	深鉢形土器	胴上部	土坑27	中期中葉	40-6	121-6	
8	深鉢形土器	口縁部	A-5覆瓦	中期後葉	40-7	121-7	
9	深鉢形土器	口縁部	耕作土	中期後葉	40-8	121-8	
10	深鉢形土器	口縁部	第3柱穴群	中期後葉	40-9	121-9	
11	深鉢形土器	口縁部	柱穴17	中期後葉	40-10	121-10	
12	深鉢形土器	胴下部	竪穴	中期後葉	40-11	121-11	
13	深鉢形土器	胴部	耕作土	中期後葉	40-12	121-12	
14	深鉢形土器	胴部	柱穴182	中期前半	40-13	121-13	
15	深鉢形土器	胴部	竪穴	中期後葉	40-14	121-14	
16	深鉢形土器	胴部	耕作土	中期後葉	40-15	121-15	
17	深鉢形土器	胴部	A-4覆瓦	中期後葉	40-16	121-16	
18	深鉢形土器	胴部	土坑3・4	中期後葉	40-17	121-17	
19	深鉢形土器	胴部	耕作土	中期後葉	40-18	121-18	
20	深鉢形土器	胴部	竪穴	中期後葉	40-19	121-19	
21	深鉢形土器	胴部	土坑3・4	中期後葉	40-20	121-20	
22	深鉢形土器	胴部	A-5覆瓦	中期後葉	40-21	121-21	
23	深鉢形土器	口縁部	土坑32	後期前半	40-22	121-22	
24	深鉢形土器	口縁部	土坑32	後期前半	40-23	121-23	
25	深鉢形土器	口縁部	耕作土	後期前半	40-24	122-24	
26	深鉢形土器	口縁部	土坑3・4	後期前半	40-25	122-25	
27	深鉢形土器	口縁部	竪穴	後期	40-26	122-26	
28	深鉢形土器	胴上部	耕作土	後期前半	40-27	122-27	
29	深鉢形土器	胴上部	第4柱穴群B-4柱穴	後期前半	40-28	122-28	
30	深鉢形土器	胴上部	土坑31	後期前半	40-29	122-29	
31	深鉢形土器	胴上部	耕作土	中期後葉	40-30	122-30	
32	深鉢形土器	胴上部	耕作土	中期後葉	40-31	122-31	
33	深鉢形土器	胴上部	耕作土	中期後葉	40-32	122-32	
34	深鉢形土器	胴上部	土坑36	後期前半	40-33	122-33	
35	深鉢形土器	胴部	耕作土	後期前半	40-34	122-34	
36	深鉢形土器	胴部	土坑3・4	中期後葉	40-35	122-35	
37	深鉢形土器	胴部	耕作土	中期後葉	40-36	122-36	
38	深鉢形土器	胴部	不明	中期後葉	40-37	122-37	
39	深鉢形土器	胴部	竪穴	中期後葉	40-38	122-38	
40	深鉢形土器	胴部	耕作土	後期	40-39	122-39	
41	深鉢形土器	口縁部	B-4区北東	中期初葉	40-40	120-2	1の口縁部
42	土製門板		竪穴		-	122-43	
43	浅鉢形土器	底部	土坑32	後期	-	122-42	

ほかに小破片多数あり

[弥生土器]

No	名 称	部 分	出 土 場 所	年 代	図No	写真No	備 考
44	甕形土器	胴部	耕作土	中期初	40-42	97-6	
45	甕形土器	頸部	耕作土	後期初	40-43	97-7	
46	甕形土器	胴下部	埋没遺構	後期末	40-44	96	

[古代土器・陶器]

No	名 称	部 分	出 土 場 所	年 代	図No	写真No	備 考
47	土師師鉢	口縁部	遺構外	8~9C	-	97-3	
48	須恵師蓋	かぶり部	土坑22	8~9C	-	97-4	
49	須恵師杯	口縁部	表面採集	8~9C	-	97-5	
50	灰輪陶器	口縁部	土坑36	9~10C	-	-	

[古瀬戸製品]

No	名 称	部 分	出 土 場 所	年 代	図No	写真No	備 考
51	灰輪椀	胴部	竪穴	14C前	43-1	77-8	底径約11.2cm 古瀬戸中I-II
52	灰輪折縁深皿	口縁部	竪穴底部	14C中	-	77-6	古瀬戸中III-IV
53	灰輪水注	注口部	竪穴	14C前	-	77-9	古瀬戸中
54	灰輪西耳壺	底部	竪穴底部	13C前	-	77-12	古瀬戸前I-II
55	灰輪平碗	口縁部	A-5b区	14C初	-	-	
56	灰輪平碗	口縁部	遺構外	15C後	-	77-4	
57	灰輪折縁深皿	口縁部	A-2区段乱	14C中	-	77-1	古瀬戸中IV
58	灰輪折縁深皿	口縁部	調査区西側	14C中	-	77-5	
59	灰輪即日付大皿	口縁部	遺構外	15C前	-	77-2	古瀬戸後III
60	灰輪三足盤	口縁部	遺構外	-	-	77-7	
61	天目茶碗	口縁部	遺構外	15C	-	77-10	
62	灰輪西耳壺	胴部	遺構外	13C前	-	77-13	古瀬戸前1b?
63	灰輪面花文(碗?)	胴上部	遺構外	14~15C	-	77-11	

[大塚期以降の瀬戸・美濃系陶器]

No	名 称	部 分	出 土 場 所	年 代	図No	写真No	備 考
64	灰輪丸皿	口縁部	調査区西側	16C初	-	-	口縁部にのみ灰輪がかかる
65	灰輪丸碗?	底部	柱穴209	15C後~16C	-	77-15	底径約5.5cm
66	灰輪丸碗	底部	調査区東側	17C中	43-2	77-14	底径6.0cm 美濃3~4小期
67	椀物小甕?	胴部	遺構外	江戸後期	-	-	瀬戸8~11小期
68	灰輪反皿	口縁部	調査区西側	17C後	-	77-3	美濃4小期
69	小甕	底部	遺構外	-	-	-	
70	燗鉢	底部	遺構外	-	-	-	

ほかに遺構外より近世陶器片12点出土

[青磁・白磁]

No	名 称	部 分	出 土 場 所	年 代	図No	写真No	備 考
71	鉄蓮弁文青磁碗	胴部	竪穴	-	-	79-7	
72	片切形蓮弁文青磁碗	胴部	竪穴	13C	-	79-8	
73	片切形蓮弁文青磁碗	口縁部	竪穴	14C後	-	79-2	口縁部が外反する
74	内面劃花文青磁碗	口~胴部	竪穴	13C	-	79-4	
75	外面繪栴文青磁碗	胴部	竪穴	12C	-	79-6	内面には劃花文を施す
76	片切形蓮弁文青磁碗	底部	柱穴137	13C	43-4	78-2	覆泉底 底径4.6cm
77	青磁碗	底部	土坑32	13C	43-5	78-3	覆泉底 底径4.6cm
78	青磁碗	底部	柱穴86	12C	43-3	78-1	内面に片切形と繪栴で劃花文を施す 底径4.8cm
79	内面劃花文青磁碗	口縁部	柱穴19	12C	-	79-5	
80	片切形蓮弁文青磁碗	胴部	柱穴93	13C	-	79-1	
81	鉄蓮弁文青磁碗	底部	調査区中央	14C前	-	79-9	片切形で蓮弁の外形を表す ほかに調査区中央部で細片3点出土
82	青磁皿	口縁部	遺構外	13C	-	79-3	口縁部がやや外反する ほかに遺構外で細片6点出土
83	白磁碗	口縁部	柱穴160	-	-	-	口縁が外面に折れる 厚さ4mmと薄い
84	白磁碗	口縁部	竪穴	12C	-	79-12	口縁が外面に折れる 厚さ4mm
85	白磁碗	口縁部	竪穴	-	-	-	口縁が破く外反する 厚さ4mm
86	口壳の皿	底部	竪穴	13C後~14C前	43-6	79-13	底径6.3cm
87	口壳の皿	底部	竪穴	13C後~14C前	-	-	
88	青白磁皿?	底部	竪穴	-	-	79-14	高台はない 胎土が細かく焼成も良い
89	白磁碗	口縁部	調査区中央	12C	-	79-11	口縁が破く外反する
90	白磁碗	口縁部	調査区東側	-	-	79-10	口縁が外面に「く」の字に折れる

青磁製品はほかに細かい破片が土坑6から出土、遺構外から同安楽黒青磁の小破片が出土、白磁製品はほかに遺構外から6点出土

【山茶碗・小皿】

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
91	小皿	底部	A-5区混乱	12~13C?	—	80-5	糸切り 底径約4cm
92	山茶碗	口~胴部	竪穴	14C前	44-16	80-2	口径13.7cm 厚さ4.5mm 東濃系 大畑大明
93	山茶碗	底部	竪穴	12C末	44-18	80-4	底径6.5cm 東濃系 丸石
94	小皿	口縁部	竪穴	14C?	—	80-6	厚さ5mmでやや厚い
95	山茶碗	底部	竪穴	13C	—	80-3	底径約6.5cm 見込み中央部が特に薄い 東濃系
96	山茶碗	口縁部	竪穴	13C	—	80-1	東濃系 明和

山茶碗・小皿はほかに遺構外から10点、土坑7と第3柱穴群から各1点、竪穴底部から小破片4点が出土。

【片口鉢】

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
97	片口鉢	胴~底部	土坑9	13C後	44-15	98-7	中津川産 底径12.6cm
98	片口鉢	口縁部	土坑9	13~14C?	—	—	中津川産 口唇部に溝が通る
99	片口鉢	口縁部	竪穴	13C後	43-11	98-2	中津川産
100	片口鉢	口縁部	竪穴	13~14C?	43-12	98-4	中津川産? 胎土は淡赤褐色で長石を多く含む 口唇部に溝が通る
101	片口鉢	胴部	竪穴	—	—	98-8	中津川産
102	片口鉢	胴部	竪穴	—	—	98-8	中津川産 胎土は淡黄褐色で粗雑
103	片口鉢	底部	竪穴	13~14C?	43-14	98-6	中津川産 底径約10cm
104	片口鉢	底部	竪穴	13~14C?	43-13	98-5	中津川産 底径10.1cm
105	片口鉢	口縁部	竪穴	12C末~13C初	—	98-3	尾張産
106	片口鉢	口縁部	調査区東側	12C	—	—	常滑産
107	片口鉢	胴部	遺構外	13C	—	98-9	中津川産

片口鉢はほかに竪穴から17点（内胎土が粗雑なもの3点）、土坑26・36から各1点、遺構外から27点（内胎土が粗雑なもの3点）出土。

【摺鉢（瀬戸産以外）】

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
108	摺鉢	底部	竪穴	—	—	—	在胎産? 胎土は非常に粗い
109	摺鉢	口縁部	竪穴	—	44-17	98-1	在胎産? 胎土は非常に粗い 口径約24.5cm

【甕】

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
110	甕	胴部	土坑7	—	—	—	常滑産
111	甕	胴部	土坑9	—	—	—	常滑産
112	甕	胴部	土坑26	—	—	—	常滑産
113	甕	口縁部	土坑26	13C後	43-9	82-1	常滑産 口径約43.2cm
114	甕	胴部	土坑27	—	—	—	中津川産
115	甕	肩~胴部	竪穴	—	—	82-5	常滑産
116	甕	胴部	竪穴	—	—	—	常滑産
117	甕	胴部	竪穴	—	—	—	常滑産
118	甕	口縁部	竪穴底部	13C中	—	82-3	常滑産 6a期
119	甕	口縁部	竪穴	15C前	—	81-3	中津川産 縁部の幅3.5cm 9期
120	甕	肩~胴部	竪穴	—	—	—	中津川産 ほかに3点出土
121	甕	肩~胴部	竪穴	—	—	81-6	中津川産 緑色の釉がかかる
122	甕	胴部	竪穴底部	—	—	81-7	中津川産 緑色の釉がかかる
123	小型甕	肩~胴部	竪穴	—	—	81-4	中津川産
124	甕	胴部	竪穴	—	—	81-5	中津川産 ほかに1点出土
125	甕	口縁部	柱穴124	13C	43-10	82-6	常滑産 口径約36cm
126	甕	底部	柱穴137	13C	—	82-7	常滑産 底径約9.3cm
127	甕	胴部	柱穴190	—	—	—	中津川産
128	甕	口縁部	柱穴17	13C中	—	82-2	常滑産 縁部の幅2.2cm 6a期
129	甕	頸~肩部	遺構外	—	—	—	常滑産
130	甕	細片	遺構外	—	—	—	常滑産 ほかに11点出土
131	甕	底部	遺構外	—	—	—	中津川産 内側に自然釉
132	甕	細片	遺構外	—	—	—	中津川産 ほかに35点出土
133	甕	胴部	C-5 混乱	13C	—	82-4	常滑産 押印文が施される
134	甕	口縁部	土坑36	14C	43-7	81-1	中津川産 口径約25.7cm
135	甕	口縁部	A-5 混乱	15C	43-8	81-2	中津川産 口径約43.2cm
136	甕	細片	土坑37	—	—	—	中津川産

【中世土器】

No	名 称	部 分	出土場所	年 代	図No	写真No	備 考
137	内耳鍋	底-胴部	遺構外		-	97-1	外面にスス付着
138	内耳鍋	底部	遺構外		-	97-2	内・外面にスス付着

【阿弥陀塔跡出土陶器】 東今回の発掘調査で出土したものではないが、過去に調査区内で見発見されたもの

No	名 称	部 分	出土場所	年 代	図No	写真No	備 考
139	古瀬戸灰釉四耳壺	口縁部	阿弥陀塔跡	13C前	45-38	1	器高24cm、胴径21.9cm、底径9.5cm 古瀬戸前II
140	古瀬戸灰釉四耳壺	胴-底部	阿弥陀塔跡	13C前	45-39	2	器高18.5cm、胴径16.8cm、底径9.8cm 古瀬戸前II
141	古瀬戸鉄釉施瓶	胴部	阿弥陀塔跡	14C前	-	15-7-8	印花文 古瀬戸中II
142	古瀬戸灰釉小壺	肩部	阿弥陀塔跡	15C?	-	15-4	1.穴を穿つ 古瀬戸後
143	炊種天目茶碗	口縁部	阿弥陀塔跡		-	15-6	
144	灰付陶器	口-底部	阿弥陀塔跡	18C後	45-40	15-3	器高5.2cm、口径10.0cm、底径3.2cm 瀬戸8小期
145	甕	肩部	阿弥陀塔跡	12C後-13C初	-	15-1-2	青滑蓋 濃緑黄色の釉が所々にかかる
146	甕	胴部?	阿弥陀塔跡		-	15-5	中津川産

【石器】

No	名 称	出土場所	図No	写真No	備 考 (数値の単位はcm)
147	尖頭部		41-2	118	胴部、黒曜石製、4.1×2.1×1.0、10g
148	スクレイパー		41-1	117	完形品、黒曜石製、6.45×4.2×3.4、102g
149	石鏃	竪穴	41-7	115-7	完形品、黒曜石製
150	二次加工・使用痕のある剥片		41-3	115-3	黒曜石製
151	二次加工・使用痕のある剥片		41-6	115-6	黒曜石製
152	二次加工・使用痕のある剥片		41-4	115-4	黒曜石製
153	二次加工・使用痕のある剥片		41-5	115-5	黒曜石製
154	石鏃状石斧		41-8	115-8	黒曜石製
155	打製石斧		42-7	116-7	完形品、砂岩製、13.7×4.5×2.1、168g
156	打製石斧		42-1	116-1	完形品、砂岩製、14.8×7.0×2.5、264g
157	打製石斧		42-3	116-3	完形品、珸岩製、11.3×4.5×2.5、108g
158	打製石斧		42-6	116-6	完形品、砂岩製、8.2×4.8×1.8、86g
159	打製石斧		42-2	116-2	完形品、緑色岩製、10.0×5.3×1.2、108g
160	打製石斧		42-5	116-5	折れ頭部残、砂岩製、4.8×4.3×1.7、48g
161	打製石斧	土坑26	42-4	116-4	折れ頭部残、緑色岩製、5.5×4.8×1.0、50g
162	棒状敲打器		42-11	116-11	完形品、安山岩製、15.2×3.9×2.6、220g
163	棒状敲打器		42-10	116-10	完形品、安山岩製、14.8×5.5×3.4、468g
164	石鏃		42-8	116-8	完形品、砂岩製、8.3×4.2×2.4、120g
165	石鏃		42-9	116-9	完形品、砂岩製、7.8×6.6×1.6、140g

【石製品】

No	名 称	出土場所	図No	写真No	備 考 (数値の単位はcm)
166	砥石	土坑9	44-23	105	長軸(15.5)×短軸5.1×最大厚2.3(以下同様) 直方体形砥石の半分
167	砥石	土坑9	44-24	105	(8.5)×4.4×2.0 直方体形砥石の半分
168	砥石	土坑9	-	105	(6.9)×3.9×2.4 直方体形砥石の半分
169	砥石	土坑9	-	105	(4.0)×3.6×1.4 直方体形砥石の中央部
170	砥石	竪穴	44-22	105	(7.4)×3.9×2.2 直方体形砥石の半分
171	砥石	竪穴	44-21	105	(5.3)×4.1×2.3 直方体形砥石の半分
172	砥石	竪穴	44-19	106	(7.2)×3.1×1.1 一面のみ使用、両面に工具痕あり
173	砥石	竪穴	44-20	105	(7.6)×3.6×1.0
174	砥石	遺構外	-	106	(14.7)×4.3×3.0 擦り減っており、あまり使用されていない
175	砥石	遺構外	-	106	(22.6)×8.7×2.8 砂岩製で大型

【金属製品・鍛冶関連遺物】

No	名 称	出土場所	図No	写真No	備 考 (数値の単位はcm)
176	鉄釘	土坑6	-	109	全長6.1
177	鉄釘	土坑26	-	109	頭部破片
178	鉄棒	土坑26	-	109	2.0×1.0×1.0
179	鉄釘	竪穴	-	109	全長4.6
180	鉄釘	竪穴	-	109	全長5.4
181	鉄釘	竪穴	-	109	全長7.7

No.	名称	出土場所	図No.	写真No.	摘要 (数値の単位はcm)
182	鉄釘	竪穴	--	109	全長5.9
183	鉄釘	竪穴	--	109	全長6.3
184	鉄釘	竪穴	--	109	全長6.3
185	鉄釘	竪穴	--	109	全長約6
186	鉄釘	竪穴	--	109	全長6.7
187	鉄釘	竪穴底部	--	109	全長6.5
188	鉄釘	竪穴底部	--	109	全長6.0
189	鉄釘	竪穴	--	109	全長5.9
190	鉄釘	竪穴	--	109	全長約5.5
191	鉄釘	竪穴	--	109	全長6.5
192	鉄釘	竪穴	--	109	全長9.0
193	鉄釘	竪穴底部	44-25	109	全長8.5
194	鉄釘	竪穴	--	109	全長8.5
195	鉄釘	竪穴	44-28	109	全長5.8
196	鉄釘	竪穴	44-30	109	全長8.8
197	鉄釘	竪穴	44-27	109	全長6.7
198	鉄釘	竪穴底部	44-26	109	全長7.8
199	鉄釘	竪穴	44-29	109	全長7.4 ほか竪穴状遺構内から鉄釘破片19点出土
200	鉄釘	第4柱穴群	44-31	109	全長6.2
201	鉄釘	第3柱穴群	44-32	109	全長12.0
202	鉄釘	竪穴	--	109	全長約9
203	鉄釘	竪穴	--	109	全長8.0
204	鉄釘	竪穴	--	109	全長7.5
205	鉄釘	竪穴	--	109	全長7.3
206	鉄釘	土坑35	--	109	全長8.2
207	鉄釘	調査区中央遺構外	--	109	全長約7
208	鉄釘	調査区中央遺構外	--	109	上半部が残存 ほか調査区中央部から鉄釘破片11点出土
209	鉄釘	遺構外	--	109	下半穴
210	鉄押	竪穴底部	--	--	
211	鉄押	竪穴底部	--	--	
212	鉄押	竪穴底部	--	--	
213	鉄押	竪穴底部	--	--	
214	鉄押	土坑26	--	--	2.0×1.0×1.0、5 枚
215	鉄押	竪穴	110	--	3.5×2.2×2.2、30 枚
216	鉄押	竪穴	--	--	羅布大
217	鉄押	竪穴	110	--	碗形押、5.8×5.0×2.6、96 枚
218	鉄押	竪穴	110	--	碗形押、4.7×3.2×2.0、30 枚
219	鉄押	竪穴	110	--	碗形押、9.0×6.8×2.5、177 枚
220	鉄押	竪穴	110	--	碗形押7、5.5×2.5×1.8、40 枚
221	鉄押	竪穴	110	--	碗形押、5.5×4.2×1.8、49 枚
222	鉄押	竪穴	110	--	2.0×2.0×1.0、11 枚
223	鉄押	柱穴67	--	--	碗形押、8.3×5.6×3.0、185 枚
224	鉄押	第1柱穴群北第53	110	--	3.5×3.0×2.0、32 枚
225	鉄押	柱穴238	110	--	3.3×2.1×1.1、14 枚
226	鉄押	柱穴232	110	--	3.4×2.5×1.4、21 枚
227	鉄押	第3柱穴群	--	--	2.9×2.5×1.4、21 枚
228	鉄押	第3柱穴群	--	--	2.2×1.7×1.2、12 枚
229	鉄押	柱穴208	--	--	3.0×1.5×1.5、10 枚
230	鉄押	遺構外	110	--	碗形押3/4現、7.4×6.1×2.3、180 枚
231	鉄押	遺構外	110	--	碗形押1/4現、4.7×4.3×2.2、92 枚
232	鉄押	遺構外	110	--	碗形押 小石を多くかみ込む、3.8×3.5×2.0、51 枚
233	鉄押	竪穴底部	--	--	
234	銭貨	柱穴17	45-37	95-1	「治平元寶」(北宋銭) 2枚が網罟
235	銭貨	遺構外	--	95-2	4枚が網罟 判読不能
236	小鉄片	竪穴底部	--	111	用途不明
237	鉄製工具?	竪穴	44-33	111-4	
238	刀子状工具?	竪穴	45-35	111-2	
239	不明鉄製品	柱穴17	45-36	111-1	
240	小鉄片	遺構外	--	111-3	用途不明 ほか遺構外から小鉄片2点出土
241	網状鉄製品	竪穴	43-34	--	用途不明

表6 南羽場出土遺物一覧

[古代陶器]

No.	名称	部分	出土場所	年代	図No.	写真No.	摘要
1	猿戎灰陶器	口縁部	I-B-I	9C	--	83-1	遺長K14

[古瀬戸製品]

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	挿 要
2	灰釉平碗	胴下部	I-A-1	15C中～後	—	83-17	古瀬戸後III-IV
3	灰釉直縁大皿	口縁部	I-A-1	15C前	—	83-4	古瀬戸後I-II
4	灰釉縁輪小皿	口縁部	I-A-1	15C後	47-3	83-6	古瀬戸後? 口径約12.4cm
5	鉄釉八段皿	底部	I-A-1	15C前	47-4	83-21	古瀬戸後田 口径約9cm
6	襷鉢	底部	I-A-1	15C中～後	47-1	99-10	古瀬戸後田-IV 口径約13cm
7	襷鉢	胴下部	I-A-1	15C中～後	—	100-11	古瀬戸後田
8	灰釉折縁深皿	胴部	I-A-1	14C後	—	83-19	古瀬戸中田-IV
9	襷鉢	胴下部	I-A-2	15C中～後	—	99-9	古瀬戸後田-IV
10	灰釉平碗	口縁部	I-A-2	15C後	—	83-13	古瀬戸後IV
11	鉄物蓋?	胴部	I-A-2	15C中～後?	—	84-4	古瀬戸後III-IV
12	灰釉(鉢?)	胴部	I-A-1	—	—	83-7	—
13	灰釉縁輪小皿	口縁部	I-A-1	15C中	—	83-12	古瀬戸後IV古
14	天目茶碗	胴下部	I-B-2	—	—	—	2片あり
15	蓮母旗茶壺	胴部	I区表縁	15C	—	83-20	古瀬戸後
16	蓮母旗茶壺	底部	I区表縁	15C	47-2	83-22	古瀬戸後 口径約14cm
17	鉄物蓋?	胴部	I-B-2	—	—	84-15	—
18	鉄物蓋?	胴部	I-B-2	—	—	84-6	—
19	灰釉四耳壺?	胴部	I-B-2	—	—	—	—
20	灰釉四耳壺?	胴部	I-B-2	—	—	—	—
21	壺?	—	I-B-2	—	—	—	—
22	天目茶碗	底部	II-B-14	15C中～後	47-15	87-12	古瀬戸後IV古 口径約4cm
23	天目茶碗	口縁部	II-A-14	15C後	—	87-4	古瀬戸後IV新
24	灰釉直縁大皿	口縁部	II-A-14	15C中～後	—	—	古瀬戸後田-IV
25	灰釉煎茶	胴～底部	II-B-14	15C中～後	47-8	85-7	古瀬戸後III-IV 口径約14.3cm
26	祖母旗茶壺	口縁部	II-B-12, 傘状遺構東	15C中～後	47-10	84-1	古瀬戸後田-IV 口径約12.2cm
27	灰釉煎茶	胴下部	II-B-14, 耕作土	15C中～後	—	85-4	古瀬戸後III-IV
28	襷鉢	底部	II-B-12, 床面上東礎石	15C中～後	47-9	100-9	古瀬戸後田-IV 口径約10.4cm
29	鉄釉形器	口縁部	II-B-14, 床面上	15C後	—	84-5	—
30	灰釉縁輪小皿	底部	II-B-14	15C中～後	47-11	87-17	古瀬戸後田-IV 口径約4.4cm
31	灰釉平碗?	胴下部	II-A-12	15C	—	85-5	—
32	灰釉折縁深皿	口縁部	II-A-14	15C前	—	87-16	古瀬戸後II
33	襷鉢	口縁部	II-B-14	15C中～後	47-19	100-5	古瀬戸後IV古 口径約30cm
34	鉄物蓋?	胴部	II-B-14, 床面上	15C中～後	—	84-20	古瀬戸? 後田-IV
35	灰釉折縁深皿	口縁部	II-A-12	15C前	—	87-18	古瀬戸後II
36	灰釉丸碗	口縁～胴部	II-A-13	15C後	47-12	86-19	古瀬戸後IV 口径約13.6cm
37	灰釉端反碗	胴下部	II-A-13	15C後	—	86-13	古瀬戸後IV
38	天目茶碗	底部	II-A-12	15C後	47-14	87-10	古瀬戸後IV 口径約4cm
39	天目茶碗	胴下部	II-A-12	?	—	87-11	—
40	天目茶碗	口縁部	II-A-12	15C前?	—	87-1	古瀬戸後I?
41	襷鉢	底部	II-B-13	15C後	47-17	100-12	古瀬戸後IV新 口径約10.4cm
42	灰釉煎茶	底部	II-B-14 西部床面上	15C後	47-16	85-9	古瀬戸後IV新 口径約4.8cm
43	灰釉縁輪小皿	底部	II-B-14	15C後	47-13	87-13	古瀬戸後IV, 割り出し高台 口径約5cm
44	鉄釉花瓶	胴部上頸部	II-B-14	15C中～後	—	84-14	古瀬戸後田-IV
45	天目茶碗	胴部	II-B-14	15C中	—	87-7	古瀬戸後IV古
46	襷鉢	底部	II-B-12	—	47-18	100-8	口径約12.8cm
47	天目茶碗	口縁部	II-A-14	15C前	—	87-3	古瀬戸後III
48	天目茶碗	胴部	II-B-14	—	—	87-6	—
49	灰釉(蓋?)	胴部	II-A-13	—	—	85-8	—
50	灰釉煎茶	胴下部	II-A-12	—	—	85-6	—
51	灰釉華式花瓶	胴部	田区	15C前	48-1	88-1	昭和47年出土仏花瓶と推定
52	灰釉折縁深皿	口縁～底部	田区	14～15C	—	88-13	—
53	片口鉢	底部	田区	14C	—	88-11	瀬戸産
54	灰釉丸碗?	胴下部	田区	15C後?	—	88-5	—
55	灰釉四耳壺	胴部	IV区1号住居址底部	13C前	—	89-6	古瀬戸前II
56	灰釉四耳壺	肩部	IV区1号住居址	13C前	—	89-1	古瀬戸前II
57	天目茶碗	胴部	IV区1号住居址炉状遺構	15C中～後	—	89-8	住居址底面ではなく、上部の灰層より出土 古瀬戸後III-IV
58	灰釉平碗?	口縁部	IV区遺構外	15C後?	—	89-3	2号～3号住居間の包含層より出土 古瀬戸後IV?
59	灰釉平碗	約1/5	IV区3号住居址	15C中	48-4	90-2	口径約17.6cm 古瀬戸後IV古
60	鉄釉天目茶碗	口縁部	IV区3号住居址床面	15C中	—	90-3	床面より出土 古瀬戸後IV古
61	灰釉平碗	底部	IV区3号住居址	15C後	48-6	90-5	口径約5.2cm 古瀬戸後IV
62	灰釉平碗	口縁部	IV区遺構外	15C前	—	89-4	遺構確認層より出土 古瀬戸後III
63	襷鉢?	胴部	IV区遺構外	15C後	—	89-9	2号～3号住居間の包含層より出土 古瀬戸後IV?

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
64	灰輪御皿	口縁部	IV区遺構外	14C前	48-5	89-5	2号-3号住居間の包含層より出土 口径約17cm
65	灰輪四耳葺	葺部	IV区遺構外	13C前	-	89-7	3号住居東壁附近の包含層より出土 占瀬戸前田
66	播鉢	胴部	IV区表土中	15C後?	-	-	-
67	西文梅瓿	胴部	IV区表土中	14C前	-	89-2	占瀬戸中I-II
68	灰輪平碗	底部	V区表土中	15C後?	-	-	-
69	鉄輪壺	葺部	VI区	15C?	-	91-10	-

[大塚期以降の瀬戸・美濃系陶器]

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
70	灰輪丸碗	口縁部	I-A-1	江戸?	-	-	2片あり
71	染付碗	口縁-底部	I-A-1	江戸?	-	-	4片あり
72	灰輪丸碗	底部	I-A-1	18C後	47-5	83-11	美濃7小期 底径約4cm
73	灰輪丸碗	口縁部	I-A-1	18C中	-	83-3	美濃5-6小期
74	ケンコツ茶碗	口縁部	I-A-1	18C前	-	83-8	美濃急須5小期
75	鉄輪(小皿?)	胴部	I-A-1	近世?	-	83-9	-
76	小型播鉢	口縁部	I-A-1	近世	-	83-14	瀬戸・美濃
77	灰輪火入	口縁-胴部	I-A-1	18C後	-	83-10	美濃? 5-7小期
78	灰輪丸碗	口縁部	I-A-1	18C後	-	-	瀬戸・美濃5-7小期
79	播鉢	胴部	I-A-1	18C後	-	99-3	瀬戸5-7小期
80	灰輪平碗?	口縁部	I-A-1	16C?	-	87-15	-
81	灰輪丸皿	口縁部	II-B-13	16C前	-	86-12	瀬戸・美濃
82	灰輪丸皿	口縁部	II-A-13	16C後	-	86-10	大塚II
83	灰輪丸碗?	胴部	II-A-13	16C後	-	86-8	大塚II
84	播鉢	胴部	II-A-13	16C後	-	100-6	大塚II-III
85	天目茶碗	口縁部	II-A-13	16C前	-	87-2	大塚I
86	鉄輪惣弁?	胴部	II-B-14	16?	-	84-8	大塚?
87	鉄輪惣弁莖	底部	II-A-12	16C末-17C初	47-27	84-11	瀬戸3-4小期 底径約4.3cm
88	十瓶	胴部	II-A-12	19C	-	85-14	瀬戸?
89	鉄輪中皿	胴下部	II-A-12	18C後	-	84-13	美濃5-7小期
90	播鉢	口縁部	II-A-12	17C前	-	84-12	瀬戸・美濃
91	鉄輪中皿	底部	II-A-12	18C後	-	84-7	美濃5-7小期
92	灰輪碗反皿?	底部	II-B-14	16C前	47-21	86-17	大塚I-II 底径約7.2cm
93	灰輪碗反皿?	底部	II-B-14	16C前	47-22	86-16	大塚I-II 底径約6cm
94	灰輪丸皿	底部	II-B-14	16C	47-20	86-18	底径約6.8cm
95	灰輪丸碗	口縁-底部	II-B-14	16C前	-	86-2	大塚I-II
96	灰輪はさみ皿	口縁部	II-B-13	16C前	-	86-9	大塚I
97	灰輪丸皿	口縁部	II-B-13	16C中	-	86-6	大塚II
98	灰輪丸皿	口縁部	II-B-13	16C中	-	86-5	大塚II
99	灰輪丸皿	口縁部	II-B-13	16C中	-	86-14	大塚II
100	灰輪碗反皿?	口縁部	II-B-13	16C前	-	86-3	大塚I
101	灰輪小皿	口縁部	II-B-13	17C?	-	86-7	瀬戸・美濃
102	灰輪はさみ皿?	口縁部	II-B-13	-	-	-	-
103	天目茶碗	胴下部	II-A-12	16C中	-	87-8	大塚II?
104	灰輪丸碗	口縁部	II-A-12	16C後	-	86-4	大塚II後?
105	鉄輪椀莖	底部	II-A-12	16C中	47-23	87-14	大塚II 底径約6.3cm
106	播鉢	胴部	II-A-12	16C後	-	100-4	大塚II-III
107	天目茶碗	胴部	II-A-12	16C前	-	87-5	大塚I-II
108	香炉	底部	II-A-8	江戸後期	47-28	100-10	瀬戸 底径約8.3cm
109	播鉢	胴部	II-A-12	16C後	-	100-7	大塚III-IV
110	鉄輪小杯	口縁-底部	II-A-14	16C後	47-25	84-3	大塚III 口径10.3cm、底径5.2cm、器高1.9cm
111	灰輪丸皿	ほぼ丸形	II-B-13	16C中	47-24	86-15	大塚II 口径10.3cm、底径5.5cm、器高2.9cm
112	茶壺	胴部	II-A-13	16C	-	84-9	大塚?
113	茶壺	胴部	II-A-13	16C	-	84-2	大塚?
114	灰輪丸碗	口縁部	II-A-12	18C	-	86-11	瀬戸・美濃5-7小期
115	天目茶碗	底部	II-B-14	16C後	47-26	87-9	大塚III 底径4cmサビあり
116	急須	胴下部-底部	II-A-12	19C	-	-	-?
117	播鉢	胴下部	II-A-12	-	-	100-3	-
118	急須?	胴部?	III区	近世?	-	-	-
119	鉄輪平碗?	胴部	V区表土中	16C前?	-	91-4	大塚I
120	天目茶碗	口縁部	V区表土中	18C前	-	91-2	瀬戸5-6小期
121	播鉢?	胴部?	V区表土中	18C前?	-	91-5	瀬戸5-7小期
122	尾州茶碗	胴部	V区表土中	18C前	-	91-7	美濃5-7小期
123	鉄輪仏蘭鉢	3/4	V区周辺表土	18C前	48-3	88-12	美濃5-6小期

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
124	環状	口縁部	VI区	不明	—	91-8	
125	灰釉丸皿?	口縁部	VI区	16C	—	91-9	
126	蓋?	胴部?	VI区	不明	—	91-11	

[青磁・白磁・染付陶器 (中国産)]

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
127	白磁杯	口縁部	I-A-1	14~15C	47-6	83-5	口径約8.5cm
128	白磁皿	底部	I-B-1	15C	47-7	83-18	底径約3.4cm
129	染付皿	3/4	II-A-14とB-14の境	16C	47-29	86-1	口径9.8cm, 底径3.7cm, 器高2.6cm
130	青磁碗	口縁部	IV区2号住居址伊状遺構	14C	—	90-6	口縁部があずかに外反し、口部に沈線が走る

[山茶碗・小皿]

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
131	山茶碗	底部	I-B-1	13後~14C前?	—	83-16	
132	山茶碗	胴~底部	II-B-14土間状遺構面上	13C前	47-30	85-11	東渡? 底径約7cm
133	山茶碗	底部	II-A-12	14C中	47-31	85-10	東渡産、大畑大割 底径約4.8cm
134	山茶碗	口縁部	III区	14C	—	88-4	
135	小皿	口縁部	III区	13C前	—	88-8	
136	山茶碗	口縁部	IV区1号住居址	14C	—	102-1	東渡産 大畑大割
137	山茶碗	完整	IV区2号住居址伊状遺構	13C後	48-9	3	東渡産 器高5.1cm、口径13.6cm、底径5.1cm 昭和
138	山茶碗	胴部	IV区遺構外	13~14C	—	102-2	2号・3号住居址の中間より出土

[片口鉢]

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
139	片口鉢	胴部	I-B-1	—	—	83-15	
140	片口鉢	胴下部	I-A-2	—	—	—	
141	片口鉢	口縁部	I-B-1	13C?	—	83-2	
142	片口鉢	口縁部	I-B-2	13~14C?	—	99-2	
143	片口鉢	口縁部	II-A-12	13C後	—	85-1	中津川産
144	片口鉢	口縁部	II-B-14	13C後	—	85-3	中津川産
145	片口鉢	胴部	II-B-14	13C後?	—	100-2	中津川産
146	片口鉢	口縁部	II-A-13	—	—	85-2	中津川産
147	片口鉢	口縁部	II-A-13	13C前	—	100-1	中津川産
148	片口鉢	胴部	II-A-13	13C前	—	—	中津川産
149	片口鉢	底部	III区	—	—	88-6	
150	片口鉢	底部	III区	14~15C	—	88-10	
151	片口鉢	胴下部	III区	—	—	88-3	鉢を鑄として使用か?
152	片口鉢	口縁部	IV区2号住居址	13C	—	102-4	中津川産
153	片口鉢	口縁部	IV区5号住居址	13C後	48-8	102-3	中津川産、口径約30.6cm
154	片口鉢	胴部	IV区遺構外	不明	—	102-5	中津川産
155	片口鉢	胴部	IV区表上中	13~14C	—	102-6	中津川産

[壺]

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備 考
156	壺	胴部	I区	—	—	99-7	中津川産
157	壺	口縁部	I-B-1	13C後	—	99-4	中津川産
158	壺	胴部	I区表径	14~15C	—	99-6	常滑産
159	壺	胴部	I区表径	14~15C	—	—	常滑産
160	壺	胴部	I-B-2	—	—	—	
161	壺	胴部	I-B-2	—	—	—	常滑産
162	壺	—	I-B-2	—	—	—	
163	壺	—	I-A-2	—	—	—	
164	壺	底部	I-B-2	14~15C?	—	99-8	常滑? 外面と内面にスス付着
165	壺	胴部	II-A-12	江戸	—	101-1	常滑産
166	壺	胴部	II-A-12	—	—	—	
167	壺	胴部	II-A-12	江戸	—	—	常滑産
168	壺	胴部	II-A-12	—	—	85-15	
169	壺	胴部	II-A-12	—	—	101-2	常滑産
170	壺	口縁部	II-B-14	13C~14C	—	85-12	常滑産

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備考
171	甕	胴部	II-B-14	14C	-	85-13	中津川
172	甕	小破片	II-A-12	?	-	-	-
173	甕	胴部			-	101-3	常滑産
174	甕	胴部	II-A-12		-	101-4	中津川産
175	甕	胴部	II-A-12		-	101-5	中津川産
176	甕	胴部	II-A-12		-	85-16	常滑産
177	甕	III区			-	88-9	
178	甕	胴部	IV区1号住居址底部	14~15C	-	103-6	常滑産
179	甕	胴部	IV区1号住居址	不明	-	103-7	常滑産
180	甕	胴部	IV区1号住居址底部	14~15C	-	103-8	常滑産
181	甕	胴部	IV区1号住居址	13~14C	-	103-4	中津川産
182	甕	胴部	IV区2号住居址	不明	-	103-3	中津川産
183	甕	胴部	IV区2号住居址	13~14C?	-	103-2	中津川産
184	甕	口縁部	IV区2号住居址	14C前	-	103-1	中津川産
185	甕	胴部	IV区遺構外	15C?	-	103-5	常滑産 調査区東隅より出土
186	甕小壺	胴部	IV区3号住居址	不明	-	90-1	
187	甕小壺	胴部?	IV区柱穴38	16~17C	-	90-4	瀬戸・美濃以外の陶器
188	甕?	胴部	V区表土中	近世	-	91-6	常滑産?
189	甕?	胴部	V区表土中	不明	-	-	
190	水甕?	口縁部	V区表土中	19C	-	91-1	在池産? 淡い緑白色の釉がかかる

[中世土器]

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備考
191	内耳鍋	口縁部	I-A-1	近世	-	99-5	
192	内耳鍋		I-B-2		-	-	
193	内耳鍋		I-B-2		-	-	
194	内耳鍋	胴部	II-B-14		-	-	
195	内耳鍋	口縁部	II-A-14		-	101-6	
196	内耳鍋	口縁部	II-A-12		-	101-9	
197	内耳鍋	底部	II-A-12		-	-	
198	内耳鍋	胴部	II-A-12		-	101-12	
199	内耳鍋	底部	II-B-14		-	101-11	
200	内耳鍋	胴部	II-B-14		-	101-10	
201	内耳鍋	口縁部	II-B-14 床面上		47-32	101-7	口径約22cm
202	内耳鍋	口縁部	II-A-12		-	-	
203	内耳鍋	口縁部	II-B-14		-	101-8	耳つき
204	甕?	胴部	III区	中世	-	88-7	
205	土器皿	口縁部	IV区1号住居址	不明	48-7	104-8	口径約12.4cm
206	内耳鍋	底部	IV区3号住居址床面	不明	-	104-7	
207	内耳鍋	胴部	IV区柱穴45	不明	-	104-6	柱穴上部より出土
208	内耳鍋	口縁部	IV区表土中	不明	-	104-5	

III区にはほかに内耳鍋小破片28点あり

[染付]

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備考
209	染付皿	高台部	V区表土中	近世	-	91-3	肥前産 直径約15cm

[その他の土器]

No	名称	部分	出土場所	年代	図No	写真No	備考
210	縄文土器片	胴部破片4点	III区耕作土	不明	-	-	産地多く時代不明
211	深鉢形土器	底部欠	V-A-8・9 地	縄文中期~中葉	49	119	
212	縄文土器土製円板	全形	V-A-9 遺層中	不明	-	102-7	表面磨滅、糸痕文? 4.0×3.7×1.0
213	縄文土器片	破片5点(内口縁部1点)	V-A-9 遺層中	不明	-	102-8	最大2.0×2.0×0.5
214	壺形土器	胴部	IV区5号住居址東壁際	弥生後期末	-	104-4	雲母・粉の長石が混じる
215	土器器?	胴部	IV区土坑9	6代~中世	-	104-2-3	厚さ5mmほど
216	鉢形土器	口縁部	IV区2号住居址南遺構外	中世?	-	104-1	口縁直下の内外ともに口縁に平行した1条の花線が走る。口縁は丸い。外面には幅4cmほどで3~5枚の浅い溝のある工具で削行整形痕がある。内面は横位の整形。胎土は長石の多い黄褐色。器表面はざらつき、あれている。

No.	名称	部分	出土場所	年代	図No.	写真No.	備 考
217	土師器?	-	V区溝状遺構	古代~中世	-	102-9	土器に青曲面がないため部分不明
218	土師器?	-	V区溝状遺構	古代~中世	-	102-10	土器に青曲面がないため部分不明

[石製品・石器]

No.	名称	出土場所	図No.	写真No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備 考
219	不明石製品	I-B-1	41-11	99-1	4.2	3.9	0.6	18	水成岩を平らに削る 中央付近に1孔
220	石匙	II-B-12ローム上	42-12	94-11	9.1	5.7	1.6	75	蔵文
221	牛鹿製石斧	II区耕作土	42-13	106-9	7.5	4.0	2.0	57	蔵文
222	コモテ石	II区耕作土	46-18	106-18	14.5	4.6	3.5	418	棒状の礫を使用 中世?
223	コモテ石	II区耕作土	46-19	106-19	15.7	5.8	3.6	485	棒状の礫を使用 中世?
224	コモテ石	II区耕作土	46-20	106-20	13.3	4.3	3.4	345	棒状の礫を使用 中世?
225	コモテ石	II区耕作土	46-13	106-13	13.6	3.7	3.4	325	棒状の礫を使用 中世?
226	コモテ石	II区耕作土	46-14	106-14	12.6	5.8	2.8	365	棒状の礫を使用 中世?
227	コモテ石	II区耕作土	46-16	106-16	12.5	5.7	4.1	410	棒状の礫を使用 中世?
228	コモテ石	II区耕作土	46-17	106-17	14.5	4.5	2.8	315	棒状の礫を使用 中世?
229	不明石製品	II区耕作土	46-10	106-10	9.5	4.1	2.0	140	棒状の礫を使用 中世?
230	不明石製品	II区耕作土	46-11	106-11	12.7	4.1	1.7	170	棒状の礫を使用 中世?
231	不明石製品	II区耕作土	46-15	106-15	11.5	4.3	2.5	225	棒状の礫を使用 中世?
232	不明石製品	II区建物跡床面	46-1	94-1	6.0	5.5	1.4	72	円形の礫を使用 中世?
233	不明石製品	II区耕作土	46-2	94-2	4.6	4.1	1.3	33	円形の礫を使用 中世?
234	不明石製品	II区耕作土	46-4	94-4	3.7	3.7	1.0	21	円形の礫を使用 中世?
235	不明石製品	II区耕作土	46-3	94-3	4.0	3.3	0.7	19	円形の礫を使用 中世?
236	不明石製品	II区耕作土	46-5	94-5	4.5	3.7	0.9	25	円形の礫を使用 中世?
237	不明石製品	II区耕作土	46-12	106-12	12.6	3.9	1.2	110	縦打で半分に割る 中世?
238	砥石	II区表掘	-	94-10	8.5	5.0	2.0	125	
239	砥石	II区耕作土	46-21	107-6	18.6	4.4	3.2	310	
240	砥石	II区耕作土	46-9	94-9	(7.0)	2.5	1.5	41	
241	砥石	II区耕作土	46-6	94-6	(4.2)	2.5	1.5	26	
242	砥石	II区耕作土	46-7	94-7	(8.3)	3.6	1.6	66	
243	砥石	II区耕作土	46-8	94-8	(7.0)	3.6	2.1	56	
244	磨り石	II区建物跡床面	41-13	94-13	5.9	4.5	0.9	50	磨痕半分
245	磨り石	II区建物跡床面	41-12	94-12	4.1	3.0	0.3	10	磨痕半分
246	打製石斧	III区柱穴11	42-14	94-14	9.4	4.3	1.3	71	蔵文
247	打製石斧	IV区5号住居址	42-15	107-5	10.0	9.0	2.1	195	劣劣
248	不明石製品	IV区5号住居址	42-16	107-4	6.9	6.0	1.7	140	石鏝とも思われるが明確な加工痕がなく、自然の石に近い
249	砥石	IV区1号住居址	48-10	107-1	(7.2)	3.2	1.6	73	平欠
250	砥石	IV区2号住居址炉状遺構	48-11	107-2	(13.2)	5.4	3.6	426	平欠 中央部が半分ほどに磨り減っている
251	自然礫	IV区2号住居址炉状遺構	-	107-3	17.6	13.5	6.0	1780	小さな鉄滓が2ヶ所に付着
252	砥石剥片	IV区3号住居址	48-12	108	3.0	1.3	0.4	-	
253	砥石剥片	IV区5号住居址	48-13	108	4.0	2.0	0.2	-	
254	尖頭鏝	V-A-3	41-9	92	6.2	3.5	1.5	30	オイルシール製
255	二次加工のある剥片	V-A-3	41-10	93	3.0	1.0	1.1	4	黒曜石製 尖頭二次加工

[金属製品・鍛冶関連遺物]

No.	名称	出土場所	図No.	写真No.	備 考 (数値の単位はcm)
256	鍔釘	I-B-1	-	95-4	1枚、判読不能
257	鉄釘	I-B-1 南端耕作土中下層	-	112-1	長さ3.7
258	鉄鏝?	II-A-13耕作土中	-	112-3	4.9×2.0×0.3
259	鑢状鉄製品	III-B-1	49-2	112-2	長さ8.3
260	不明鉄製品	IV区3号住居址	48-14	113-2	6.7×2.6×0.9
261	鉄片	IV区3号住居址	48-15	113-3	
262	鍔釘	IV区柱穴146	-	95-3	
263	鉄釘	VI区溝状部	-	113-5	
264	鉄滓	IV区2号住居址炉状遺構	-	113-1	7.5×5.2×2.1 焼砂滓
265	鉄滓	IV区2号住居址炉状遺構	-	113	3.3×3.0×1.6
266	鉄滓	IV区3号住居址	-	113	3.1×2.4×1.7
267	鉄滓	IV区柱穴153	-	113	5.1×3.4×2.1
268	鉄滓	IV区表土中	-	113	3.7×3.3×1.8
269	鍛造銅片	IV区2号住居址上部遺構	-	114	炉状遺構内の砂から数十片出土
270	鉄釘	V区表土中	-	113-4	西端、2層上層より出土



図11 若森遺跡跡全体図 (1:160)

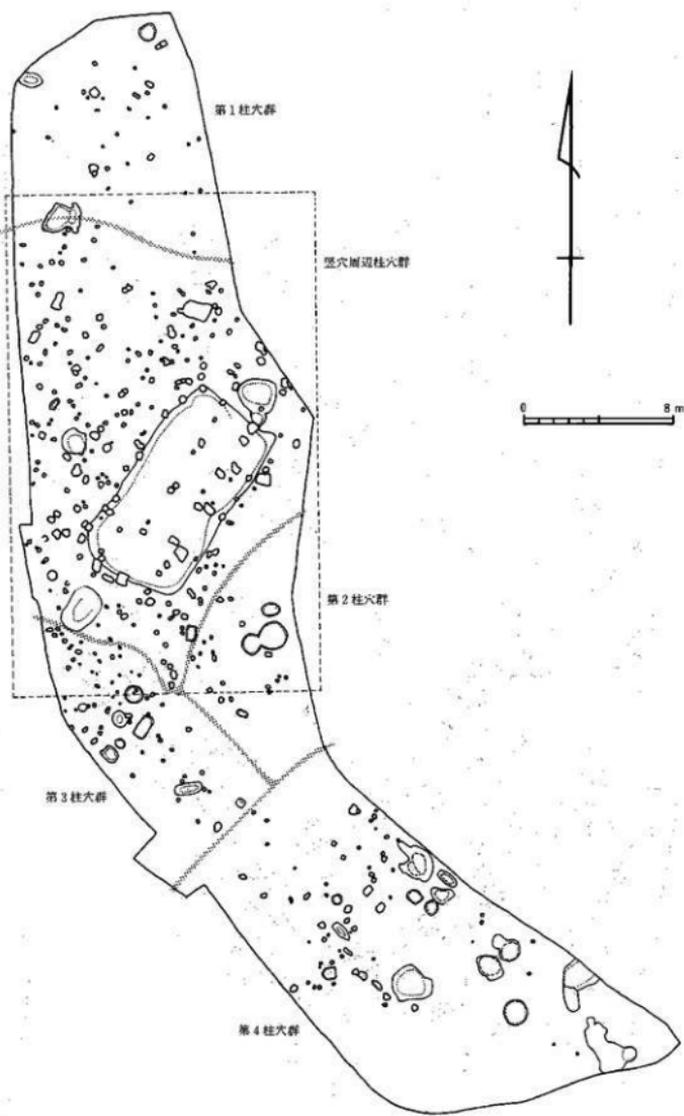


圖12 若森社柱穴群配置圖 (1:260)

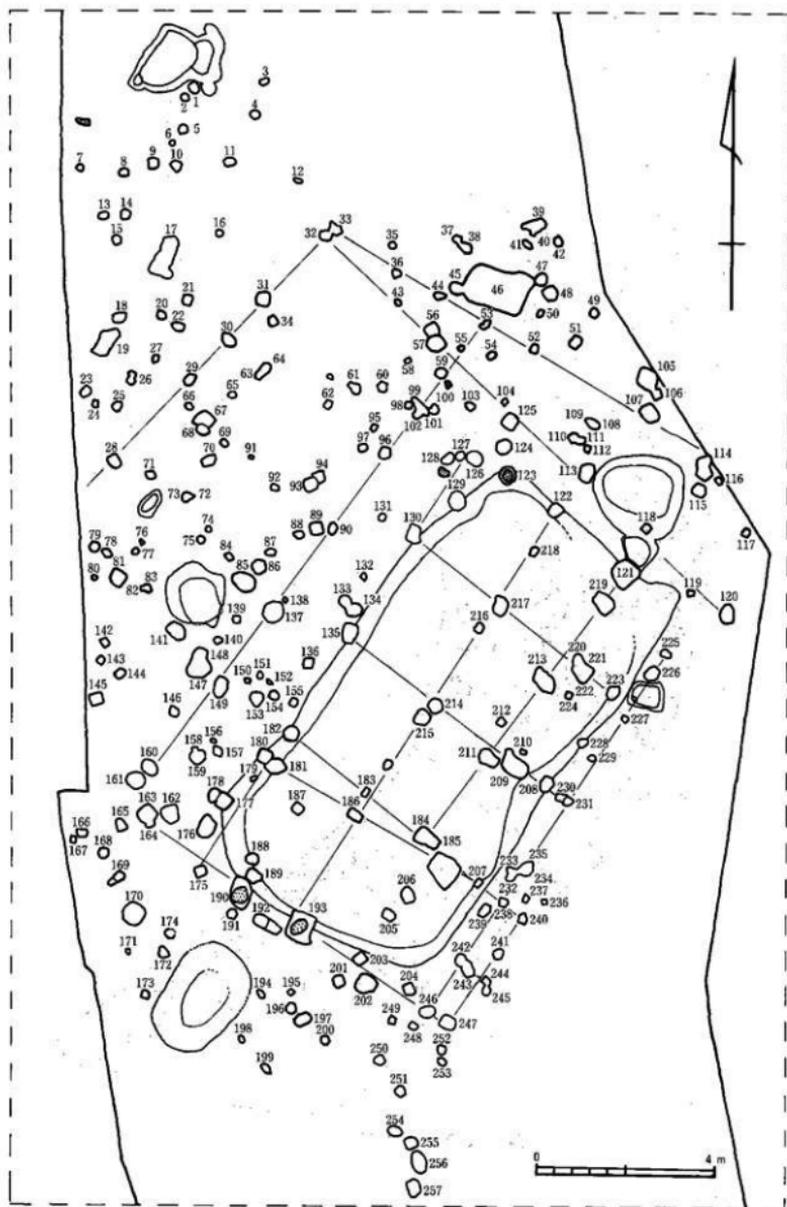
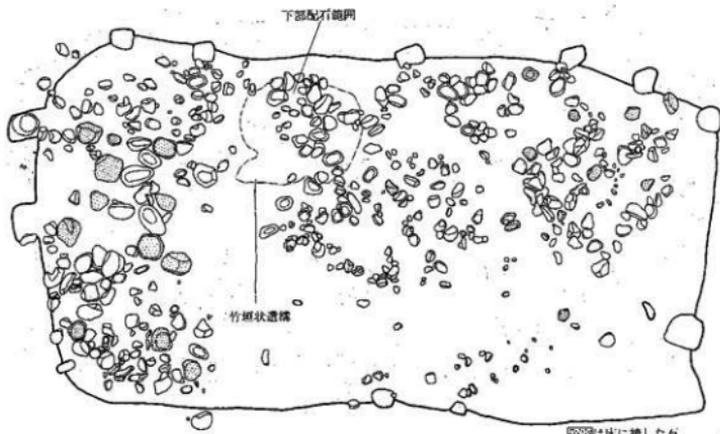
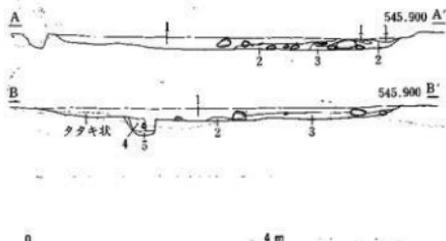
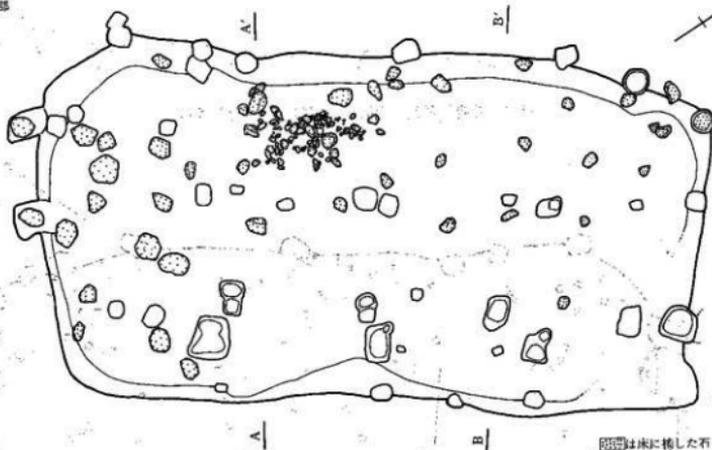


図13 若森社整穴周辺柱穴群柱穴配置図 (1:110.5) □は石 数字は柱穴No

上部



下部



南側

- 1 暗茶褐色土 炭片、ローム粒、焼土粒をわずかに含む。しまりあり。
- 2 黒褐色土 炭片、ローム粒、焼土粒をわずかに含む。しまりがなく、水分を多く含む。
- 3 暗灰褐色土 地山土である灰褐色土に黒土が混じる。しまりがない。

北側

- 1 暗茶褐色土 白い心粒、炭片が混じる。
- 2 赤褐色土 焼けて炭片、灰が混じる。
- 3 炭片、石粒、白い砂と焼けて赤色化した土が混じる。
- 4 灰褐色土 石粒が混じる。中央部の石は焼けてもろい。
- 5 黒褐色土 やわらかい。

図14 若森社竪穴上部・下部配石図 (1 : 80)

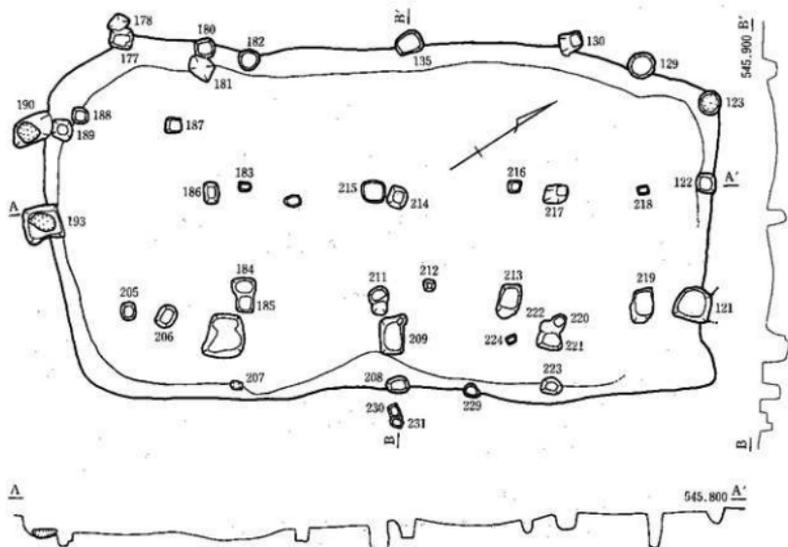


図15 若森社堅穴実測図 (1:80) 数字は柱穴No.

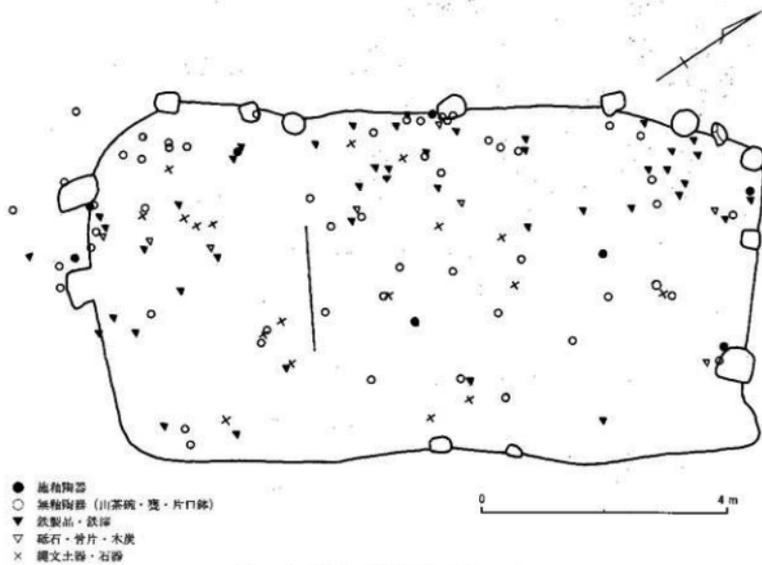


図16 若森社堅穴内遺物分布図 (1:80)

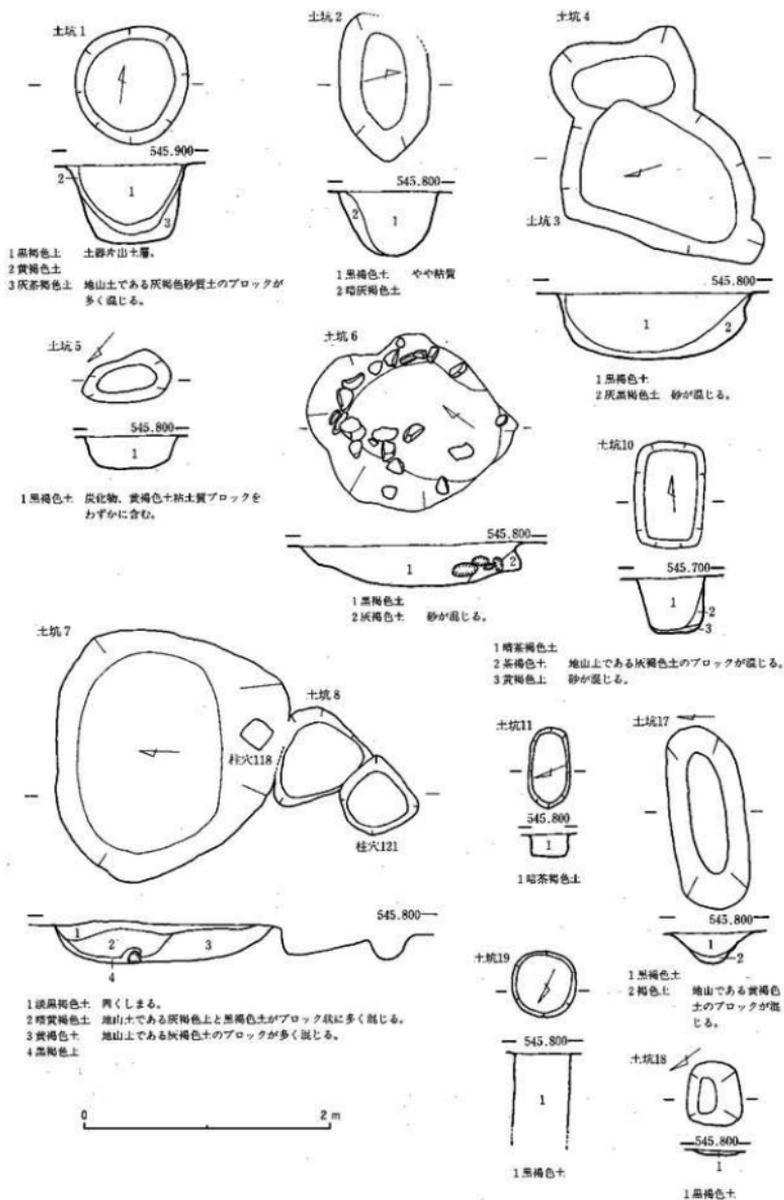


図17 若森社土坑実測図(1) (1:40)

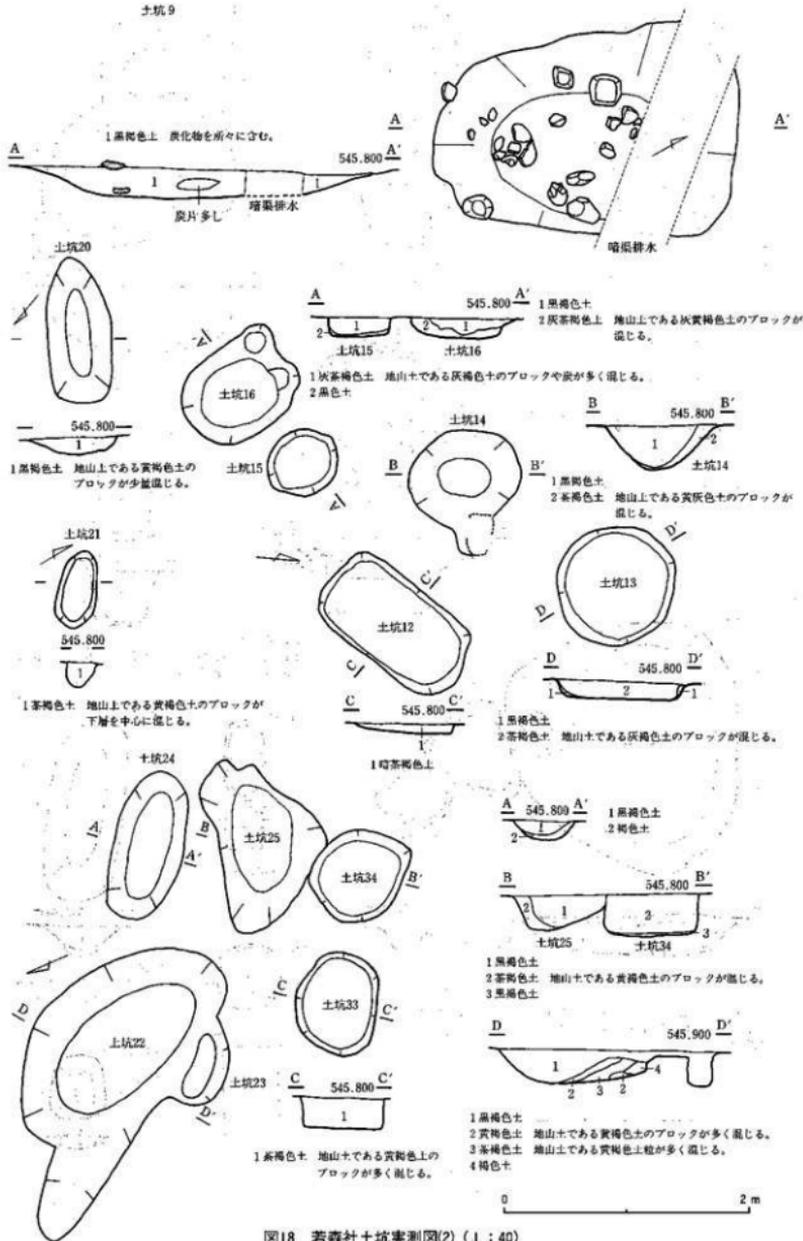
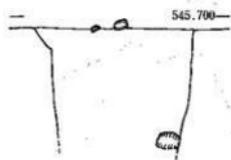


図18 若森社土坑実測図(2) (1:40)

土坑26 (平面図なし)

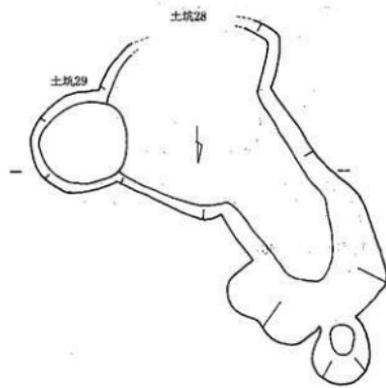


1 黒褐色土 堆山土である黄褐色土のブロックをまばらに含む。水分を多く含む。

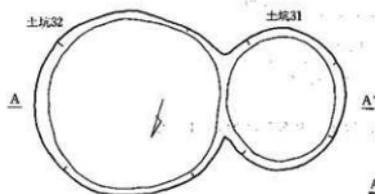
土坑27 (平面図なし)



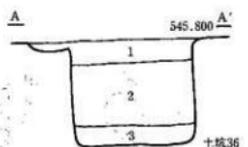
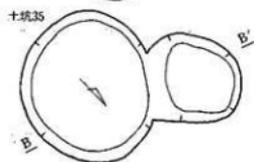
1 暗茶褐色土 堆山土である黄褐色土のブロックを含み、炭、焼土がわずかに混じる。
2 黒褐色土 堆山土である黄褐色土のブロックと炭をおおむね含む。しまりあり。



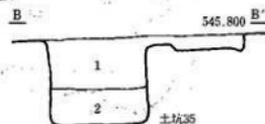
1 暗茶褐色土
2 黒褐色土



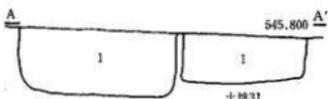
1 茶褐色土 堆山土である黄灰色土のブロックが多く混じる。
2 黒褐色土



1 暗茶褐色土
2 茶褐色土 堆山土である黄褐色砂質土のブロックが多く混じる。
3 黒褐色土



茶褐色土 堆山土である黄褐色土のブロックが多く混じる。
黒褐色土 堆山土である黄褐色土のブロックがわずかに混じる。



1 灰茶褐色土 堆山土である黄灰色土のブロックが多く混じる。

0 2 m

図19 若森社土坑実測図(3) (1:40)

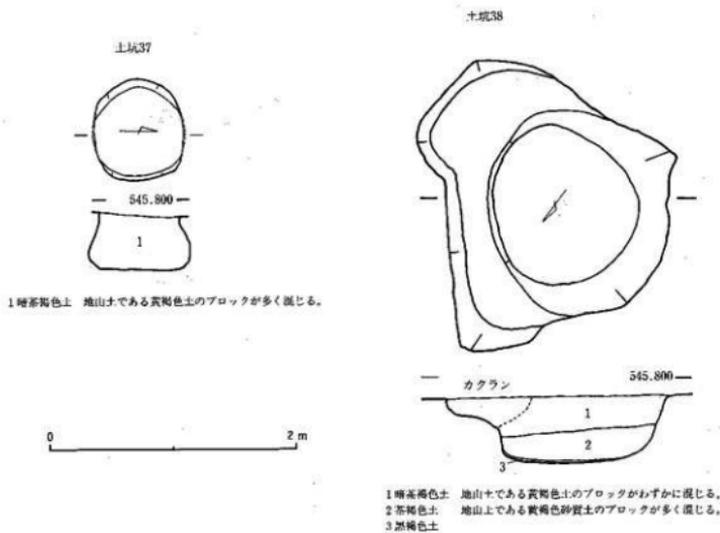


図20 若森社土坑実測図(4) (1:40)

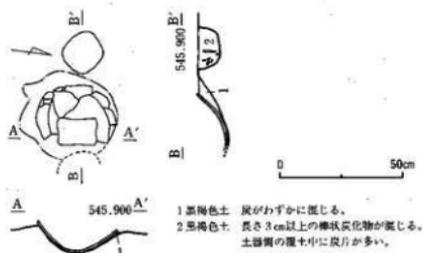


図21 若森社弥生時代の単独出土の埴輪実測図 (1:20)

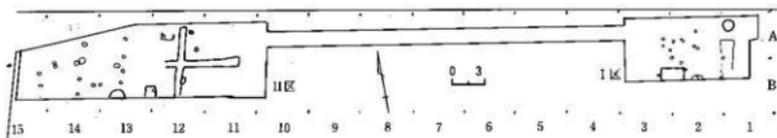


図22 南羽場Ⅰ・Ⅱ区略図(1:480)

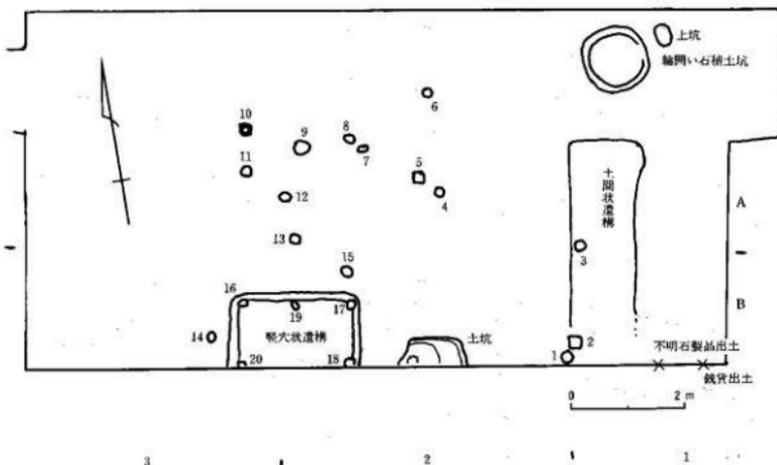


図23 南羽場Ⅰ区実測図(1:87) 遺構内の数字は柱穴No.

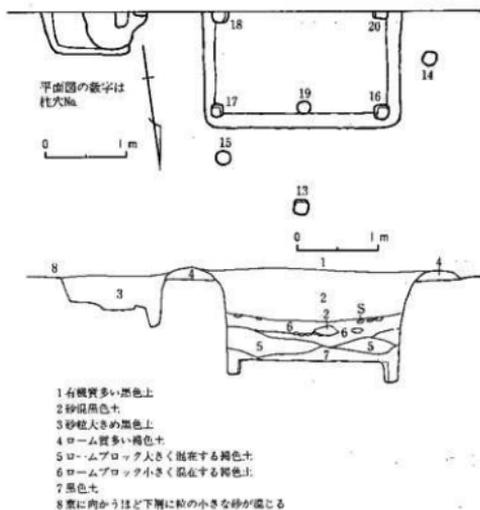


図24 南羽場Ⅰ区輪圍い石積土坑実測図(1:40)

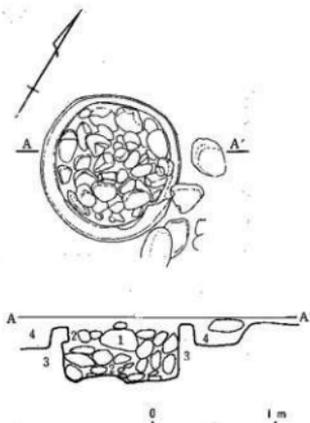


図25 南羽場Ⅰ区堅穴状遺構実測図(1:60)

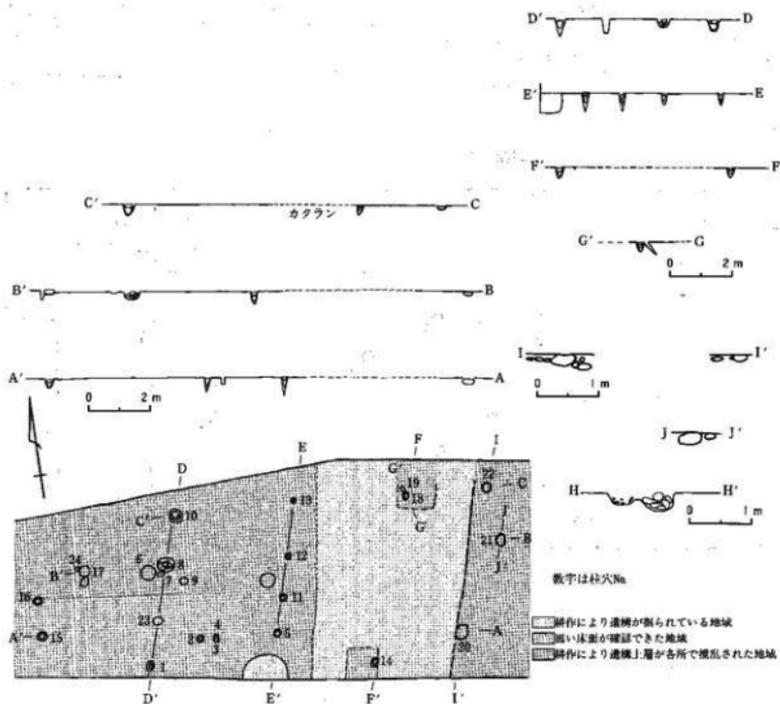


図26 南羽場Ⅱ区建物址実測図および擾乱状態図(1:160)

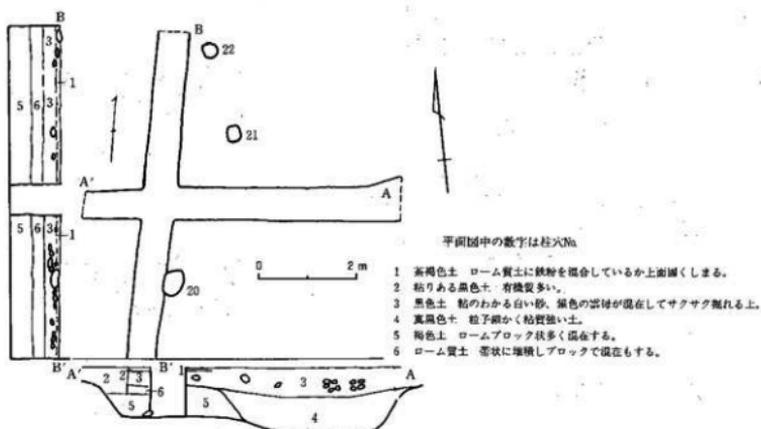


図27 南羽場Ⅱ区壁状遺構実測図(1:100)

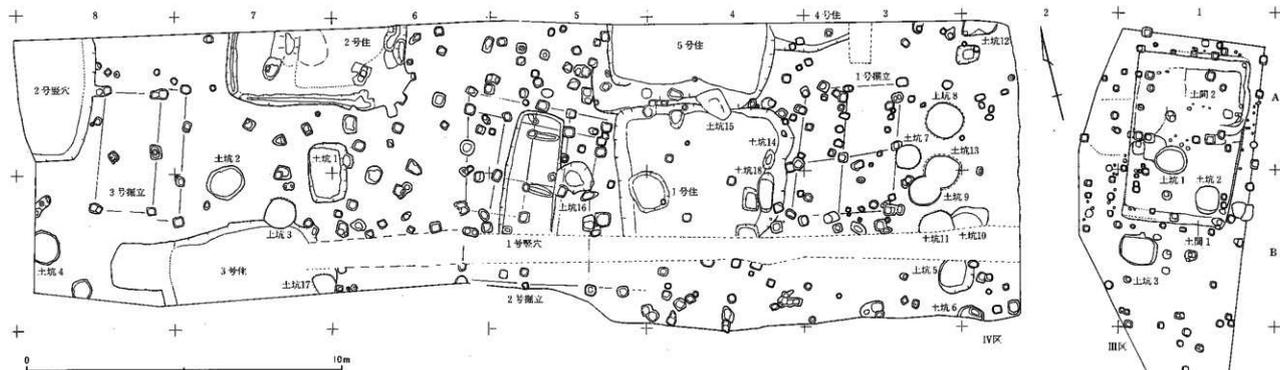


図28 南羽場Ⅲ・Ⅳ区全体図(1:120)

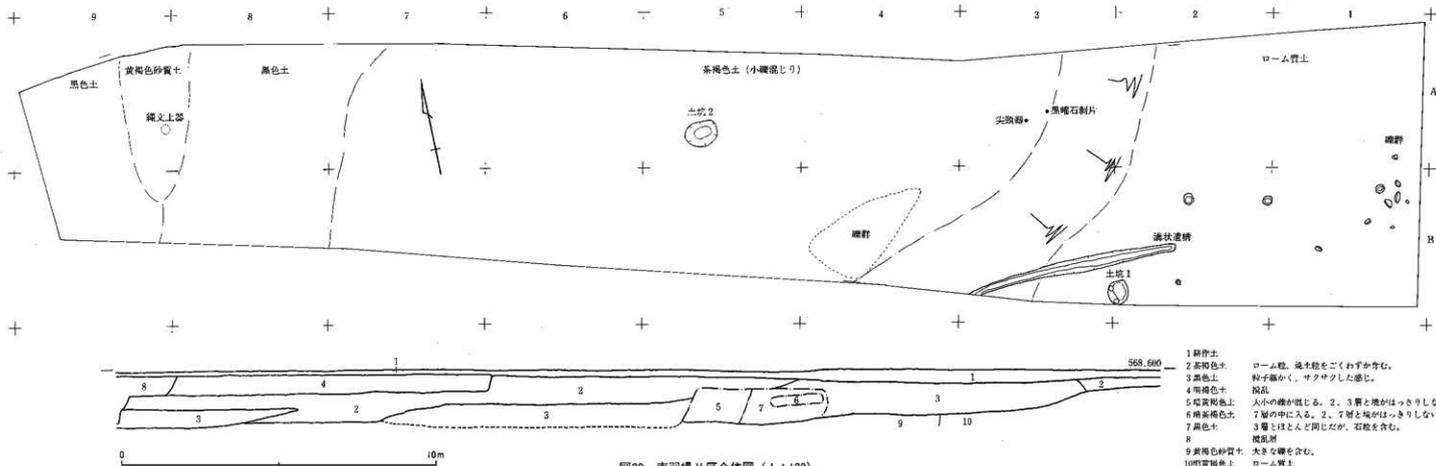


図29 南羽場Ⅴ区全体図(1:120)

- 1 黒骨土
2 黒褐色土 ローム質土
3 黒色土 砂子混みかく、サタサタした感じ。
4 黄褐色土 腐乱
5 黄褐色土 大小の礫が混じる。2、3層と境がはっきりしない。
6 黄褐色土 7層の中に入る。2、7層と境がはっきりしない。
7 黒色土 3層とほとんど同じだが、礫を含まない。
8 黒褐色土 腐乱層
9 黄褐色土 大きな礫を混む。
10 黄褐色土 ローム質土

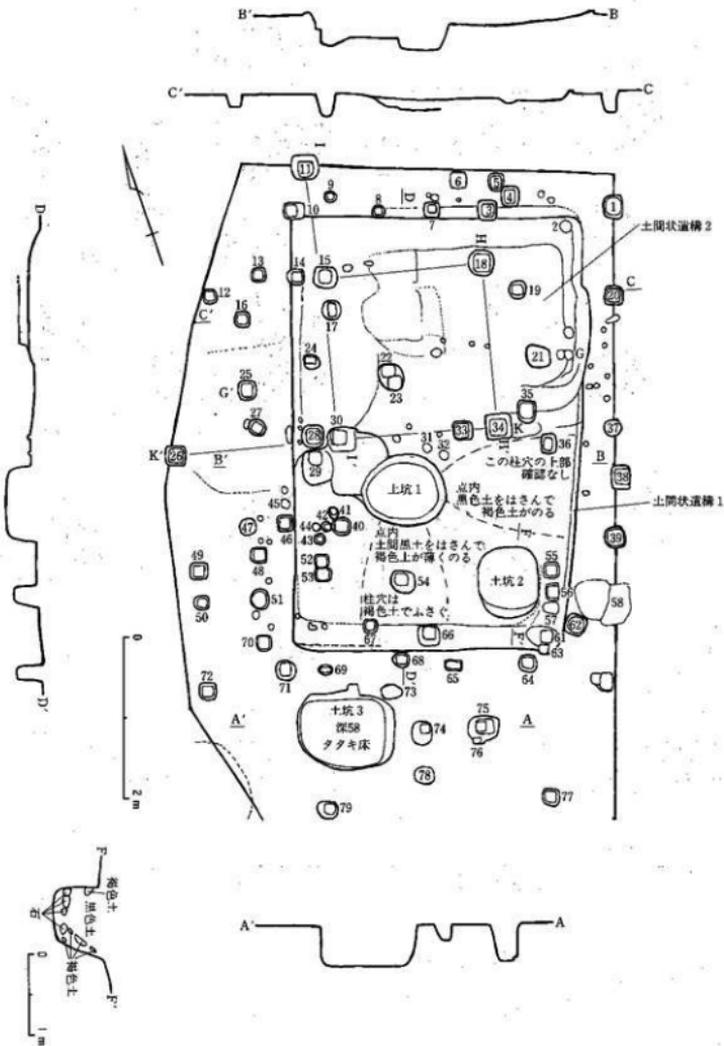


図30 南羽場Ⅲ区土間状遺構と周辺柱穴実測図(1:60); 数字は柱穴No

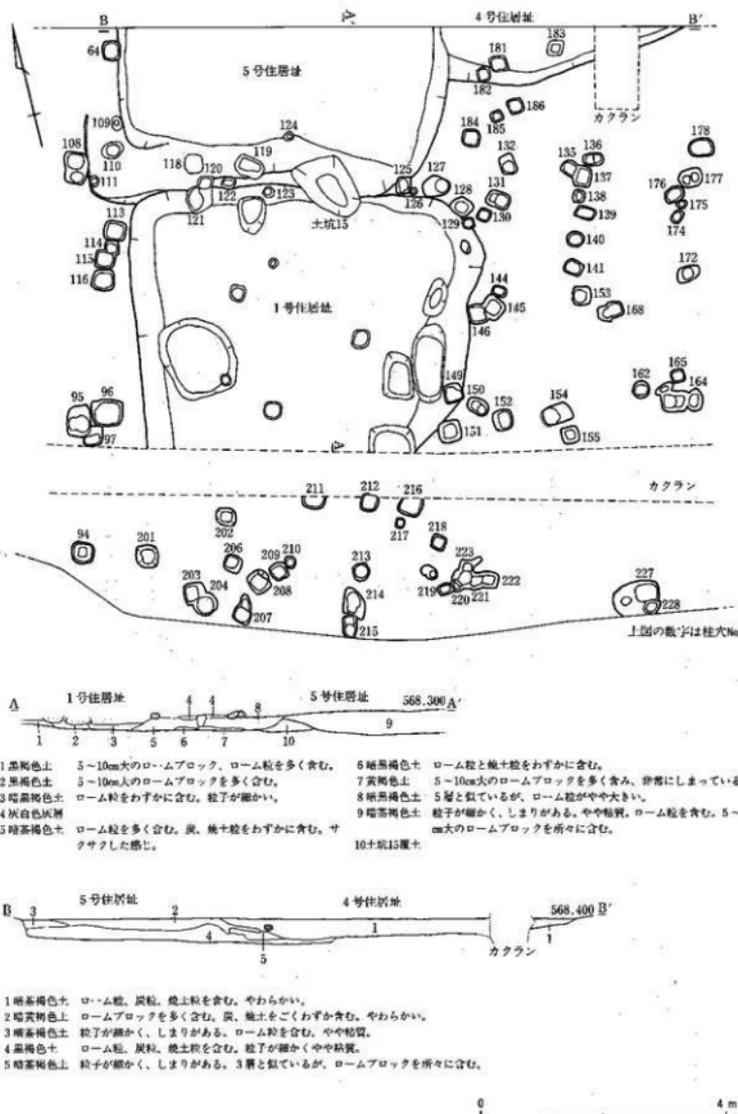


図31 南羽場IV区1・4・5号住居址実測図および周辺柱穴配置図(1:80)

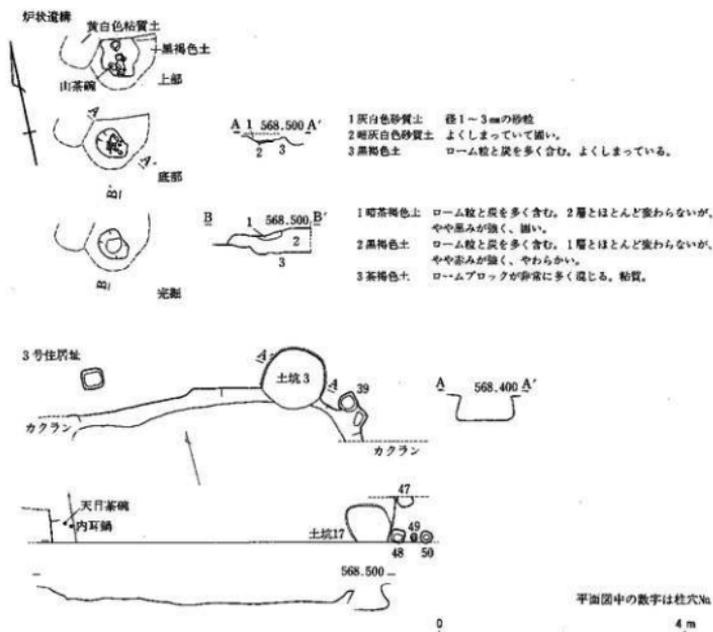
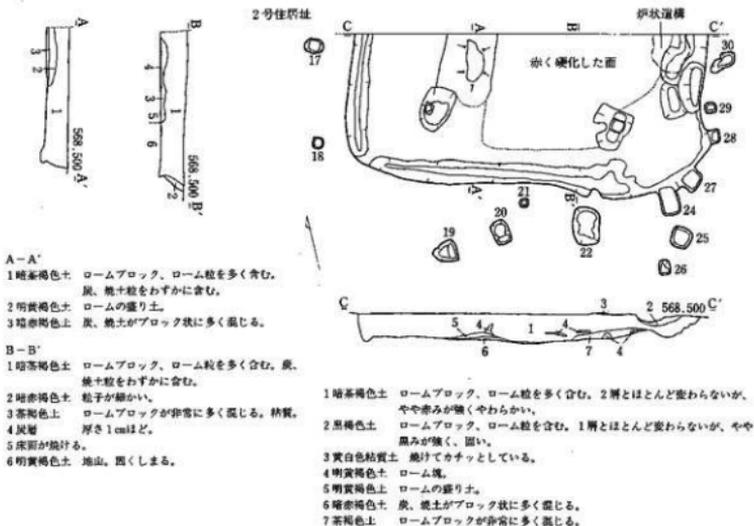
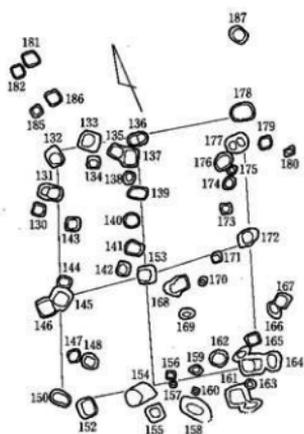
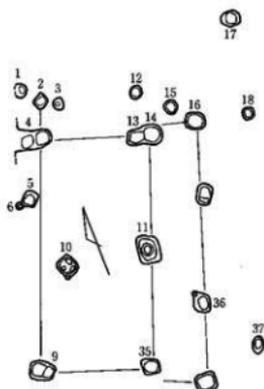


図33 南羽場Ⅳ区2・3号住居址実測図および周辺柱穴・土坑配置図(1:80)

1号獨立柱建物



3号獨立柱建物



2号獨立柱建物

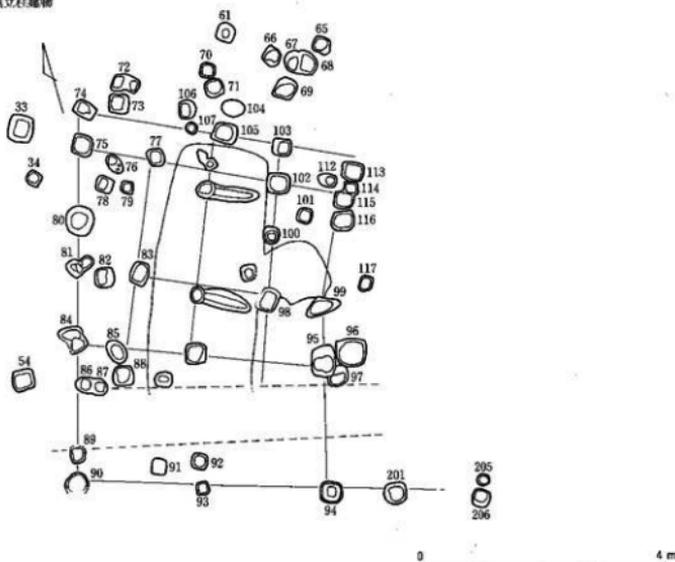
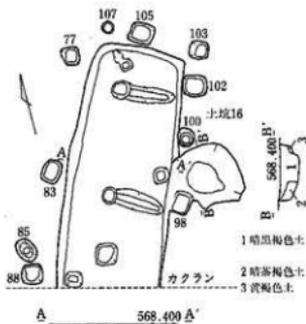


图34 南羽場IV区獨立柱建物実測图(1:80) 数字は柱穴No

1号竪穴状遺構

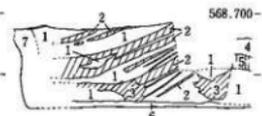
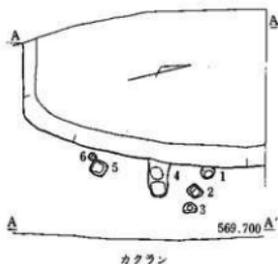


- 1 暗褐色土 粒子細かく、サラサラした感じ。
炭と焼土粒をわずかに含む。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒が多く混じる。
- 3 黄褐色土

- 1 明褐色土 ローム粒、炭粒、焼土粒をまばらに含む。
ロームブロックがごくわずかに混じる。
- 2 黒褐色土 1を切る。



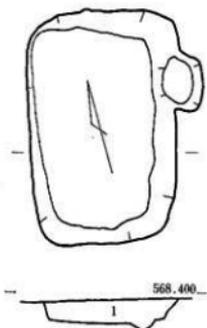
2号竪穴状遺構



- 1 白色砂質土 粒子はやや粗い。
- 2 黒褐色砂質土 粒子が細かく、水分を多く含む、シルトのような感じ。
- 3 暗茶褐色砂質土 粒子は粗い。
- 4 白灰褐色砂質土 粒子は細かい。
- 5 淡茶褐色砂質土 粒子は細かい。1層と2層が細かく混じった感じ。
- 6 暗灰色砂質土 粒子が非常に細かい。水分を多く含む、シルトのような感じ。
- 7 灰茶褐色砂質土 粒子は細かく、炭粒を少量含む。

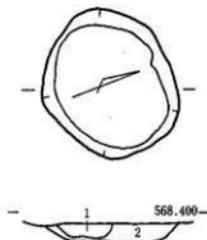
図35 南羽場Ⅳ区竪穴状遺構実測図(1:80) 平面図中の数字は柱穴No.

土坑1



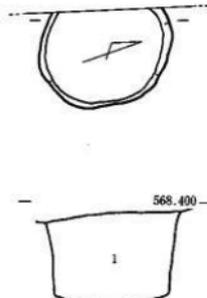
- 1 黒褐色土 ローム粒を多く含む。炭と焼土粒を
わずかに含む。粒子は細かい。

土坑2



- 1 明褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒をまばらに含む。炭と焼土粒を
ごくわずかに含む。

土坑4



- 1 黒褐色土 ローム粒をまばらに含む。炭と焼土粒を
ごくわずかに含む。



図36 南羽場Ⅳ区土坑実測図(Ⅰ)(1:40)

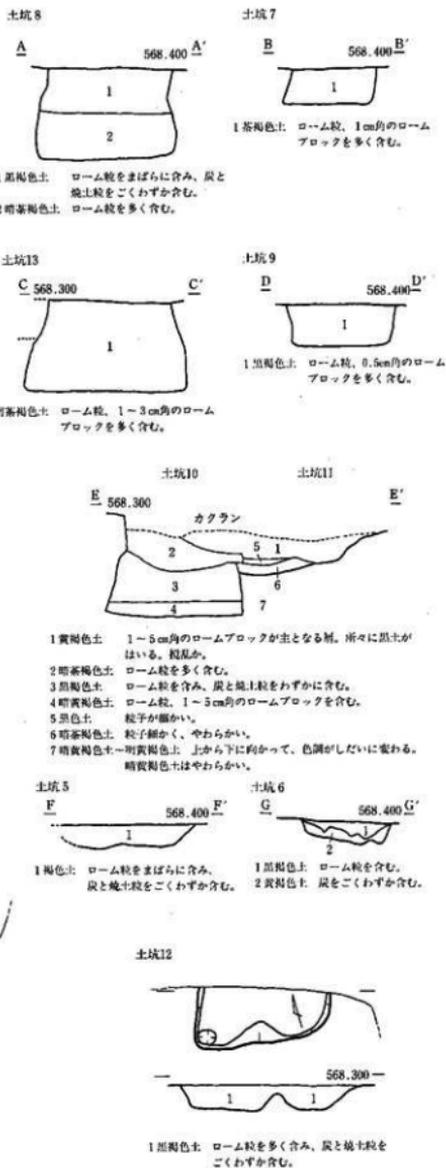
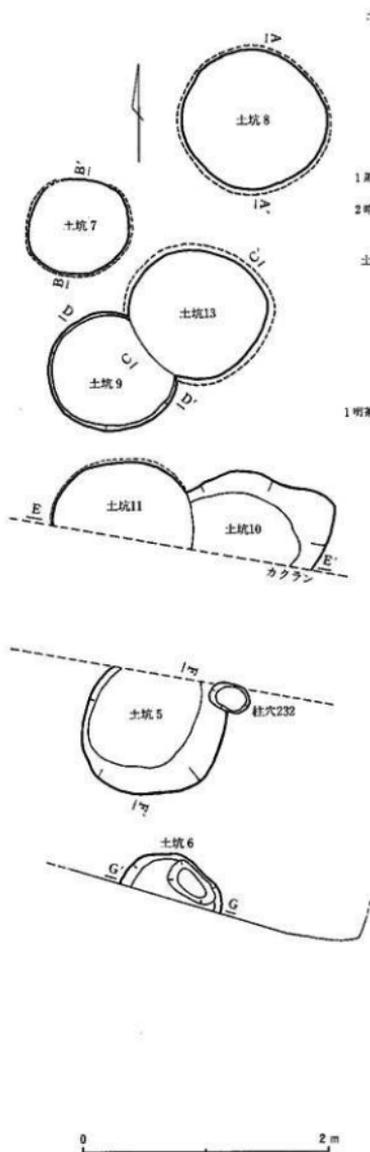


図37 南羽場IV区土坑実測図(2) (1:40)

溝状遺構

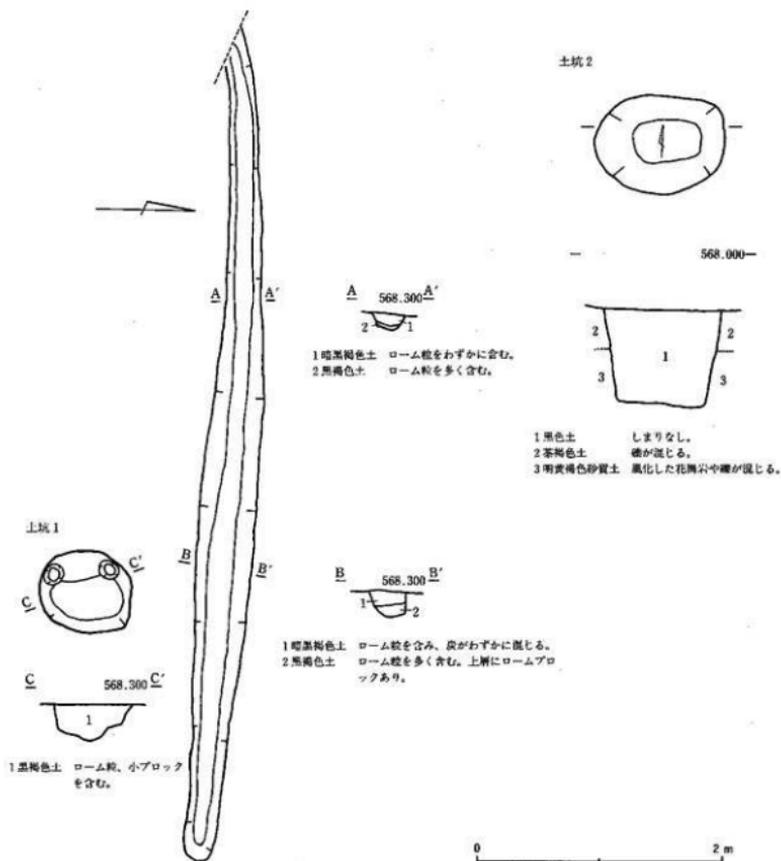


図38 南羽場V区遺構実測図(1:40)

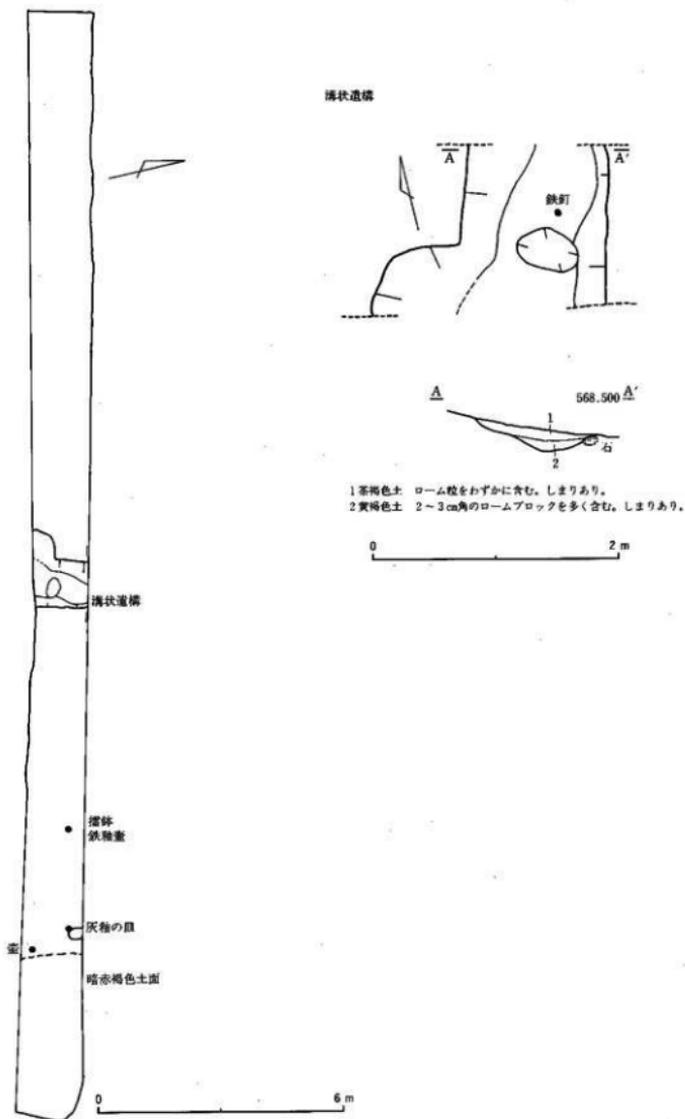


図39 南羽場VI区全体図および遺構実測図 (1:120, 1:40)

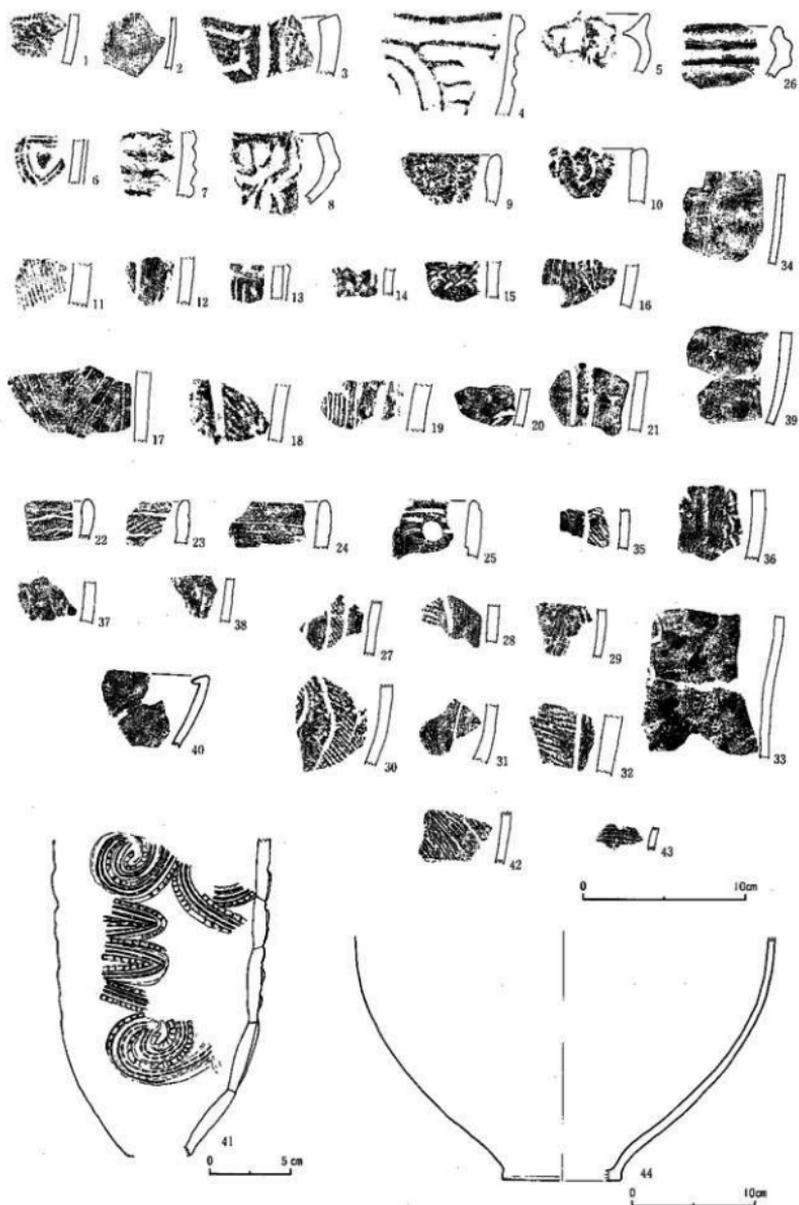


図40 若森社出土土器実測図および拓影(1:3、1:4)

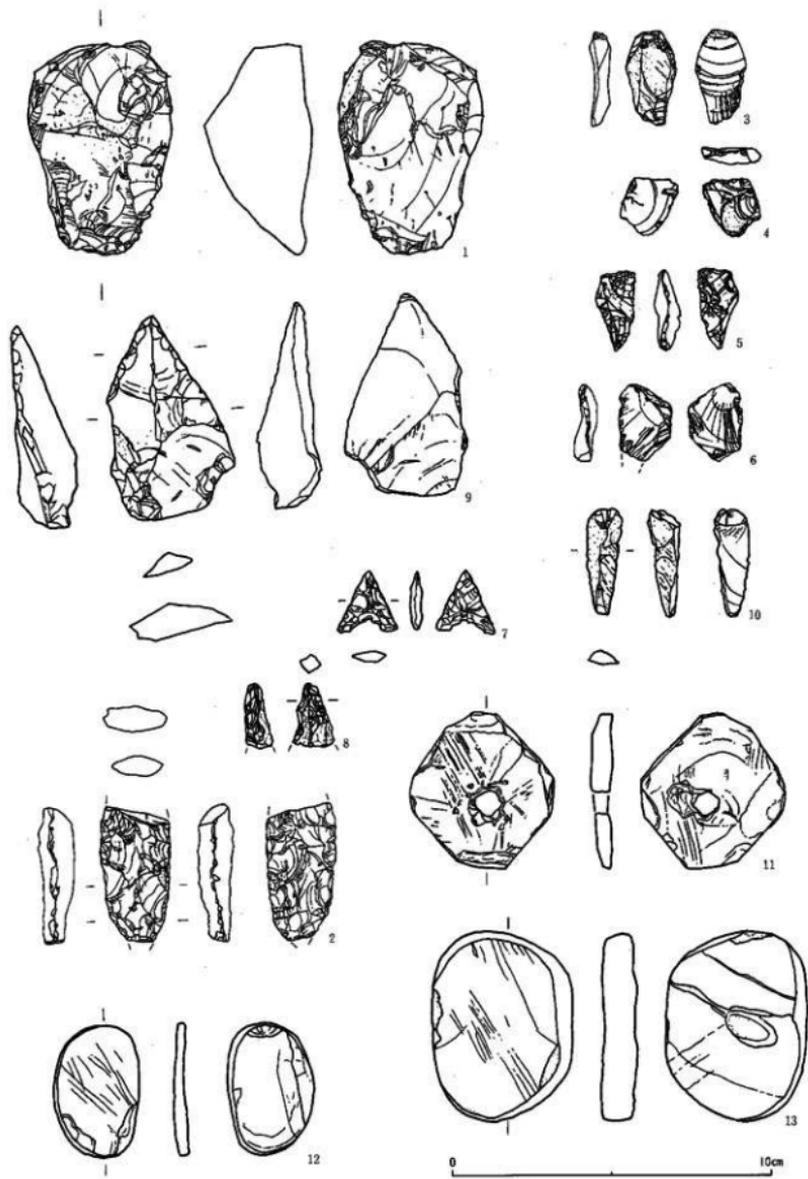


图41 若森社・南羽場出土石器実測图(1) (2:3)

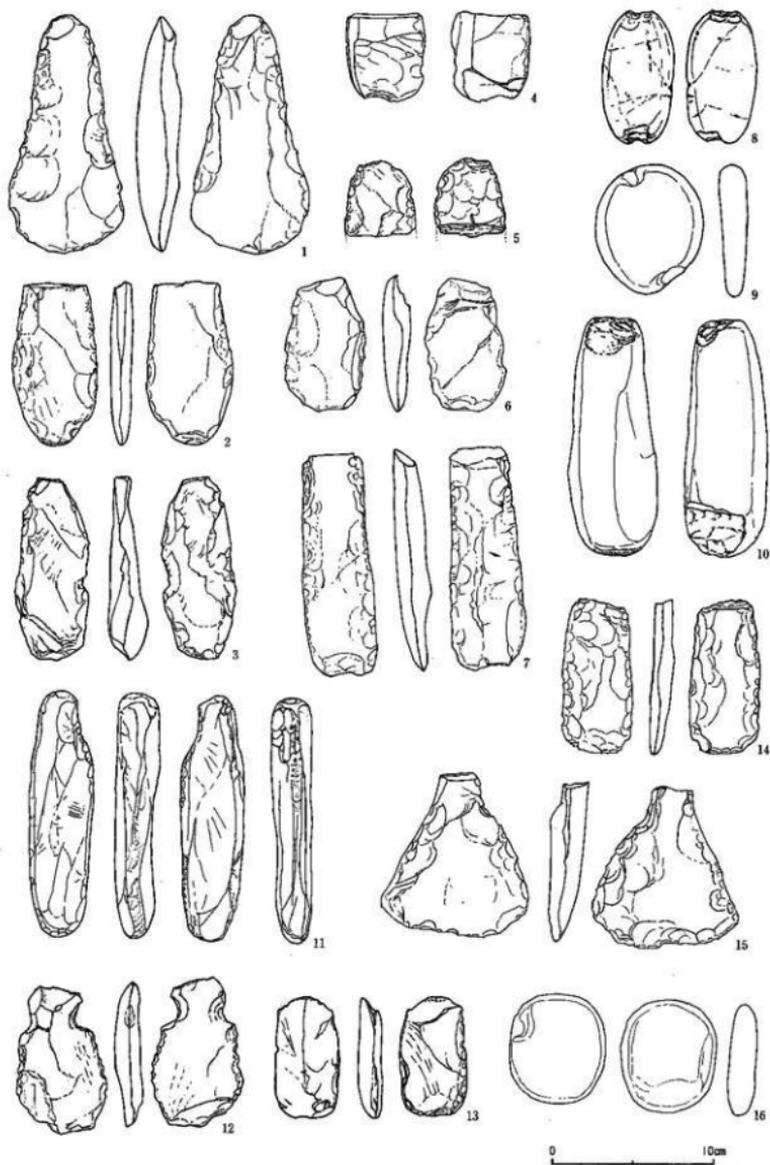


图42 若森社・南羽場出土石器実測图(2) (1 : 3)

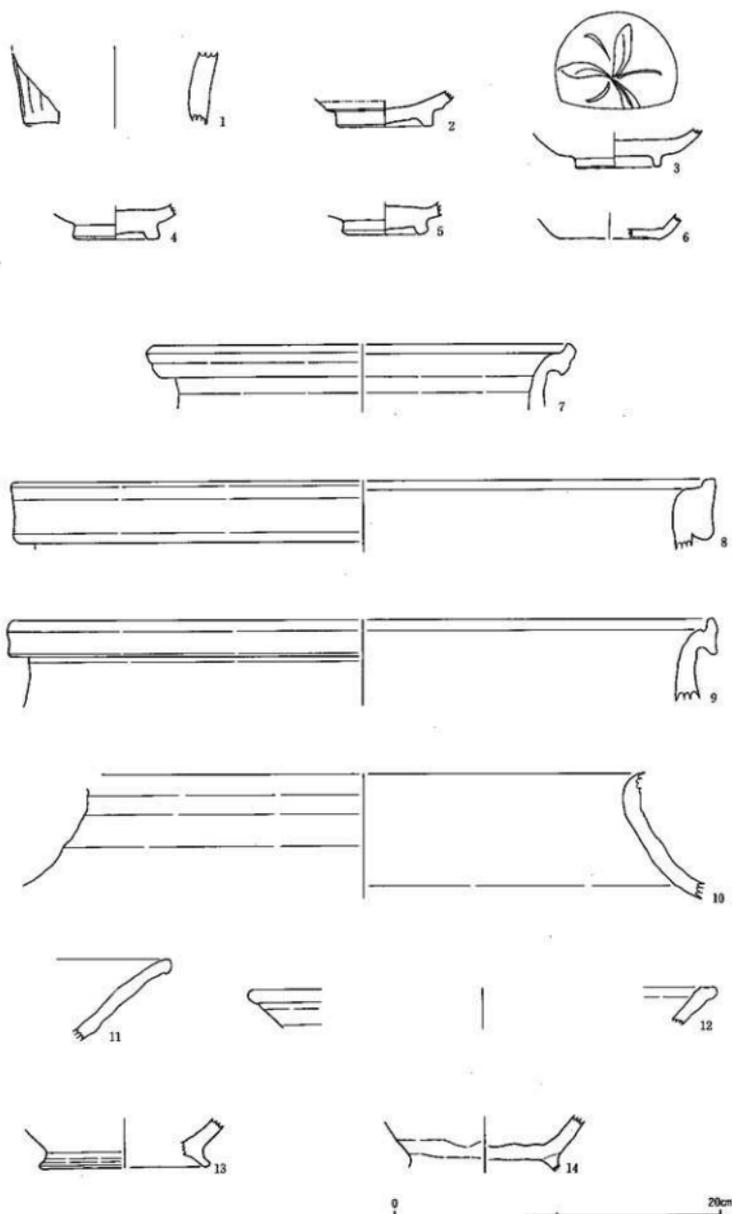


图43 若森社出土陶磁器实测图(1:3)

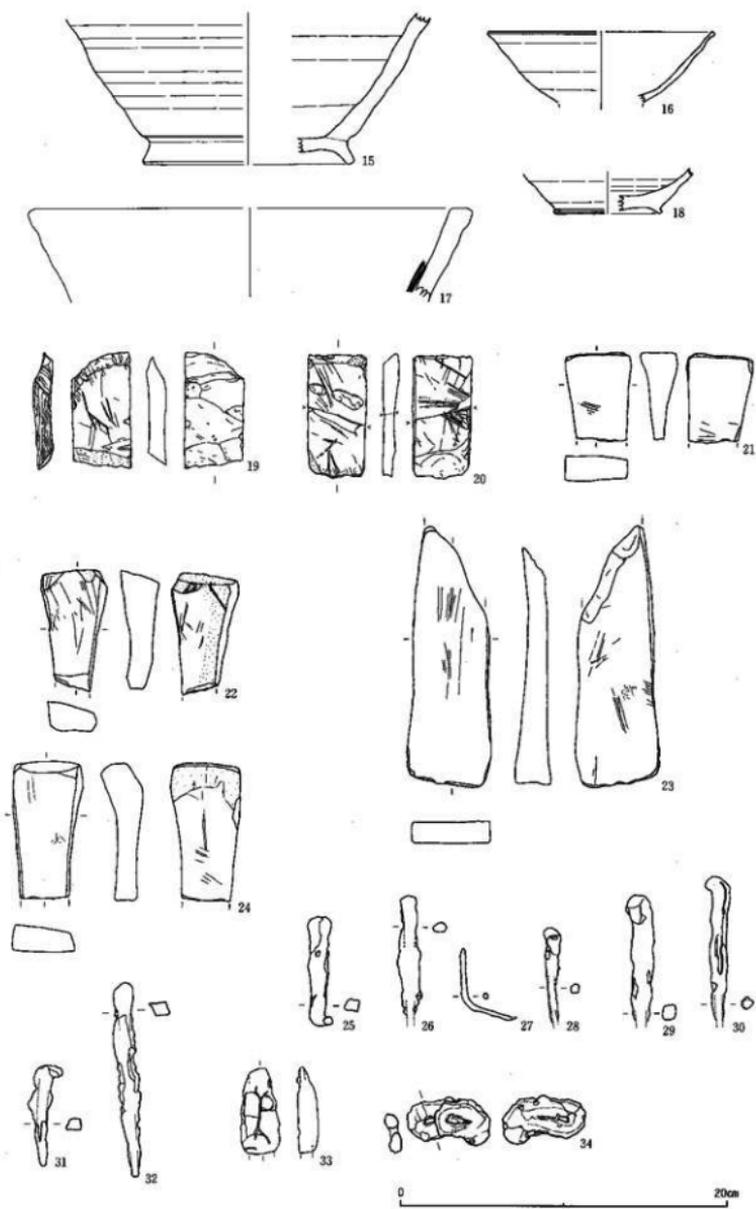


图44 若森社出土陶器・磁石・鉄製品実測図(1:3)



図45 若森社出土鉄製品・阿弥陀塔跡出土陶器実測図(1:3、鏡實のみ1:1)
 35~37若森社 38~41阿弥陀塔

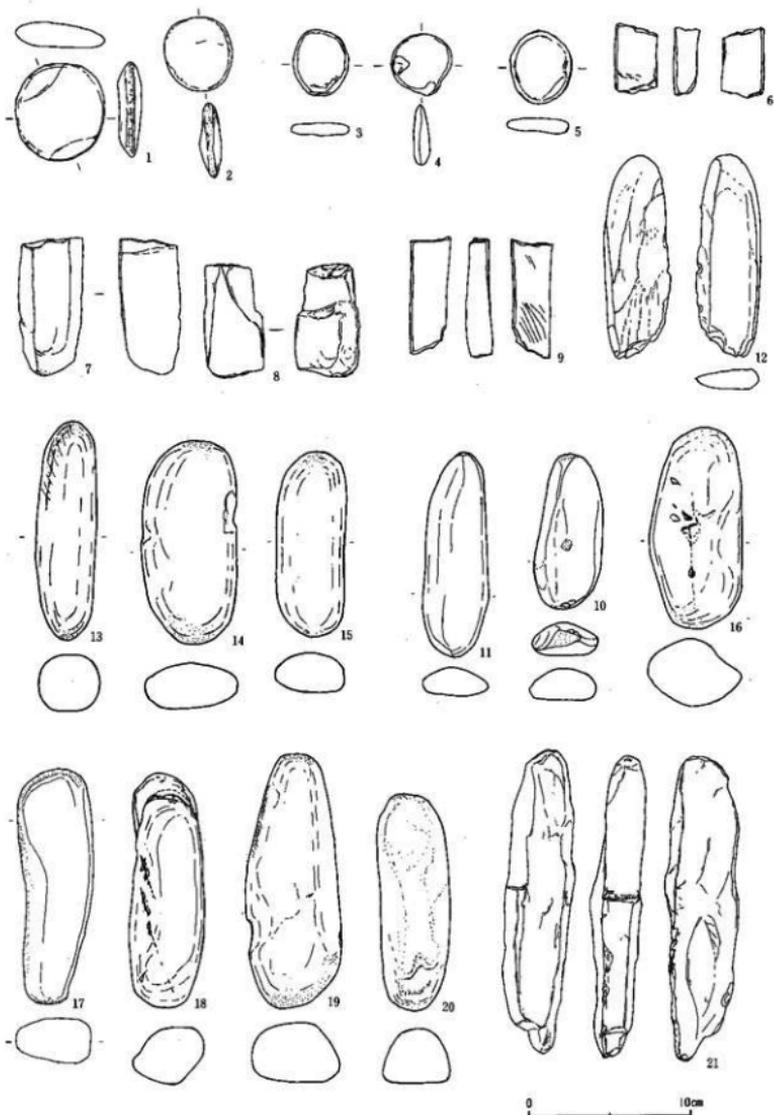


图46 南羽場Ⅱ区出土石器实测图(1:3)

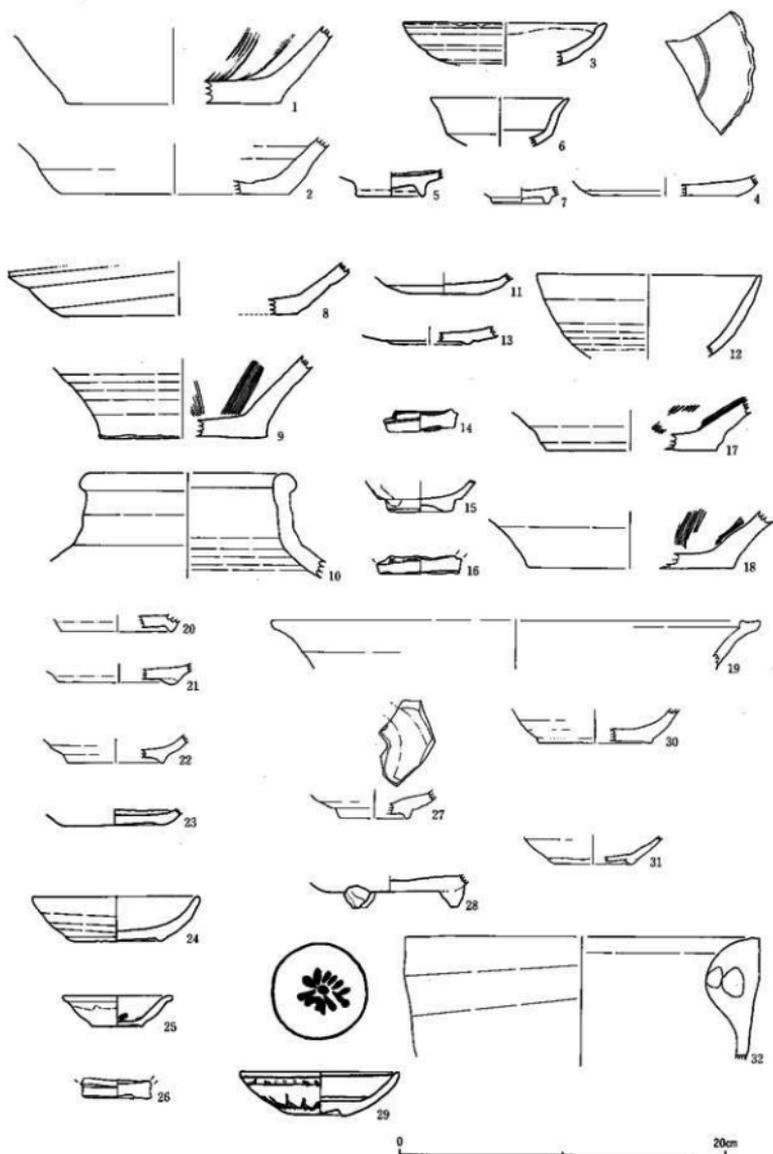


图47 南羽場出土陶器实测图(1:3)
1~7 I区 8~32 II区

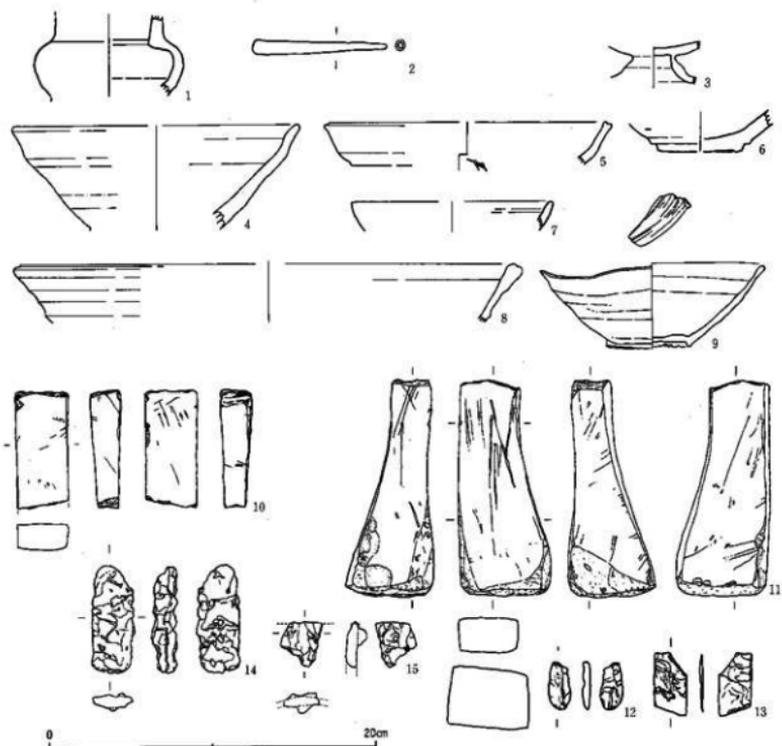


图48 南羽場出土陶器・磁石・鉄製品実測図(1:3)
1・2 III区 3 V区 4~15 IV区

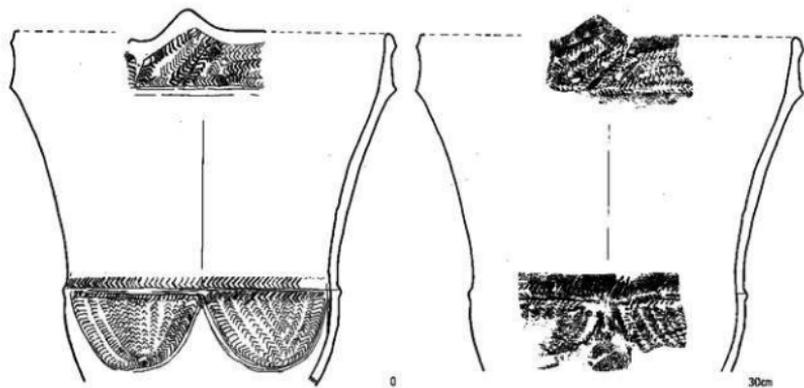


图49 南羽場V区出土縄文土器実測図(1:4)

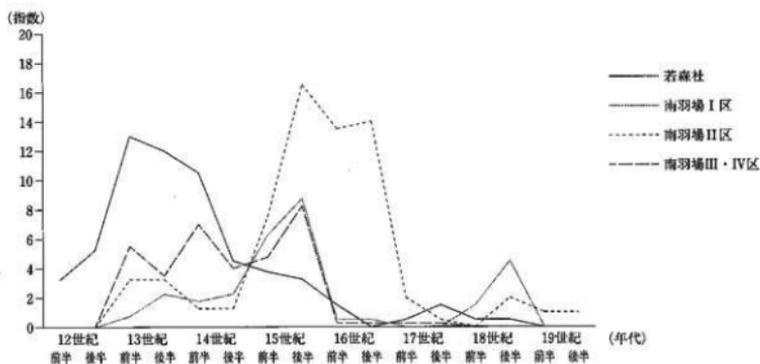


図50 各調査区の年代別遺物指数 時代の判明する陶磁器のみを基に作成

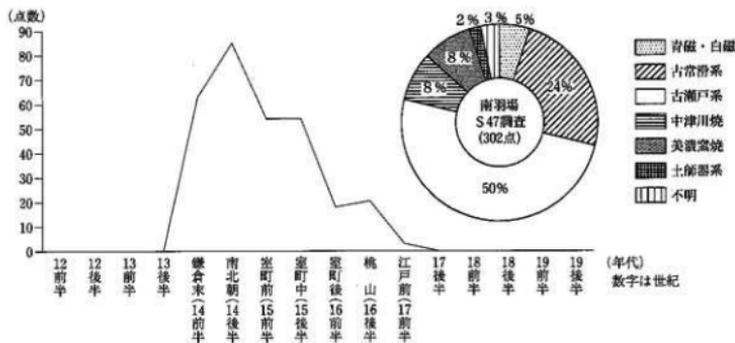


図51 南羽場国道部分 (昭和47年調査) の年代別遺物点数と遺物構成 (右) 文献4より作成

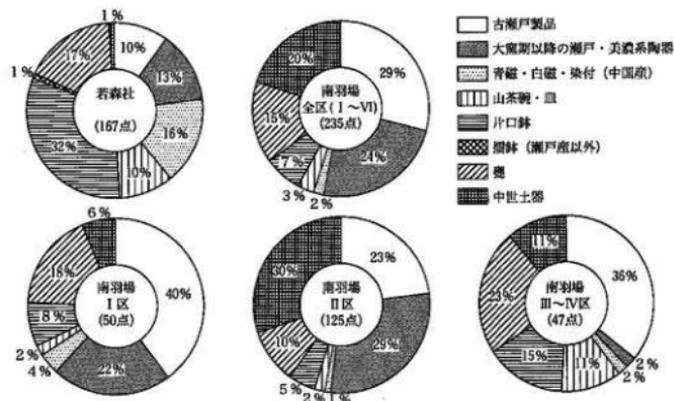


図52 各調査区の出土陶磁器・中世土器構成

圖 版



写真18 若森社壱穴上部配石（北西から）



写真19 若森社壱穴上部配石



写真20 若森社竪穴下部配石（西から） 竪穴外の石は取り上げたもので無関係



写真21 若森社竪穴周辺（南西から）



写真22 若森社竪穴断面と下部配石（北東から）

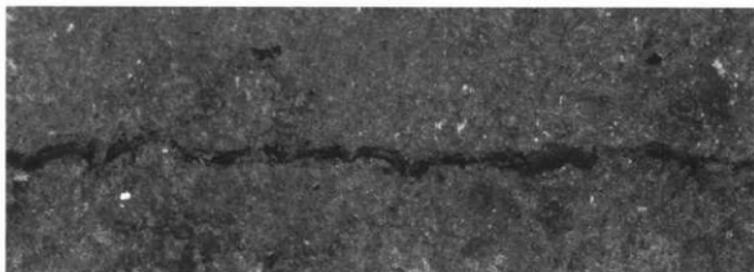


写真23 若森社竪穴上部竹垣状遺構



写真24 若森社土坑6



写真25 若森社土坑9配石



写真26 若森社土坑26・27・28・29 (南東から)



写真27 若森社土坑27

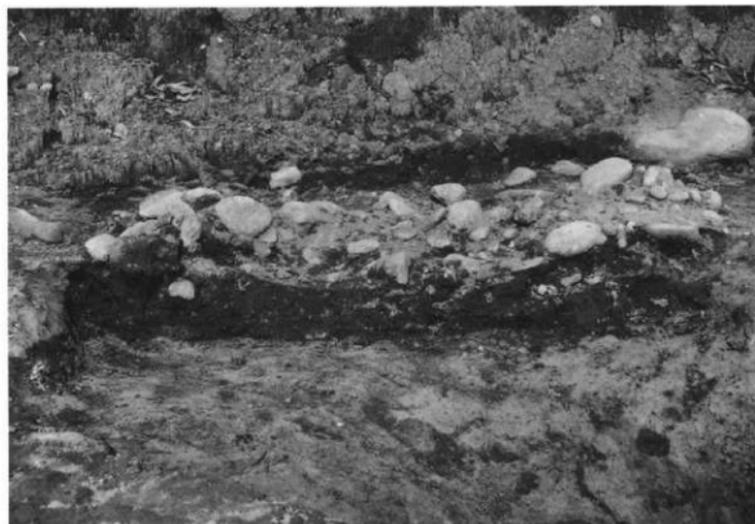


写真28 若森社土坑27断面



写真29 若森社土坑30



写真30 若森社土坑31

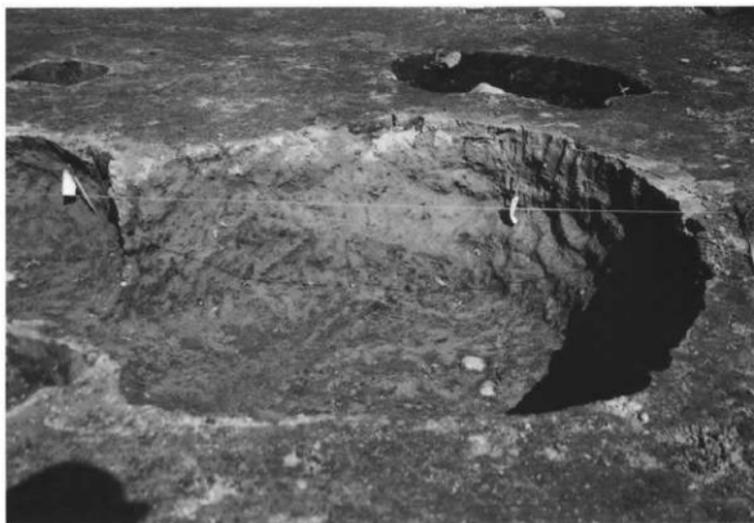


写真31 若森社土坑32

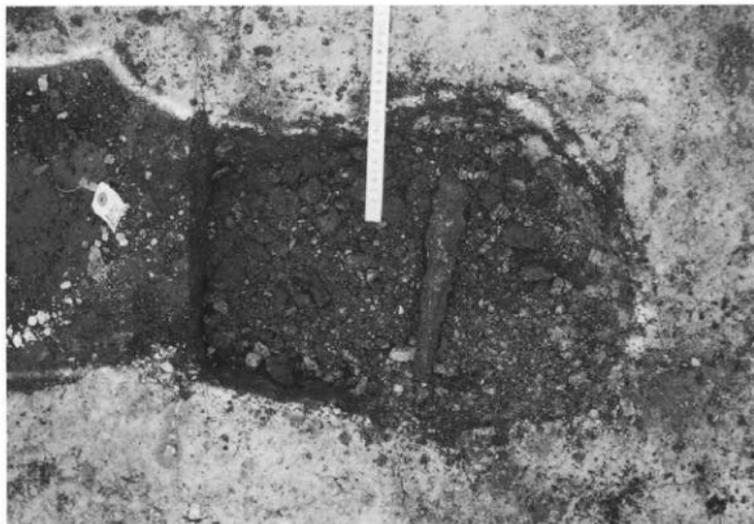


写真32 若森社柱穴17鉄製品出土状況



写真33 若森社柱穴59



写真34 若森社柱穴86遺物出土状況



写真35 若森社柱穴124遺物出土状況



写真36 若森社弥生埋壘周辺の土坑（西から、土坑12・13・14・15・16）

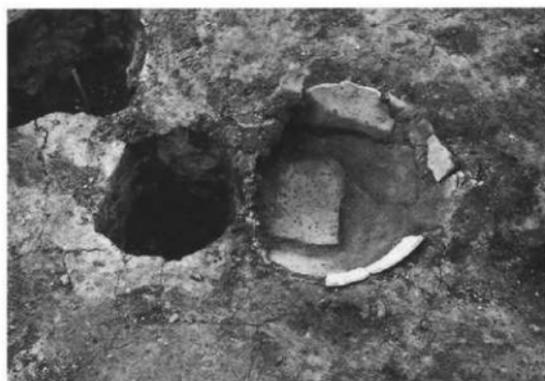


写真37 若森社弥生埋壘



写真38 若森社弥生埋壘断面



写真39 南羽場Ⅰ区輪囲い石積土坑



写真40 南羽場Ⅱ区礎石をともなう建物址(西から)



写真41 南羽場Ⅱ区柱跡5・11・12・13(E列、南から)



写真42 南羽場Ⅱ区柱跡10



写真43 南羽場Ⅱ区柱跡7

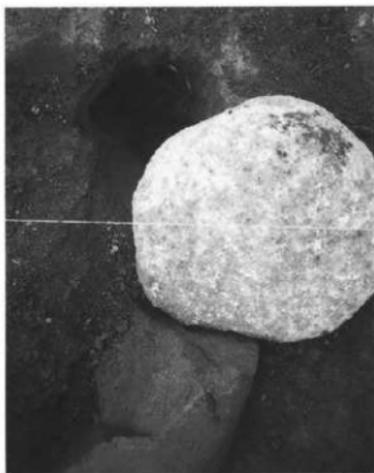


写真44 南羽場Ⅱ区柱跡17

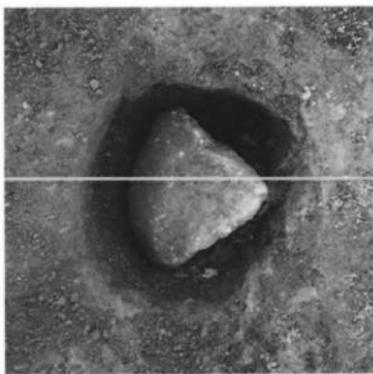


写真45 南羽場Ⅱ区柱跡13



写真46 南羽場Ⅲ区調査風景（北東から）



写真47 南羽場IV区1号住居址上部配石（北から）



写真48 南羽場IV区1号住居址下部配石（北から）



写真49 南羽場Ⅳ区1号住居址（北東から）



写真50 南羽場Ⅳ区1号住居址炉状遺構



写真51 南羽場Ⅳ区2号住居址（南西から）



写真52 南羽場Ⅳ区2号住居址炉状遺構



写真53 2号住居址炉状遺構山茶碗出土状況



写真54 南羽場IV区3号住居址(北から)



写真55 南羽場Ⅳ区5号住居址(北から) 奥は1号住居址

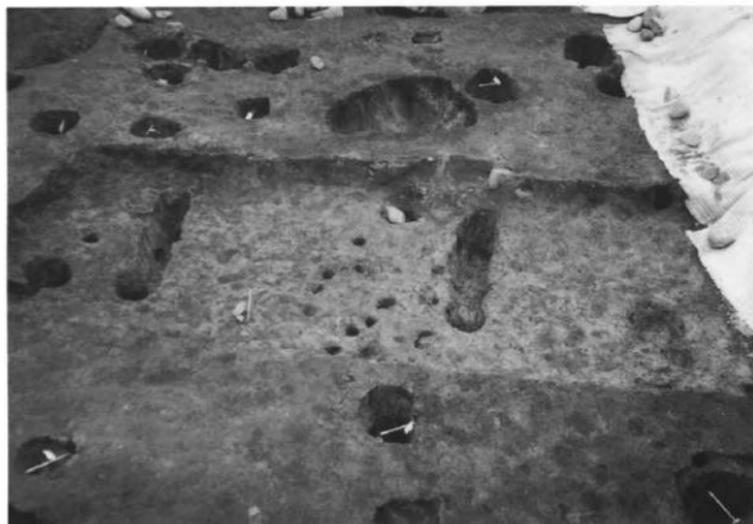


写真56 南羽場Ⅳ区1号整穴状遺構

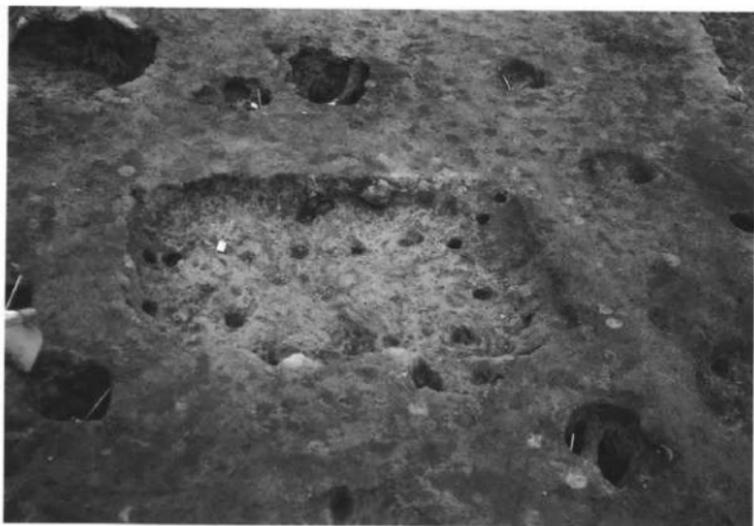


写真57 南羽場Ⅳ区土坑1



写真58 南羽場Ⅳ区土坑2



写真59 南羽場IV区土坑3



写真60 南羽場IV区土坑4



写真61 南羽場IV区土坑5



写真62 南羽場Ⅳ区土坑8



写真63 南羽場Ⅳ区土坑9・13(南東から)



写真64 南羽場Ⅳ区土坑10・11(北から)



写真65 南羽場V区東側（西から）



写真66 南羽場V区溝状遺構と土坑1（東から）



写真67 南羽場V区土坑1



写真68 南羽場V区土坑2